初期キャリア研究者の研究活動環境とニーズ

―初期キャリア研究者に対する調査報告書―

２０２３年3月

一般社団法人　日本社会福祉学会
研究支援委員会

目　次

第Ⅰ部　本事業の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

1. 事業実施目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2. 実施方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第Ⅱ部　インタビュー調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第１章　インタビュー調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

1. はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

2. 研究の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

3. 先行研究・調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

4. 研究の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

5. 倫理的配慮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第２章インタビュー調査結果と分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

1. 研究協力者 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

2. 図解化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

3. 図の説明 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第３章　考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

第Ⅲ部　アンケート調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第１章　アンケート調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

1. 調査目的と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

2. 倫理的配慮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第２章　アンケート調査結果と分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

1. 集計結果と分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

2. 自由記述の分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

第Ⅳ部　提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

1. 日本社会福祉学会への提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

2. 社会・教育機関への提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

第Ⅰ部　本事業の概要

1. 事業実施目的

日本社会福祉学会（以下、本学会）では、常勤職につけず経済的に不安定な状態において業績を上げなければならない若手研究者や、仕事と家庭の両立に時間的制約が課せられやすい女性研究者に対するサポートの必要性が認識されてきた。そこで、現在の研究支援委員会の前身である「若手・女性研究者に対する支援検討委員会」によって、「若手・女性会員の支援のあり方に関するアンケート調査」が 2017 年に実施され、その結果をふまえた提言をもとに、大会費減免や若手研究者のためのワークショップ等が実施されてきた。

しかしながら、本学会に限ることではないが、本学会への新規入会者は減少を続け、若手・女性研究者の研究活動環境が向上しているとは言い難い状況が続いていると考えられる。また、前述の調査でも課題として認識されていた、年齢を問わない研究経験における「若手」や 40 歳以上の女性会員の実態把握についても、実施する必要があると考えられた。そこで、「若手・女性研究者に対する支援検討委員会」の活動を引き継ぎながら、その後継委員会である「研究支援委員会」が、調査対象を初期キャリア研究者と設定したうえで、調査を実施することとした。初期キャリア研究者とは、大学院修士課程・博士前期課程在学者、博士後期課程在学者、修士課程・博士前期課程修了後おおむね５年以内、博士後期課程修了後おおむね５年以内で研究活動を行なっている者等の、研究をスタートして間もない研究者を指す。

本事業は、この初期キャリア研究者の研究活動環境を把握するとともに、本学会へのニーズを把握することで、本学会としての初期キャリア研究者に対するサポート等の検討を行うことを目的としている。

2. 実施方法

本事業は､初期キャリア研究者を対象としたインタビュー調査とアンケート調査で構成されている。まず、本学会の会員や非会員の初期キャリア研究者に対するインタビュー調査によって、研究活動環境や本学会に対する要望等の質的データを収集し分析することで、初期キャリア研究者の詳細なニーズを把握する。その後、前述の「若手・女性会員の支援のあり方に関するアンケート調査」の調査票をもとに、インタビュー調査の分析結果を加え修正した調査票によってアンケート調査を実施し、本学会の会員や非会員の初期キャリア研究者のニーズを把握する。それら踏まえて、本学会や社会および教育機関への提言をまとめる。

第Ⅱ部　インタビュー調査

第１章　インタビュー調査の概要

1. はじめに

本調査は日本社会福祉学会研究支援委員会が、社会福祉学研究における初期キャリア研究者のニーズの調査を行うことで､初期キャリア研究者への学会としての支援を検討するために行うものである。本論では初期キャリア研究者に該当する者に対してのインタビュー調査を通し、そのニーズを探索的に捉えることを目的とし、さらに、ここで得られた知見を踏まえ、アンケート調査を行い、統計的に広くニーズを把握することを目的としている。

初期キャリア研究者は、その定義によって対象とされるものが異なってくる。しかし、おしなべて言えることは、大学院で学位を取得した後や現場実践の体験をふまえて研究者（あるいは研究職）として自立していくときに、様々な理由から多様な困難が伴うということである。そして、それらの多くに共通の課題が認められる。多くの場合、大学院を卒業したのちに研究に係る常勤職としての職を得ることはほとんどない。良くて、任期付きであったり、非常勤職員であり、経済的に不安定な身分に置かれる。将来の不安を感じざるを得ない。当然、研究以外の業務で多忙となり、研究に専念できない環境でもある。

さらに、この時期は、ライフサイクルにおいても大きな変換点を迎える時期であり、結婚、出産、子育てなど、研究と両立しなければならない課題が多い。特に女性研究者が置かれる環境は女性ということによる不平等な家事等における役割分担が暗黙のうちに形成されているのは否めない。女性研究者は研究者全体で 17.5％であり、圧倒的に少ない（2021 年度科学技術研究調査）のは、女性というジェンダーバイアスによるものが大きい。一方で、本学会においては、社会福祉学という特徴から、女性研究者の割合が 50％弱であり、研究者全体からみると相対的割合は非常に高い。この点から言えば、本学会として女性研究者の置かれている環境を理解し、適切なサポートを進めていくことが一層求められているのである。

これらを踏まえ、日本社会福祉学会研究支援委員会では、初期キャリア研究者、若手研究者のニーズを把握することで、本学会として取り組むべき課題を提案してきた。

今回の調査では、前回に行われた調査（日本社会福祉学会若手・女性研究者に対する支援検討委員会 2018）が、初期キャリア研究者（報告では若手研究者とされている）を 40 歳未満として調査したことに対して、今回は年齢で区切るのではなく、「大学院修士課程・博士前期課程及び、博士後期課程在学者、加えて、大学院終了後 5 年以内の者を対象」とすることで、実際の研究年数を考慮した調査とした。社会福祉学研究の特徴として、現場を経験する中で研究を志向する者も多く、年齢で測れない対象者の初期キャリア研究者としてのニーズを掘り起こすことができると考えた。また、前回は本学会会員に対しての調査であったが、会員以外のニーズを把握することで、本学会が果たすべき役割がより明らかになると考え、調査の対象を非会員にも拡大させている。

2. 研究の目的

改めて、本調査の目的は社会福祉研究に関わる初期キャリア研究者のニーズを把握することで、日本社会福祉学会としていかに初期キャリア研究者をサポートし、もって研究者の育成に資することができるのかを検討するものである。なお、ここでいう初期キャリア研究者とは便宜的に「大学院修士課程・博士前期課程及び、博士後期課程在学者、加えて、大学院終了後 5 年以内の者を対象」としているが、明確な基準を設けているわけではなく、調査結果も幅広い対象に貢献するものであると考えている。

3. 先行研究・調査

先行調査として「若手・女性研究者の研究・生活の現状と研究の促進に向けた課題－若手・女性会員の支援の在り方に関するアンケート調査報告書－」(2018 年 3 月 31 日日本社会福祉学会若手・女性研究者に対する支援検討委員会) がある。

本調査では若手を「年齢的にも研究年数的にも若い層」と「研究年数的な若手」と二つと捉え、調査では 40 歳未満の会員に対して広範なアンケート調査を実施している。当時の本学会会員数 4795 人、さらに 40 歳未満の会員 986 人の内、回答者は 182 人であった (18.5%)。調査では、回答者の属性、研究活動の状況、生活の状況、研究の環境、学会への参加、将来展望と研究を続ける動機等について概観したのちに、研究時間に専念できる時間、研究費、研究環境への総合的な満足度、全国大会への参加、研究者としての不安と展望をまとめている。さらに、初期キャリア研究者、若手研究者の中でも、常勤教員、任期付き教員、大学院生、現場実践者、非常勤講師・研究院・その他、として、それぞれの属性ごとの課題を明らかにしている。

これらを踏まえ、「日本社会福祉学会への提言」として①学会参加における支援②大会における支援③研究推進における支援、さらに「社会・大学の在り方に対する提言」として、①若手研究者の業務過多の是正②研究評価基準の作成③若手、任期付き教員、現場実践者の雇用不安への対応④ハラスメントのない環境づくり⑤プライベートと研究の両立支援について、提言をまとめている。

4. 研究の方法

本調査のリサーチクエッスチョンは「研究者を目指すプロセスと初期キャリア研究者としての課題、ニーズを教えてください」であり、自由面接とした。そして、インタビュー結果は質的統合法の手続きを参照しながらまとめていった。研究協力者は、本委員会の紹介によりなるべく多様な立場の初期キャリア研究者を選択するように努めた。実務的に 5 人の委員が、初期キャリア研究者のニーズをインタビューするということとなり、再インタビューができない状況の中での考察としたため、抽出されたデータに限ってのまとめを行う必要性があり、質的統合法の手続きを参照することが適切であると判断した。

5. 倫理的配慮

本調査に当たっては、立正大学社会福祉学部倫理審査委員会の承認を得て行った。そして、インタビュー実施時に、インタビュー対象者の権利等について説明したうえで、承諾書にご記入いただいた。（資料１）

第２章インタビュー調査結果と分析

1. 研究協力者

研究協力者は次のとおり 8 名である。先述した通りインタビューは、本委員会の委員がランダムに選んだ対象に対して行った。インタビュアは 5 人である。なお、選ばれた大学院生が論文等の指導教官である場合は、別の委員がインタビューを実施した。研究協力者は表のとおり現場の実践者が 6 名であった。日本社会福祉学会会員以外からもインタビューを実施している。結果として、現場実践者が多かった。

表 1

	調査時点での職歴・研究歴	年代	備考
1	博士課程在学・アルバイト	30代	
2	博士課程修了・助教	40代	会員
3	福祉現場で働きながら修士課程修了・MSW	50代	
4	福祉現場で働きながら修士課程修了・団体	20代	
5	福祉現場で働きながら修士課程在学・福祉職公務員	30代	
6	修士課程修了・MSW	30代	
7	福祉現場で働きながら修士課程在学	30代	
8	福祉現場で働きながら修士課程在学	30代	

2. 図解化

図 1 の通り図解化（骨組み図）することができた。詳細版（表札付）は図 2 として示した。

図 1

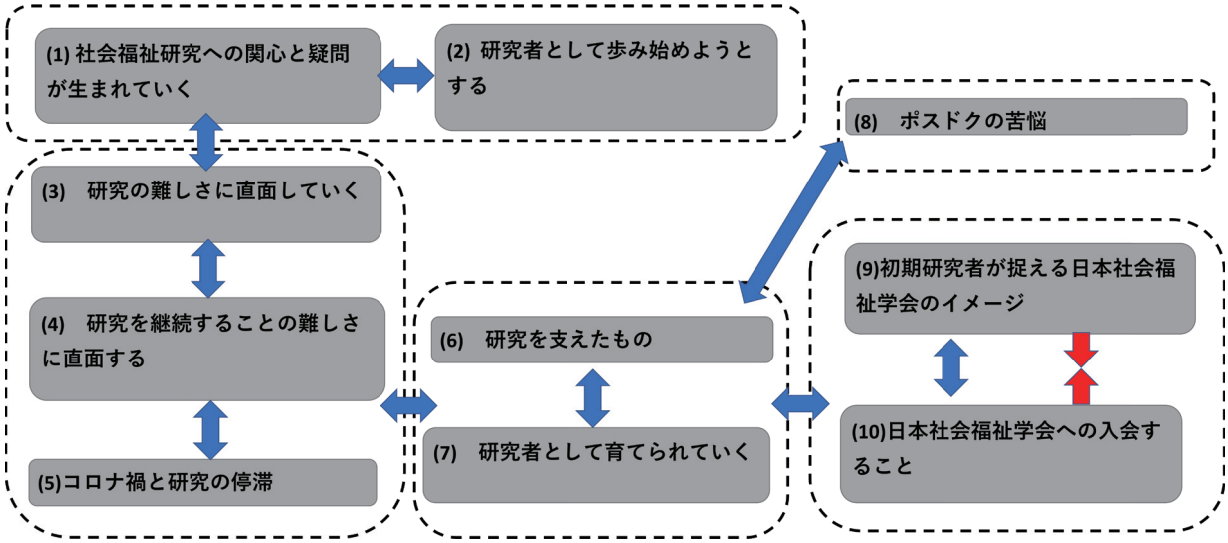


図 1 の点線の囲いは意味のまとまりを示してある。

本インタビューで得られたデータによれば、研究者を志す者は、まず、実践に関わる中であるいはマスコミ報道や社会問題に接する中で「(1) 社会福祉研究への関心と疑問が生まれていく」ことによって、それらの関心を何らかの研究を通じて明らかにしたいというモチベーションから「(2) 研究者として歩み始めようとする」。

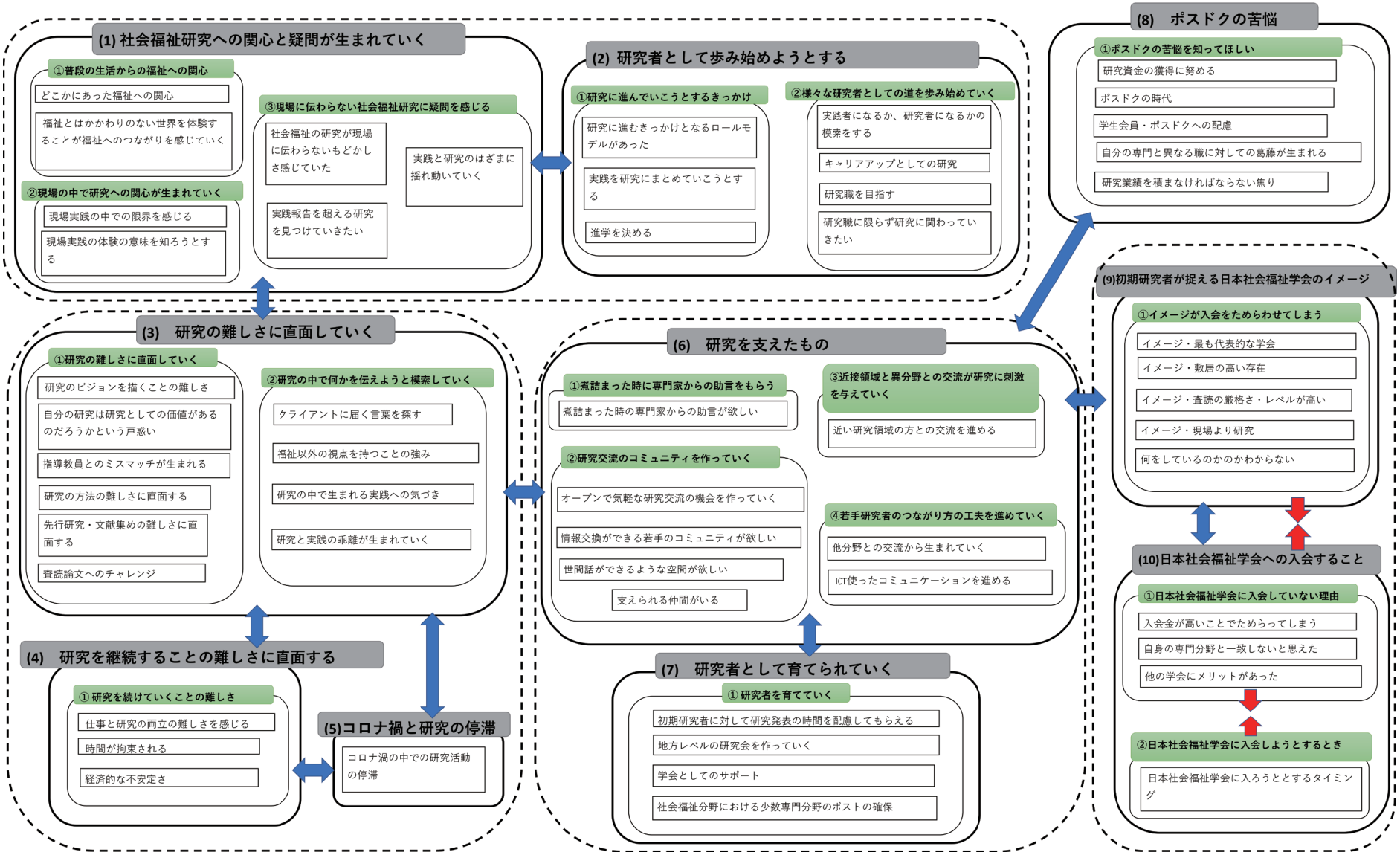
しかし、初期キャリア研究者としての歩みを始めようとすると、研究とは何か、どのように進めていけばよいのかという「(3) 研究の難しさに直面していく」とともに、初期キャリア研究者の置かれている様々な背景、仕事との両立、家事との両立、経済的困難などから「(4) 研究を継続する難しさに直面する」ことがある。近年はとりわけ「(5) コロナ禍と研究の停滞」という要素が加わっている。

そのような困難を抱えながらも初期キャリア研究者の「(6) 研究を支えたもの」があり、その中で少しずつ「(7) 研究者として育てられていく」体験をしていく。これらは、初期キャリア研究者としての困難と相互に影響しあって展開される。「(8) ポスドクの苦悩」は、その中で、特筆すべき研究者としての困難になっていくため別の島が用意された。

このようなストーリーの中で、初期キャリア研究者は学会という存在に出会っていく。その中には「(9) 初期キャリア研究者が捉える日本社会福祉学会のイメージ」があり、「(10) 日本社会福祉学会への入会すること」の判断がある。

学会は初期キャリア研究者が抱える困難と葛藤に応えることができるのであろうか。

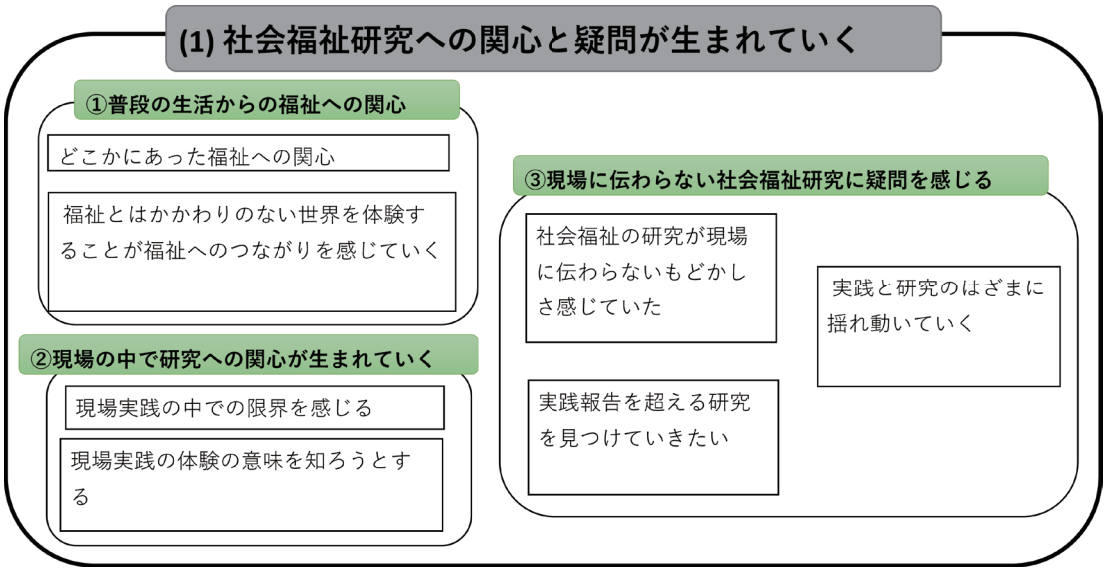
図2


(1) 社会福祉研究への関心と疑問が生まれていく
①普段の生活からの福祉への関心
どこかにあった福祉への関心
福祉とはかかわりのない世界を体験することが福祉へのつながりを感じていく
②現場の中で研究への関心が生まれていく
現場実践の中での限界を感じる
現場実践の体験の意味を知ろうとする
③現場に伝わらない社会福祉研究に疑問を感じる
社会福祉の研究が現場に伝わらないもどかしさ感じていた
実践報告を超える研究を見つけていきたい
実践と研究のはざまに揺れ動いていく
(2) 研究者として歩み始めようとする
①研究に進んでいこうとするきっかけ
研究に進むきっかけとなるロールモデルがあった
実践を研究にまとめていこうとする
進学を決める
②様々な研究者としての道を歩み始めていく
実践者になるか、研究者になるかの模索をする
キャリアアップとしての研究
研究職を目指す
研究職に限らず研究に関わっていきたい
(8) ポスドクの苦悩
①ポスドクの苦悩を知ってほしい
研究資金の獲得に努める
ポスドクの時代
学生会員・ポスドクへの配慮
自分の専門と異なる職に対しての葛藤が生まれる
研究業績を積まなければならない焦り
(3) 研究の難しさに直面していく
①研究の難しさに直面していく
研究のビジョンを描くことの難しさ
自分の研究は研究としての価値があるのだろうかという戸惑い
指導教員とのミスマッチが生まれる
研究の方法の難しさに直面する
先行研究・文献集めの難しさに直面する
査読論文へのチャレンジ
②研究の中で何かを伝えようと模索していく
クライアントに届く言葉を探す
福祉以外の視点を持つことの強み
研究の中で生まれる実践への気づき
研究と実践の乖離が生まれていく
(6) 研究を支えたもの
①煮詰まった時に専門家からの助言をもらう
煮詰まった時の専門家からの助言が欲しい
②研究交流のコミュニティを作っていく
オープンで気軽な研究交流の機会を作っていく
情報交換ができる若手のコミュニティが欲しい
世間話ができるような空間が欲しい
支えられる仲間がいる
③近接領域と異分野との交流が研究に刺激を与えていく
近い研究領域の方との交流を進める
④若手研究者のつながり方の工夫を進めていく
他分野との交流から生まれていく
ICT使ったコミュニケーションを進める
(9)初期研究者が捉える日本社会福祉学会のイメージ
①イメージが入会をためらわせてしまう
イメージ・最も代表的な学会
イメージ・敷居の高い存在
イメージ・査読の厳格さ・レベルが高い
イメージ・現場より研究
何をしているのかのかわからない
(10)日本社会福祉学会への入会すること
①日本社会福祉学会に入会していない理由
入会金が高いことでためらってしまう
自身の専門分野と一致しないと思えた
他の学会にメリットがあった
②日本社会福祉学会に入会しようとするとき
日本社会福祉学会に入ろうととするタイミング
(4) 研究を継続することの難しさに直面する
① 研究を続けていくことの難しさ
仕事と研究の両立の難しさを感じる
時間が拘束される
経済的な不安定さ
(5)コロナ禍と研究の停滞
コロナ渦の中での研究活動の停滞
(7) 研究者として育てられていく
① 研究者を育てていく
初期研究者に対して研究発表の時間を配慮してもらえる
地方レベルの研究会を作っていく
学会としてのサポート
社会福祉分野における少数専門分野のポストの確保

3. 図の説明

(1) 社会福祉研究への関心と疑問が生まれていく

この大きな島は研究者を志そうとするきっかけについての語りがまとめられた島になっている。



①普段の生活からの福祉への関心

＜どこかにあった福祉への関心＞

それぞれのよって立つ理由はあっても、社会福祉に対して「元々関心はあり」、また、「ずっといろいろなボランティアをやってたんです」と、何らかの社会活動が、社会福祉に携わりたいという思いを潜在させていた。その中で「テレビで児童虐待のニュースを見たことをきっかけに、児童相談所の職員になろうと思って大学の学部に入り直したのが、今の研究活動につながる始まり」です、というように社会福祉に対しての関心が、具体的な行動に移っていくきっかけとなったり、社会福祉分野に進む動機を高める出来事などが存在していた。

＜福祉とはかかわりのない世界を体験することが福祉へのつながりを感じていく＞

しかし、一方では「一度団体職員というか、そういう形で就職をしまして」「全く関係なく、インドネシアの文化とか芸術を学んでおりました。」「（インドネシアのガムランという音楽は）違いを許容してみんなで調和を保っていくことです」「（結末がわかっていてもおはなしを聴くことを楽しむ文化はどこも共通で）この国が遅れているとかそういう先入観で見るっていうのは違うんです」などの、一見、福祉とは関係のないように見える職業、体験が、「根っこのところが全部福祉とこうすごくリンクするので、そのときはそういう文化を学んで良かったなと思ってます」というように、福祉への関心につながっていったことが語られ、とても興味深い。

②現場の中で研究への関心が生まれていく

上記の＜どこかにあった福祉への関心＞＜福祉とはかかわりのない世界を体験することが福祉へのつながりを感じていく＞は、社会福祉への関心であり、社会福祉の研究者への関心はそれ以後となるが、ここでは、実際の社会福祉の現場にいる中での体験が社会福祉研究の萌芽となっていることがわかる。

＜現場実践の中での限界を感じる＞

「やはり病院だけじゃ今や療養者の支援をするのに解決しないということで、なかなか病院の中にいても満足な支援ができてないんじゃないということで気持ちがいろいろぐらついてた」という現場実践の中での限界を感じる体験が、実践者としての新たな探求のモチベーションになってもいった。

＜現場実践の体験の意味を知ろうとする＞

さらに、「みんな価値あることやってると、私もそうだし、他の仲間たちも絶対にMSWとしてのスキルと勘等を生かしながら絶対に貢献するものをやってるに違いないと思いつつ、それが何なのかも分からない」「このままやった実践が流されちゃいけないというところで、じゃあ、何をやっているのかを明らかにするというか、どうやって、これは何を意味してるのかっていうとこからですけれども探ることをやってみようって」「ただ、今、現場にいて、新しい、自分のテーマをもう少ししっかりして、現場でも、いろんなもの、できればなっていうの」「地域に出て、じゃあ何ができるのかっていうとこでかなり仕事上でやれることあるんだって確信はあるんですけれども、なかなかそれがやっぱりどの本見てもこんなことがやれるんだって書いてあるものがなくて、自分の実践をまとめるしかないなっていうふうにちょっと思ってたときと重なってたんです。」「もちろん患者さん家族からの相談は受けるんですけれども、結局それで終わらせちゃいけないんです。そこに通底する課題を見つけて、そういった課題に関して地域の多職種で検討できる場にその課題を上げて議論をしてもらって、じゃあ、どんな形で、個別のネットワークはもういいと、個別のネットワークも不十分っていえば不十分なところは幾つもあるんですけれども、じゃあ、みんながそういった地域で支える仕組みづくりといいますか、を、していくにはどうしたらいいかっていうところの組み立てをしなきゃいけないっていうんですよね。」

現場の実践者は、自身が大切な体験をしているにもかかわらず、あるいは、現場だから感じる体験をしながらも、そのことがカタチになっていかない、他の実践者と共有できないことを感じていた。だからこそ＜現場実践の体験の意味を知ろうとする＞ことに、強い関心をいだくことになっていった。

③現場に伝わらない社会福祉研究に疑問を感じる

＜社会福祉の研究が現場に伝わらないもどかしさ感じていた＞

一方では、「何ていいますか、社会福祉系だからですかね。何かあまりその研究の世界がどんなことやってるかとか、実践とつながってるんだよっていう部分があまり明るく正しく伝わってないような気がします。」「いまひとつその学問的に検証されてないというか、何かこれは私たちのやってることを支えてくれる理論っていうものはないのかっていろいろ見るんです」というように、社会福祉研

究が実践との間に一定の距離を感じていたということがあった。

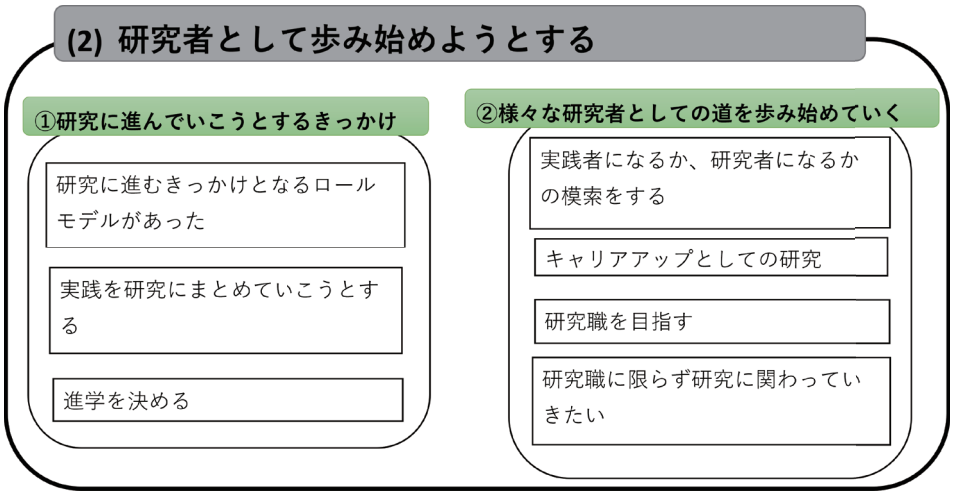
＜実践報告を超える研究を見つけていきたい＞

と言いながらも、現場では「実践報告はいっぱいあるんだけど理論的なものはまだまだで遅れてる・・・と思って」「次の MSW の人が地域に出て何かやろうとしたときに、こういう手法があるんだっていうことがある程度分かるような形で何か残せるといいかなという」、実践を研究によって形あるものにしていきたいという動機になっていった。

＜実践と研究のはざまに揺れ動いていく＞

実践と研究というテーマを抱え、「実践をしてるだけとか、研究をしてるだけとかっていうのが、かなりバランスが悪いなってような感覚があって、今している実践を客観的に、研究とかをする中で評価をしたりとか、可視化したりとか、より実践が良くなるみたいなことは、研究が補えるところが大きいなっていうふうに思う」「制度、政策とかみたいなことを考えると、研究が担えるところは大きいなっていうふうに思うんで、制度と政策と実践をつなぐという意味でも、研究はかなり重要なんだろうなっていうふうに思ってます」「その間（研究と実践）の接着点になりたいみたいな感覚」を抱き、＜実践と研究のはざまに揺れ動いていく＞ことになっていく。

(2) 研究者として歩み始めようとする



①研究に進んでいこうとするきっかけ

＜研究に進むきっかけとなるロールモデルがあった＞

研究者を志すきっかけには「職場の先輩とかでも大学院に仕事しながら通ってる方がいたりして、自分も挑戦してみようかなと思った」「先輩の存在はおっきかったかなっては思います」というような、身近に＜研究に進むきっかけとなるロールモデルがあった＞としている。

＜実践を研究にまとめていこうとする＞

そして、いよいよ実践を研究としてまとめていこうとする。

「研究ってこうやってやるんだなっていうお作法っていいますか、考え方といいますか、スキルをひととおり身に付けさせてもらったと思ってるので、そういうことを学ぶともっといろんなことを、何ていうか、次の世界が広がるよっていうようなことが分かれば研究やってみようと思う。」「自分の客観的な立ち位置とかっていうのも分からないままだったので、もう少し自分が、何ていうんですかね、どんなことをできて、どんなことができなくて、みたいなことを現実的に考える必要があるかなっていうふうに思っていた」「ホームレス支援もやったことあるし、保健所でも勤務したことあるしっていうふうな、精神保健と貧困の問題を強く関連付けて考えている人って、あんまり出会ったことがなくて。でも、僕の中では、先ほど申し上げたとおり、もう一番最初からそれが一番大事なんじゃないかって、思い込みみたいなものですけど」「アピールしたいというか、1つ形にしたいというか」「貧困状態にある人たちの心のケアっていう見方も含めて、少し考えてみたいなっていうところです」「精神保健福祉士の、そうですね、精神保健福祉士の職能団体の中で、精神保健福祉士にも貧困問題にもっと興味を持ってもらいたいっていうのは1つあります。それをどういう形でアピールするかってなると、やっぱり研究という形で論文を作ったりとか、あとは、何でしょう、論文も含めてですけど、その理論を少し固めて、その研修の講師じゃないですけど、ちょっとそういう話をして、みんなで一緒に考える機会をつくったりしたいとは思いました」「私としては、実践者でありながらリサーチャーでもなければならないと考えております。特に研究等行うに当たって、自分が行っている実践の評価がまずできないとできないと思っています。」「やっぱりエビデンスがないと、どういうふうに、自分の実践の効果が示せないってことをすごく強調され、おっしゃっていたことをすごく記憶してます」と実践を研究に展開していく動機を話している。

＜進学を決める＞

これらの動機から、大学院に行くという決心により、具体的に研究者となっていく道を歩み始めていくことになる。

「進学、もう一回ちょっと考えてみようかって思って」「これは私は自分の実践をまとめて残すだけでも価値があるだろうと思って大学院に入ったっていう経緯」「大学院に進学したいっていう漠然としたものっていうのは、ずっとあったんです。いつから思ってたかっていうとちょっと分かんないですけど」という。

②様々な研究者としての道を歩み始めていく

＜実践者になるか、研究者になるかの模索をする＞

実践者が研究を志すとき、実践者か研究者のどちらに軸足を置くかというような葛藤を抱えることになる。

「それこそ実践者になるか、研究者になるかっていう意味では、実践者として模索をちょっと最初してたんです」「やっぱ現場に入ってしまうとちょっといろいろ考えさせられることもあり」「実践と研究をちょっとどうしようかっていう。1回、研究のほうで頑張ってみようかっていうような感じ」があったという。

＜キャリアアップとしての研究＞

現在の仕事のキャリアアップとして、研究を捉えていることもあり、多様な捉え方がうかがえる。

「県の職員になったぐらいからキャリアアップを考えて」「大学院に行って、やっぱりこのずっと考えてることを、せっかく考えてるんだからちょっと深めてみたいっていうのが、そこでつながった感じですかね」

＜研究職を目指す＞

さらに、一歩進んで、研究者から、研究職としてのキャリアを考えている場合もある。

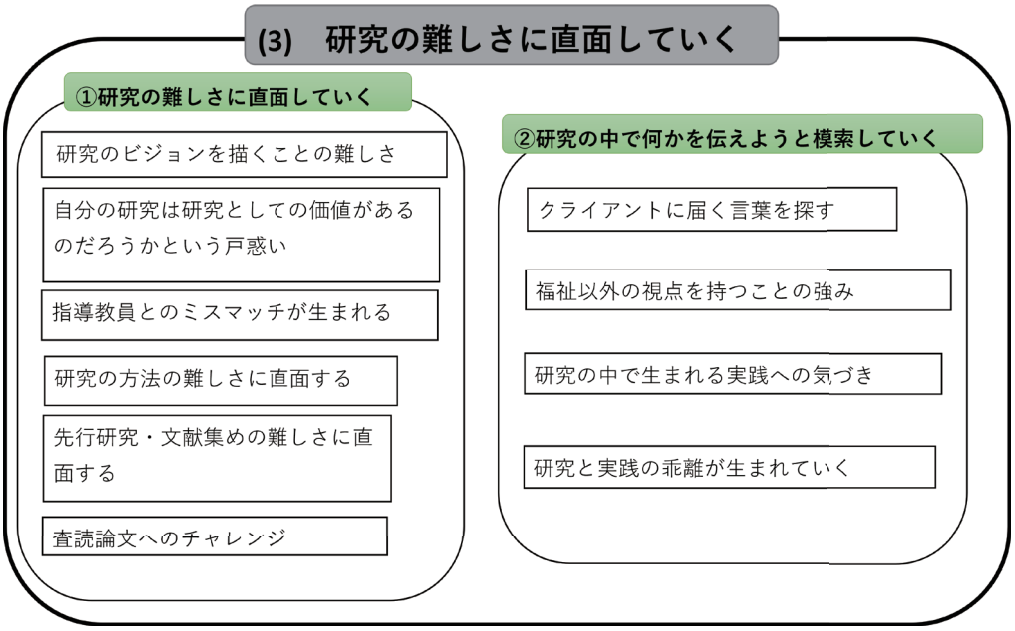
「例えば専門学校だとかで、次の人たちにちょっと教えていくような仕事ができればなというのは少しは、少し考えています。」

＜研究職に限らず研究に関わっていきたい＞

しかし、一方で研究職としての道筋への困難さから、研究職だけを目指すということも現実的には困難であるとの意見もあった。

「大学のこのポストとか、大学の先生みたいな、それ、現実的にも厳しいだろうとかいうのもあるので、そういうところは、そのときのタイミングというか、いろいろ、そういう形で。そこまで、だからそこが、すごく最終目標ということではなく、いろいろ機会があればっていうような形では考えております」「大学での非常勤講師は本当に研究活動につながっていくようなものをさせていただいていました」

(3) 研究の難しさに直面していく



ここでは、研究活動を実際に始めていく中での困難が語られている。

①研究の難しさに直面していく

＜研究のビジョンを描くことの難しさ＞

研究計画、そのデザインを作っていこうとするとき、「ちょっとビジョンを描くのが難しいところではあるんです」「やっぱりリサーチクエスチョンを作る過程っていうのが、すごく戸惑った記憶があります。特に、自分の課題が何なのかっていうのを明らかにしたいという思いはあるけど、」「研究をどうフィードバックするかっていうところ」「社会福祉専攻してる中で、それをテーマにするのにどこに焦点を当てたらいいのかっていうところはやっぱり悩みます。」という課題に直面することになっていく。

＜自分の研究は研究としての価値があるのだろうかという戸惑い＞

自分がやろうとする研究の価値に悩み、「漠然としていて、それが社会的に意義あることなのか、それとも、研究のプロセスとして妥当なのかっていうとこは全く分からないまま進めてくっていうのが、やはり戸惑いがありました。」「本当に価値があるかどうか、こんな発表してもいいのかなとか、どう人から評価されるのかっていうのは、すごくやっぱり恥ずかしい思いもありながら作っていたので、そこはすごく困難に感じていました。」という。

＜指導教員とのミスマッチが生まれる＞

思い描いた自身の研究計画と、自信が所属する「指導教員と、要するにその入ってきた学生のやりたいことのミスマッチで悩んでる姿」も観たという。

＜研究の方法の難しさに直面する＞

さらに、研究方法、研究の作法について悩む中で「抄録とかを作り上げる文章の整理の仕方っていうのがなかなか、決められた文字数で説明しなければいけないので、すごくそこが苦手意識」を感じ、「あと、研究計画書の作り方っていう部分に関してですが、やはり、なかなか自分の中で整理できないとき、人の力を借りてブレーンストーミングしながら整理してくっていうプロセスは、私は非常に重要だと思っています。」との意見もあった。

＜先行研究・文献集めの難しさに直面する＞

初期キャリア研究者には、研究の方法論において「先行研究の調べ方がやっぱりすごく苦労してます」「国会図書館の使い方」「原著に当たりたいけど、原著が探せないっていう、それがいつも私も悩んでたところですね。」「ではそこの何をテーマとするかっていうとこで、また見ていくところが変わっていってると思うので、この文献でいいのかなとか、私が知りたいのはこれに載ってるのかなっていうところが分からず、もう、状態で、探り探り。」「やっぱ文献集めるのが、図書館でも、普段いろいろネットで探せても、なかなかちょっと難しいです。」という悩みが聴かれた。

＜査読論文へのチャレンジ＞

査読論文への投稿は、初期キャリア研究者にとっては高いハードルになるが、「査読に関しても、模擬査読みたいな形で、一度他者の目、客観的視点を持って意見を述べてもらうっていう機会が非常に重要だなと思ってます。」と考えていた。

②研究の中で何かを伝えようと模索していく

＜クライアントに届く言葉を探す＞

研究の中で感じていたことは、＜クライアントに届く言葉を探す＞ことであった。研究者だけに通じる言葉ではなく、一般の方、特にクライアントにも届く言葉を探索することが研究者として大切なことであることが語られている。「院内や、協力していただいたクライアントに分かりやすく説明するっていうのは、またそれはそれで難しさがあって、やっぱり職種の違いだとか視点の違いがあると、ソーシャルワーカーはソーシャルワーカーの中で表現すれば分かる言葉とかありますが、それは一般の人に分かりやすく説明してくっていうのがやっぱり非常に苦労したなという、思う点もありました。」実践を研究としてまとめていくとき、クライアント、実践者と共有できる言葉を大切にしていきたいことが語られていた。

＜福祉以外の視点を持つことの強み＞

研究をまとめていくという点においては「別の視点もお持ちなので、考察とかっていうのは幅広くできるんだろうっていう気がします。そう。そうなれるように頑張りたいと思います。」と語られている。前述した＜福祉とはかかわりのない世界を体験することが福祉へのつながりを感じていく＞とつながる意見である。

＜研究の中で生まれる実践への気づき＞

研究を進めていくことが、改めて自らの実践を見直していくという、研究と実践の相互作用が示されている。「理論もそうなんですけど、政策とか歴史とかそういう視点が足りてなかったなということには気付き、ケースワークの支援技術もそうなんですけど、その制度設計がそもそもどういう流れでこういうふうになってたから今こうなんだとかっていう、ちょっと具体的にどうだっていうのはすぐ挙がらないですけど、その辺は面白く感じました。」ここでは、社会福祉実践の支援技術を考えるときに、社会福祉学の諸理論から捉えなおすことで、実践の見え方が変わってくることが語られた。

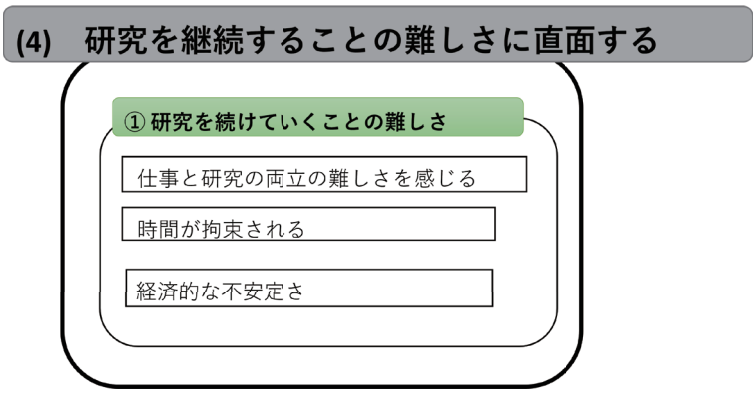
＜研究と実践の乖離が生まれていく＞

その一方で、現場での関心から始めた研究が、研究という手続きを進める中で現場の実感から離れていくという研究と実践の乖離が生まれていったという。

「自分の目指そうとしてるところというのが、日をたつごとにどんどん離れちゃってるなというので、そこ、収束しようとしてもなかなか難しかったりっていうので、今この大学院のほうでやってることと、現場のことが、その乖離（かいり）がだいぶ開いてるところが、やっぱりどうしても悩みど

ころでありますね」「今、現場で、自分のテーマとしてやっていけるかなって思ったところから切り離されてしまった」という体験もある。

(4) 研究を継続することの難しさに直面する



① 研究を続けていくことの難しさ

＜仕事と研究の両立の難しさを感じる＞

ここでは研究と仕事の両立させることの難しさが語られている。

「仕事との両立というか、やっぱその辺は難しい部分というか、あるのかと。やっぱ研究だけに集中するわけにもいかないですし、お仕事もしないとっていう、経済的にもっていうところのバランスとかはあります。」「周りの一緒の大学院に通ってる友人とか看護職の友人なんかだと、やっぱりある程度の組織上の立場もあるもんですから、仕事でへとへとになってる。結構みんな励まし合いながら大学院出て、モチベーション皆さん持ってるんですよ。やっぱり現場でいろいろな問題意識を持ってるから、研究生としても一緒に残ってたりするんですけれども、やっぱりこりゃ難しいわって大学院で燃え尽きたみたいな話になって。」「仕事しながら、日々レポートに追われながらで、何を研究するかも考えながらっていうことで、なかなか、レポート作るので精いっぱいで、研究のほうに・・・全然持っていけてないところがある」という。研究を志しながらも、仕事との両立に困難を抱え「燃え尽き」てしまうことの語りである。

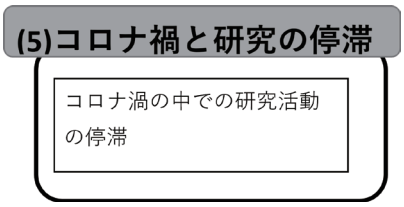
＜時間が拘束される＞

研究職に就いている者であっても、研究とこなさなければならない業務（校務）の中での困難が語られている。「正規で、すごく時間が拘束されるような形ではない」ものの、「事務的なことにものすごく時間を割いて研究に時間が取れない」ことがあるという。

＜経済的な不安定さ＞

さらに、研究を続けていく際の経済的な困難が語られている。「経済的な不安定さっていう意味ではすごく不安定なので、そこが難しいっていう感じです。」

(5) コロナ禍と研究の停滞

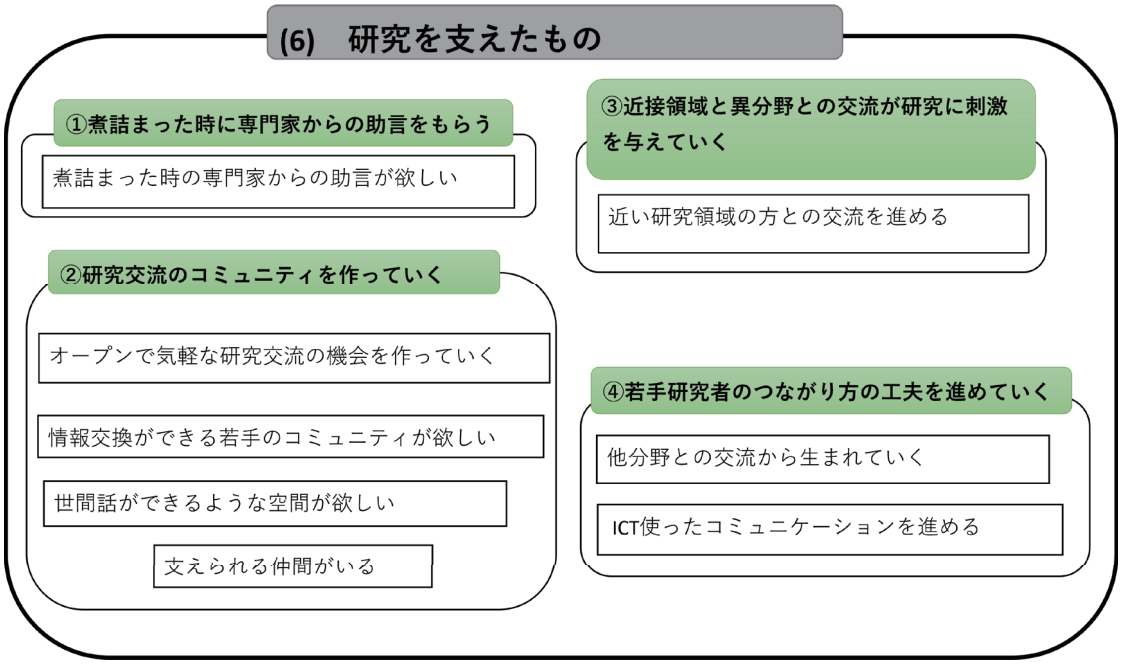


＜コロナ禍の中での研究活動の停滞＞

コロナ禍の中では様々なリモート等による交流が進められる一方、図書館の利用、調査等において大きな影響を与えたことがわかる。

「コロナのこういった状況になってしまったので、なかなか大学に通ったりということもない中で、LINE、こういう Zoom などでのはあるんですけども、その後、やっぱり大学の図書館も使えなかったりだとかっていうと、なかなか地元の図書館だと、探してほしいのが手に入らなかったりだとかっていうのはありました」「学ぶ場所というか、そういった環境が今どうしても得られないっていうか、得にくいといったところも、やっぱり難しさを、何ていうんでしょう、感じさせる１つの要因」「例えば本だとかっていうのが、図書館で、推薦して、例えば自宅まで送って、いついつの期間までに返してくれればだとか、そういったところが多分大学になくても、そこでちょっと何か・・・ある程度、そういったところで借りられるとかっていうようなのだとありがたいですね」「やっぱりコミュニケーションが取れるような、コロナ抜きに考えてしまって、コロナで、オンラインではもちろんなんですけど、そういう交流の場みたいな感じの時間があると」「普通だと、顔、自己紹介もするんですけど、名刺交換とか、個人的にちょっと連絡先交換しましょうとかもできなくて。それがすごいもったいないって思うんで、早く対面で、もっと交流できればいいんですけど、しばらくなかなか、」うまくいかない、実現していないことが語られた。

(6) 研究を支えたもの



①煮詰まった時に専門家からの助言をもらう

＜煮詰まった時の専門家からの助言が欲しい＞

初期キャリア研究者が研究活動に煮詰まった時に、的確に助言を得て、研究を前に進めていくことの期待が語られている。

「やっぱり自身を支えてくれるものは私は大事だと思ってます。最初の研究を始める最初の戸惑いっていう部分ですと、やっぱり支えてくれる方、教えてくれる方が非常に少なくて、苦労しました。それはやっぱり、近くの友人や、同じ現場で働いてる者、上司とかではなくて、実際に研究やってるプロの人に教えてもらいたい。やっぱりプロに教わったほうが、私は非常に利益は高いと感じております」一方でピアによる助言を求める声がある。「例えば煮詰まってしまったときだとかに相談できる、先生とかだとなかなかちょっと敷居が高くて、こんなこと相談していいのかなと思ったりすることもあるんですけど、でも、その中でも、他の人がやってる、そのテーマの中で、あ、これ、自分で、例えば何かヒントになるかなとかっていうのも、」あるという。

②研究交流のコミュニティを作っていく

初期キャリア研究者にとっては、同じ悩みや課題を抱えた仲間が集い、情報交換をしたり、ピアでのコンサルテーション、仲間同士の支えあいなどのニーズが高いことがうかがえる。

＜オープンで気軽な研究交流の機会を作っていく＞

オープンで気軽な研究交流の機会が求められている。大学、研究機関の垣根を越えたオープンな交流が、他分野間で行われることが求められている。

「比較的若手の研究者の方たちが、自分たちで勉強会とか、いろいろ研究会とかされているのが結構印象的だった」「割とオープンに、そういう勉強会とかも開かれてる」「会員でなくても参加できますみたいな」「そこのステージ（仲間と一緒に研究をしよう）に行くまではまだ時間がかかると思うんですけど、もう少し自分自身も、そこで何かを仲間たちとやろうみたいなぐらいまで成長というか、ステップアップできると、何か実感できるのかっていうようなイメージがあります。」「現状のちょっとディスカッションを、15 分とかでもしましょうみたいな時間が設けられてるような、そういうつくりになっている」「なので、先生にも質問できたり、お互い、仲間同士でもちょっとコミュニケーション取れたりとか、そういうのがあると。」「博士課程に進んでる方とか、どんな感じでやってるかとか、そういうのを、何ていうんですか、話聞いてみたいなって思います」「何か交流を持てたりだとかっていう場があったりだとか、例えばもう見た目で分かるような、初期の研究者っていうことですっていうところでの、何かそういったところがあれば、何でしょう、だと思うんですね。」との声である。

＜情報交換ができる若手のコミュニティが欲しい＞

オープンで気軽な研究交流が行われる中で、様々な情報共有がなされていく。研究に係る相互の情報共有であったり、研究に係る環境に伴う情報共有、研究職に就くための情報共有など、多彩なものである。

「情報交換できるような、それこそ同じような立場の、若手同士みたいな人のコミュニティーとい

うか、そういうのがあればっていうこと」「論文を投稿していくとかいうふうなことになったときにも、ちょっとしたそういうことの、お互いに勉強会し合ったりとか、そういうことを助言し合ったりとか、そういう仲間がいると心強い」「結構調査の手法とかが偏っちゃって、それでこう、自分の研究活動とかが制限されてる感覚もすごくあるので、その技術とか、身に付けられたらいいかなっていうふうに思うところ」があるという。

＜世間話ができるような空間が欲しい＞

気軽に話し合うことができるのは、いわばサロンなような空間の中で、世間話ができるほどの雰囲気があることでもある。「世間話ができるような空間が。」「割とお 1 人で黙々とやられてるような印象もあるので、それが、そういう環境でご自分でできる方はいいのかもしれない（私はできない）」

＜支えられる仲間がいる＞

初期キャリア研究者が集まれる場、空間の中で、初期キャリア研究者という仲間が、お互いを支えあえる環境が求められている。やはり、支えあうのは、同じ志を持ち、同じ困難を抱えるピアのサポートと言える。

「それはやっぱりピアサポートじゃないですけど、やっぱり大学院の仲間です。」「分野もばらばらだし、個性もばらばらだし、コミュニケーションちょっと難しいんじゃないかなんて思ってたんですけども、最終的には研究するっていうことを通じてつながって、つながりが強くなって、本当にいろんな面で支え合って最後まで駆け抜けることができたから、やっぱりそういう仲間、仲間を見つけないと難しいかもしれないですね。」「先生がやっぱりうまく仲間を、仲間の場に私を加えてくれたということ」「周りの人が後押ししてくれたので、『いや、そのテーマはやったほうがいい』とか、先生たちは反対してるけど、先生たち、実際の現場知らない人もいるから、これはテーマとしてやったほうがいいとか、何かそういうことがあったので、何か諦めなくて良かったなっていうふうには思うんです」「やっぱり、人のつながりみたいなことかと個人的には思ってます。」「初期キャリアのときからいろんな人とディスカッションをしたりとか、対話をしたりする場があるといいかなっていう感じ」など、支えあう仲間の存在が研究をサポートしていることが語られた。

③近接領域と異分野との交流が研究に刺激を与えていく

社会福祉研究については、近接領域と異分野との交流が研究自体への刺激となり、研究が深められていくことの指摘である。

＜近い研究領域の方との交流を進める＞

社会福祉の近接領域は極めて広いことが特徴である。近接領域の学問、実践領域との交流を進めていくことが、研究を進展させていくとしている。

「自分と近い研究領域の研究者の方がいらっしゃれば、やっぱりその最新の研究の状況というか、動向というか、やっぱりそれの発表はぜひ伺いたいっていうのは 1 個あるので」「理想を言えば、多

分そういう先生（研究領域が近い人）たちとコミュニケーションを取ってっていうことだと思うんです」「（研究領域が近い人との交流が）論文なのか分かんないんですけど、頑張ろうっていうモチベーションにもなる」「他の仲間の研究会の方がいるとか、近い分野の方がいるっていうのは、1つ大きな理由」「こういう研究が求められてるとかってそれぞれあると思うんですけど、そこと私の方向性が違うと、それこそほんとに、分かりやすく言うと、他の方からも関心を持ってもらえないみたいな状況」「発表とか関わっていても、いや、ちょっと違うみたいな雰囲気というか、そういう所はやっぱりちょっと続かないのかっていうふうに思います。」「あと心理学の人とか、法学系とか、医療とかも含めて、いろんな人たちとディスカッションしたり」「社会福祉学だけで何か達成できるっていうのは結構難しい。」近接領域が交差するところに、研究への示唆があると指摘している。

④若手研究者のつながり方の工夫を進めていく

初期キャリア研究者がどのようにつながるのか、ここでは、つながり方の工夫について検討する島となっている。

＜他分野との交流から生まれていく＞

ここでは、近接領域の学問分野に限らない、または、社会福祉の実践領域に限らない異分野との交流が社会福祉研究に貢献することが述べられている。

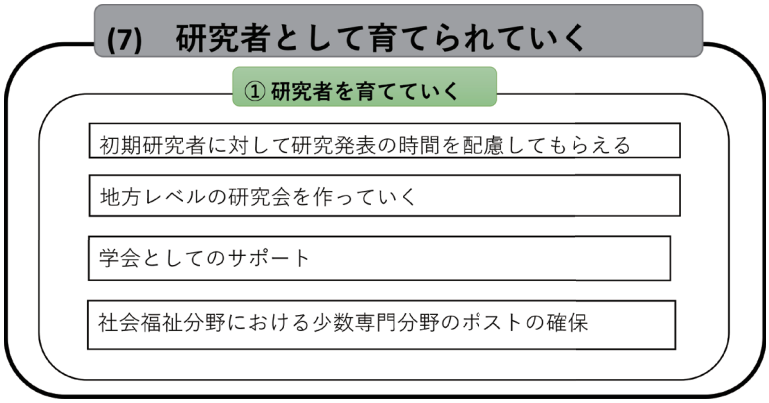
「何かいろんな分野の人たちと話すことで、やっと輪郭が見えてくるみたいなことはあると思うので、何かそういう場があると、もうちょっと早く気付けたかなっていう感覚」「何か、福祉って分野が限定してるイメージがあるので、そう、私、それは嫌だなっていう思いはあるんですね。確かに、そういう福祉の分野ではやってはいるんですけど、普通の民間の会社と関わりながら、新たな事業じゃないですけど、そういった事業かな、やっぱり、携わることができたりとか、それが地域福祉に関係したりとか。」「私がそこで何か役に立てるかどうか分からないんですけど、そんな感じで、福祉って限定しないで、そういうことを広げたいな」という。社会福祉の学問領域が他分野とつながり、交流できることの意義が語られている。

<ICTを使ったコミュニケーションを進める>

つながり方は多彩なつながり方が志向されており、ICTを使った積極的なコミュニケーションを進めることが提案されている。

「(ICT活用したコミュニティへの参加は)1回関係性が出来上がってからのほうが参加しやすいのかな。やっぱ、炎上とか、炎上とか分かんないですけど、今の時代、そういうのもあるので、ちょっと慎重になってしまうところもあったりとかも、しなくもないのかっていう気もします。」「メールとかで気軽に聞けるようなシステムがあるとありがたいなとは思うんですが、ただ、忙しい中で、先生にも負担が大変だとは思うんですけど、何か定期的なやりとりというか、あるとありがたいなとは思います。」

(7) 研究者として育てられていく



この島は、様々な配慮の中で研究者として育てられていくことについて述べられている。

① 研究者を育てていく

＜初期キャリア研究者に対して研究発表の時間を配慮してもらえる＞

初期キャリア研究者にとっては､各種学会での発表のハードルは低くはない。慣れない発表の中で、様々な教育的配慮があることで、学会発表の機会を与えられること等の期待がある。

「例えば別の学会だと、小さめの学会だと、例えば研究発表とかもかなり時間を取って、しっかりと発表をして、その後の講評というのか指導というのか、普通であれば博士課程とかでやるような、それを学会の発表、研究大会とかそういうところでやって、しっかりと指導をしていくみたいなこともされているところがあるらしいんですね。」「発表の機会は自分が・・・それでできるんですけど。そうですね、せっかく研究するんで、やっぱり研究と発表をセットでやるっていうのがいいのかなとは思いますんで、社会福祉学会もそうですし、あとはやっぱり職能団体で自分のやったことを、せっかくやったんで知らせたいなっていう思いは、そういう場は頂けるとありがたいなと思います」「研究を行うに当たって、やっぱり教えてもらえる機会を出していただければ、実際、研究発表したいというところのときに、この学会に入れば、学べる、知れる、基礎を理解できるっていうところがあれば、私は非常に大きなメリットがあると思ってます。」「学会発表する機会ですね」と、研究発表というハードルに対しての配慮への期待が語られている。

＜地方レベルの研究会を作っていく＞

都心にいると学会活動への参加が比較的容易な面もあるが、地方からでは参加が難しい点は否めない。もちろん、リモートなどによる活性化はコロナ禍を経験した研究活動の肯定的副産物ではあるものの、地方レベルでの研究会組織の活性化が期待されるところである。

「関東部会のレベルでそういうこと（制度レベルの研究会）をやるっていう、地方、サブのレベルでそういうお互いにもんでっていうのを定期的にやってもよいのかもしれないですよね。」

＜学会としてのサポート＞

学会という組織においての初期キャリア研究者育成のサポートを期待する声である。

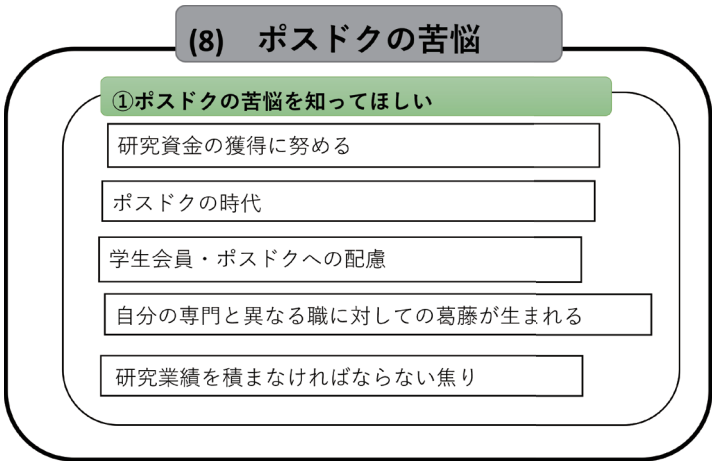
「学会としてサポートするそういう場があるのは院生にとってはすごくいいことじゃないかなと思います。院生が悪いわけではないと思うので、指導を受けなければクリアできないので、その場が学会として確保されるのであればそれはすごくいいことだなと思います。」「それこそほんと、だからこういう研究、・・・そういうサポートを少し求められるような形があると、われわれからすると一番ありがたいかなと思います。」

＜社会福祉分野における少数専門分野のポストの確保＞

これは、社会福研究の中でも研究者が少ない分野の研究者が、特に配慮してもらいたいとする意見がまとめられている。

「その広く社会福祉を学ぶコースにも社会福祉学出身で政策をやっている人のポストがあるといいなって」「社会福祉学でかつ制度政策を専門にしている者の生き残りの道も付けていただいたほうが、今後専門研究者がいなくなっちゃうんじゃないかっていうのは心配をしている」「多様性を尊重しながらも、自分たちの領域のところで研究活動してきた者の生き残りのポストも用意していただけるとありがたいかなと思います。」「社会福祉学の中でも制度政策論をやっていても居場所があるといいなと思って」いたという。

(8) ポスドクの苦悩



ポストドクターが研究職としてのとしての身分が保証される場合は多くはない。非常勤や任期付き職員としての身分の中で、研究活動を進めていくときの困難を語っている。

①ポスドクの苦悩を知ってほしい

＜研究資金の獲得に努める＞

研究業績を積み重ねていくときに必要な研究資金の獲得は初期キャリア研究者については容易なことではないが、その中でも研究資金の獲得に言及している。

「研究資金みたいな、そういう部分は、どこまでその理想と現実みたいなところがあると思うので、確かにその辺は、自分でももっときちんとそういう、獲得するための努力を、申請したりとかっていうことの努力は必要だと思うんですけど」という。

＜ポスドクの時代＞

ポスドクの時代は初期キャリア研究者にとっては、時間の余裕があってないような時代でもある。時間があるとしても、研究とは直接関係のない業務に時間を割かれることも多い。そして、正規の職員でなければ経済的にはかなり苦しい時期でもある。

「1つはポスドクの時代は時間はあるといえばあるんですけども、そうでもないかな。でもまずお金がなくて、研究活動がなかなか自由にいかないというところがあるかなと思ったんですね。」「研究力がある、同じぐらいの学年の子たちも1年2年は非常勤で食いつないでっていう形でした」「かなり厳しいですね。生活保護と同じレベルぐらいしか。自分の研究活動の時間を確保するのか、お金を取るのかっていうところで、お金を取ればそこまで貧しくないのかもしれないんですけど、自分の研究の時間をと思うとどうしても生活保護を受ける基準になってしまうので、金銭的には厳しいポスドクの方は大勢いらっしゃるのかなと思います。」と非常に厳しい経済状態の中での研究活動が語られた。

＜学生会員・ポスドクへの配慮＞

経済的にはかなり厳しい状況にある学生会員・ポスドクへの学会等の配慮を求めている。

「学生会員みたいなのあるじゃないですか。それはありがたいというのはあります」「本当につらかったのは学会費が高くて、学生は免除があるんですけど、ポスドクになるとないんですけど、みんながみんな仕事をきちんと持ててるわけではないので、申請して自分の状況を申告して、条件に合致すればポスドクでも免除っていう制度があるといいなと思います」「科研番号を必ずしも全員が持っているわけではないので、研究費のところでもちろん応募してきちんと審査をしてですけれども、いくらかの助成を基金とかつくっていただけると、ポスドクの方が研究活動を継続しやすい」と配慮を訴えている。

＜自分の専門と異なる職に対しての葛藤が生まれる＞

ソーシャルワーク教員の公募が自身の研究分野と必ずしも一致しなかったり、運良く採用されたとしてもソーシャルワーク実習の業務が求められる。ソーシャルワーク演習等が専門分野、隣接分野であればよいが、そうでなければ果たして自分が学生の指導をしてよいのかという葛藤が生まれる。また、実習業務は実習施設への巡回などイレギュラーな業務が多く、研究活動との両立をいかに図っていくのかの課題がある。

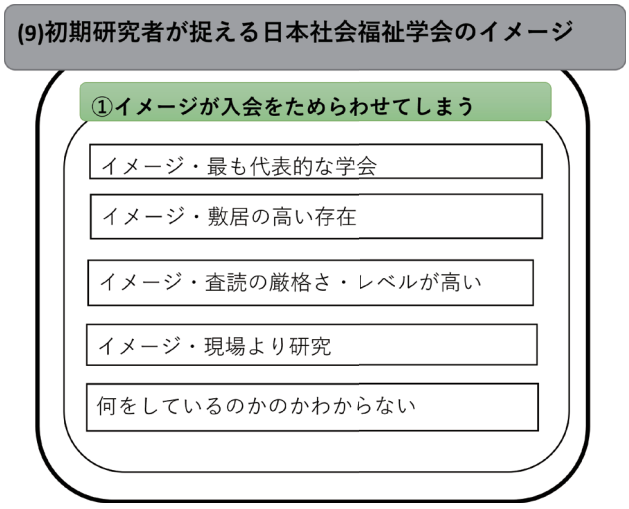
「公募が本当にほとんど全てソーシャルワークと実習というのが、助教ないし講師ですと、あと任期付きっていう傾向」「やっぱり専門外なので、それを自分も学びながら学生に教えてというとこが、教育の質が担保できないっていうのすごく苦しい思いを、就職活動しているときにも選択肢がない。」「ソーシャルワークを教えなければならないけれども、自分が専門外で、応募していいのかというこ

とと、もし採用していただけたとしても学生にとってそれがプラスになると思えなかった」「実習の担当ということになりますと、研究日も土日も関係なく対応が入ってくるので、ちょっと時間がかかる研究を、それが研究対象の場合になかなかゆっくり研究することができない。」

＜研究業績を積まなければならない焦り＞

ポスドクは不安定な身分に置かれるているがその中でも研究を進め、査読論文の投稿等によって研究者としての実績を積むことが求められる。ポスドクの時代はライフサイクルにおいても、新たに家族を持ったり、出産などのライフイベントが訪れ時期とも重なる。研究業績を積むことと、生活の中で優先されることの中で、進路等の判断を求められることもある。「この先のことを考えると、やっぱりきちんと業績も積まないといけないですし、落ち着いていろんなことが考えられないというか、学生の教育のことも研究のことも」考えなければならず、焦ってしまうという意見である。

(9) 初期キャリア研究者が捉える日本社会福祉学会のイメージ



初期キャリア研究者がたどる研究者になりゆくプロセスが「まとめ」られてきた。これらのプロセスにいる初期キャリア研究者に対して日本社会福祉学会がどのような存在となりえるのかというテーマを考える島である。

①イメージが入会をためらわせてしまう

今回の研究協力者は、日本社会福祉学会にすでに入会しているものもいれば、非会員もいる。まずは、入会をためらわせてしまう理由についてである。

＜イメージ・最も代表的な学会＞

社会福祉学にかかる最も代表的な学会というイメージがある。

「福祉の中で一番有名というか、老舗というか」「一応代表的なのは日本社会福祉学会」「一番上にいらっしゃる学会」「やっぱ一番大きな所っていうイメージで。」「やっぱきちんとすごくされてる印象」「広く受け入れてくださる学会なんだっていうような印象」があるという。

＜イメージ・敷居の高い存在＞

さらに、社会福祉学分野の代表的な学会でもあり、初期キャリア研究者には敷居の高い存在としてイメージされている。

「恐らく一番難しい感じ、平たく言えば難しく感じる学会。イメージです。」「社会福祉学会は大御所過ぎる」「やっぱりイメージは少し堅い、正直、どんな、自分が入ってメリットがあって、どういうことが学べるかっていう、ちょっと具体的な部分が少し見えなかったっていうのがあります。」「ちょっと敷居が高いイメージがあるので、もっとアットホームな感じで活動とか、そういう広報がしていければ、皆さん目は付くんだと思います。」「社会福祉学会はやっぱり敷居が高いっていうか、私の中でも社会福祉学の本を見るにつけ、すごいアカデミックな世界が全開していて非常に勉強にはなりますが、何かやっぱり雲の上とは言わないですけど、やっぱりそこは最高位に位置してる感じです。」など、総じて「敷居の高い存在」として捉えられている。

＜イメージ・査読の厳格さ・レベルが高い＞

専門性の高さは、学会誌への査読の厳格さに示されるような研究レベルの高さとして捉えられている。

「（研究職）そこを皆さん目指されてるような、そこで、例えば発表とか、論文が掲載されるとか、そういうのは結構皆さん目標にされていらっしゃるんだろうというようなイメージです。」「やっぱり査読が厳しいとかいうお話も、そういう先輩方のうわさというか」「一番大きい所にきちんと入って、一番大きい所に最初の査読の１本目は出しなさいというのも、指導教員からそのように言われてましたので。」「日本社会福祉学会の社会福祉学が一番だなと思います。」という意見である。

＜イメージ・現場より研究＞

社会福祉実践に係る実務的・実践的研究より、基礎的な理論研究に重きが置かれた学会というイメージが強いという意見がある。

「どっちかっていうとやっぱり現場、現場やってるっていうよりは、研究職の人たちがいろんな意見、意見というかそれぞれの研究を発表したりとか、そういう意見交換してるようなイメージです」「日本社会福祉学会って、現場の職員さんより研究者の人たちが多くて、難しい理論とかっていうのが割と主流だなっていうことを思っていたりとか。特に大御所の人たちがたくさんいる、みたいな。」「やっぱり研究というところをすごく力入れてるんだなっていうのは感じたんですけど、やっぱり敷居が高い印象を私は受けてしまいました。」という。

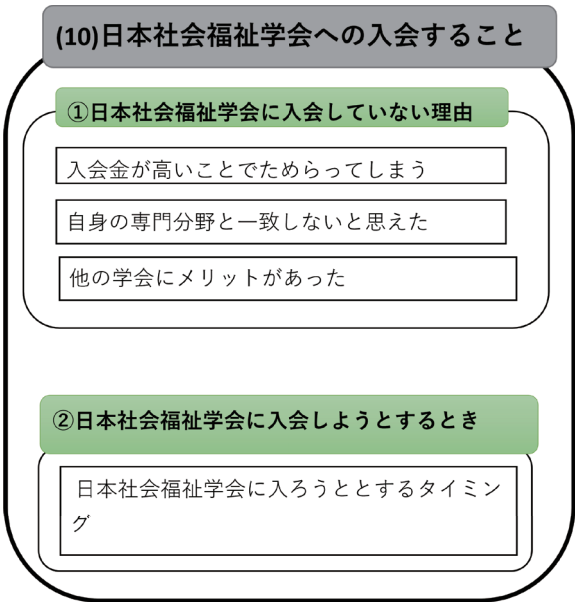
＜何をしているのかのかわからない＞

学会の活動自体をあまり知らないという意見もあった。

「結局何をしてるのか分からないのか、どういうことやってるのかなっていう感じですかね。活動がやっぱり見えないので、何ていったらいいんでしょう、遠い存在というか、」「大変失礼ながら、今回のお話を頂くまで、本学会を存じ上げなかったのが正直なとこです」との話もあった。

(10) 日本社会福祉学会への入会すること

ここは、実際日本社会福祉学会に入会するか否かを初期キャリア研究者が検討する島となっている。



①日本社会福祉学会に入会していない理由

＜入会金が高いことでためらってしまう＞

入会金が高いということが入会をためらわせてしまうという意見である。

「正直に申し上げると、今まで金銭的に厳しかったので、学会は大会に当日参加という形で他の所は参加したり、あとは論文は大学で立ち読みしてコピーをしたりとかいう形で、所属をするというのはまだ」「関連学会を横に並べて、どの学会に入ろうかみたいなことを考えたんですけど、まず一番高かったのが日本社会福祉学会だった」

＜自身の専門分野と一致しないと思えた＞

日本社会福祉学会は社会福祉学全体を網羅しているが、広範囲をカバーするがゆえに求める専門分野と一致しないという意見があった。

「他の学会と比べて、自分の興味のど真ん中ではなかった」「医療分野の者が参入してもいいのか、医療に関するソーシャルワークという部分が、本学会で発揮される機会があるのかどうかっていうのが分からないので、なかなか加入にすぐに踏み込めなかった」

＜他の学会にメリットがあった＞

そして、専門分野に特化した学会にメリットを感じたという意見である。

「全てをっていう形なので、やっぱりちょっと、その細かいマニアックなことやりたいんだったら、それぞれのちっちゃい学会でもできるみたいに、そういうようなふうに思われちゃう」

②日本社会福祉学会に入会しようとするとき

初期キャリア研究者がよって立つ立場は様々であるが、そのような中で日本社会福祉学会への入

会を決心するのはどんなときかが示されている。

＜日本社会福祉学会に入ろうとするタイミング＞

ここではタイミングということが語られている。研究発表をするタイミング。誰かに誘われたタイミング。社会福祉学を学問として捉えなおすタイミング。日本社会福祉学会に入ることのメリットを感じるタイミングなどである。

「やっぱ学会ってほんとに、またお金のことになってしまって申し訳ないんですけど、発表するときとかは、資格がないと発表できないとかあるので。だから、やっぱそういうタイミングだと入ろうってなるんですけど」「恐らく誰かに誘われたら。あとは、もうちょっと会費が安くなったらかなっていう感じはしますね。」「恐らく学問として社会福祉学に興味を持ち始めたら、だと思います。」「どういうメリットがあるのかっていうところが、この学会が発展しないところはやっぱり大きいのかなと思いますね。」「この学会に入ることで、自分のキャリアにも影響していくようなとか、明確なものとかも分かるんであれば、やっぱり興味が湧いていくのかなと。身近な存在にもなっていくのかなと。」いう意見もある。

第３章　考察

ここまで、8 人の初期キャリア研究者の方たちのインタビューを質的統合法の手続きを参照しながらまとめてきた。

8 人の初期キャリア研究者はもちろん異なる背景を持ち、社会福祉学という大きな枠組みはあったとしても専門分野の異なる人たちであるが、インタビューの結果を文節ごとに切り分けていくと、そこに共通した意見、そして研究者となりゆくプロセス、ストーリーを見ることができる。

「(1) 社会福祉研究への関心と疑問が生まれていく」では、社会福祉研究への関心が社会問題に触れる中で生まれたり、一方であまり関係がないように思える分野に見える職業や体験が実は「根っこのところ」でつながっていると感じたり、社会福祉の実践現場において日々貴重な体験をしてるにもかかわらずそのことが「何を意味しているのか」わからず「カタチにできないまま」「実践が流されていってしまう」ことから、研究を志すことになっていく。また、その背景には、これまで研究として示されていた社会福祉研究が「私たちのやっていることを支えてくれる理論」として示されてこなかったことに対しての疑問、批判や、現場においては「実践発表はいっぱいあるけれど」、そこにある通底した理論背景が見当たらないというような自己批判がある。

そして、「(2) 研究者として歩み始めようとする」では、研究者を目指して一歩踏み出していくことになるが、そこには身近に「研究に進むきっかけとなるロールモデル」との出会いがあったことが語られている。身近に、自分が目標とできるような、あるいは憧れるような存在があったことが、歩みだす一歩をサポートしている。そして、研究とは何かを考え、大学院等で「研究のお作法」を学びながら研究対象と向き合っていくことになる。現場実践者においてはこれまで語られなかったテーマ、例えば「精神保健と貧困」というように、異なるテーマが実践の中ではどのような問題としてあらわれていくようなことに関心が向いていく。「実践者でありながらリサーチャー」というアイデンティティをもって研究が展開される中で、軸足を現場に置くのか、研究に置くのかの葛藤を体験しつつ、一方で将来は「研究者」であるとともに「研究職」に就くことの未来像を持ちつつ、その困難も抱き始めている。

さらに、初期キャリア研究者は研究活動を進めていく中で、改めて「(3) 研究の難しさに直面していく」ことになる。まず、研究テーマの設定とビジョンの構築、研究というテーマにおいてどこに焦点を合わせればよいのか悩んでいく。絞り込まれたテーマが果たして「社会的に意義」のあることなのか、「研究のプロセスとして妥当なのか」「価値」があるのかなどに不安を感じていく。テーマが定まり、いざ研究計画をまとめようとすると、「なかなか自分で整理ができない。」そんな時、人の力を借りながら「ブレーンストーミングしていくと」ヒントを見出すことができたりする体験をする。先行研究を集めることも、容易ではないが、研究者としての一つの到達点として、研究成果を査読論文として投稿しようとチャレンジする。その中で、研究で感じたことをなんとか「クライアントに届く

言葉」としてまとめようとする。「実践と研究の相互作用」の中で、新たな気づきを言葉に紡ぎだし、論文としようとする。一方で「研究という手続きを進める中で現場の実践から離れていくという研究と実践の乖離を感じたり」することもある。実践と研究のはざまに立ちながら、改めて研究の深さと難しさを感じたりする。

研究は螺旋階段を進んでいくように少しずつ前進していく。時々踊り場で休んだり、階段を踏み外したりする。そんな時、「(4) 研究を継続する難しさに直面する」ことになる。大きくは、仕事と研究を両立させていくことの難しさ、仕事あるいは公務によって思うように時間が取れなかったり、不安定な立場におかれて経済的な不安定さを感じたりすることが理由となったりする。さらに、コロナ禍の様々な制限が、「(5)(コロナ禍と) 研究の停滞」を生み出したりするが、一方でリモートによる新たなコミュニケーションなども生まれていき、そのありようが変化していった。

そのような困難を抱える中で初期キャリア研究者の「(6) 研究を支えたもの」は何だったのかが問われてくる。これらが、初期キャリア研究者をサポートしていくことにおいてヒントを示してくれる。研究には当然煮詰まってしまうことがある。そんな時に、的確に「実際に研究やってるプロの人に教えてもらい」、ブレイクスルーのヒントを得たりすることで、新たな展開を作っていくことができる。また、指導教員等からの助言とともに、研究交流のためのコミュニティが形成されていくことの大切さ、有効性が語られている。同じ悩みや課題を抱えた仲間が集い、情報交換をしたり、ピアでのコンサルテーション、仲間同士で支えあいながら、お互いを励まし、学びあうコミュニティが切実に求められている。さらにそれらのコミュニティは、狭義の社会福祉の分野から、近接領域や異なる分野の研究者との交流ができることで研究の新たな拡がりが期待できることが語られている。そして、これらのつながりは、対面によるつながりとともに、ICT を使った新たな、積極的なコミュニケーションが、若手研究者のつながり、コミュニティを形成することになっていく。これらのニーズにどのように貢献していくのかが問われる。

そして、これらを通じて「(7) 研究者として育てられていく」中での様々な教育的配慮、例えば、学会での発表で、発表時間の制限は初期キャリア研究者にとってはハードルとなるため、時間に余裕を持たせることの配慮を求めたりすることもある。学会としての初期キャリア研究者育成の一貫したサポートへの期待がある。また、研究をする環境において、都市圏と地方では、学会活動の機会や、様々なアクセス方法が生まれており、リモートによる活動が普及しているとはいえ地方レベルの研究会の活性化を求める声もある。さらに、社会福祉研究の分野の中でも比較的研究者が少ない分野についての特段の配慮を求める声もある。

博士課程を終えて、研究職を求めたとしても、研究職としての身分が保障されることは少ない。「(8) ポスドクの苦悩」は、社会福祉分野に限った事ではないが、大きな困難がそこにある。一見時間はあるようであっても研究以外に割かれる時間は多い。不安定な身分は、経済的にはかなり苦しい状況に

置かれる。研究資金の獲得も容易ではない。「かなり厳しいですね、生活保護と同じレベル」という実態がある。学会では、学生会員に対しての減免等はあるが、ポスドクについてはそれらの配慮がない。

また、研究職としての公募が助教などの場合、実習指導などを担当しなければならなくなるが、自分の研究分野との相違から、果たして自分が担って良いものかの葛藤が生まれる。

職を得られなかったり、得られたりしても任期付きの採用となることで、常に将来の不安を抱えながらポストドクターの時代を生きていくことは容易ではない。

ここまでが、研究者になろうとする動機が生まれ、初期キャリア研究者として歩み始める中で様々な困難を抱えながらも、研究活動を進める中で研究を支えられる体験やその期待について説明がなされてきた。そして、これらの研究活動と並走して学会の活動がある。「(9) 初期キャリア研究者が捉える日本社会福祉学会のイメージ」は、「最も代表的な学会」「敷居の高い存在」「査読の厳格さ・レベルが高い」「現場より研究」「何をしているのかわからない」と語られた。もちろん、これらは初期キャリア研究者の限られた意見ではあるが、一つのイメージであろう。総じて、初期キャリア研究者にとっては「敷居の高い」存在として受け止められるようである。

最後に「(10) 日本社会福祉学会への入会すること」についてである。これは、5 人のインタビュアーが同じ質問をすることで作られた島である。入会していない初期キャリア研究者は、入会金の高さを指摘する者もいるが、そのこと以上に日本社会福祉学会が、社会福祉学という格式の高い総合デパートのようなイメージを持つことで、それよりも、初期キャリア研究者の専門分野に特化した比較的小さな学会にメリットを感じているという意見が印象的である。それでも日本社会福祉学会に入会するのは、研究発表をするタイミング、誰かに誘われたタイミング、社会福祉学を改めて学問として捉えなおすタイミング、そのほかに日本社会福祉学会に入ることのメリットを感じたタイミングであるとされた。

本報告は、この後に行われるアンケート調査に先んじて行われたものである。インタビュー調査は限られた初期キャリア研究者の意見をまとめたものであるので、平均的な意見を求めることには限界がある。しかし、8 人の初期キャリア研究者が歩みだしのところでの体験をまとめていくと、そこには確かに個別の体験ではあるが、共通の体験が見えてくることがある。個別性の中にある、それらの共通の体験の中には、本調査の目的となる「日本社会福祉学会として初期キャリア研究者をいかにサポートしていくのか」ということを考えるメッセージが込められているように思う。

第Ⅲ部　アンケート調査

第１章　アンケート調査の概要

1. 調査目的と方法

本アンケート調査の目的は、日本社会福祉学会の会員や非会員の初期キャリア研究者の研究活動環境およびニーズを把握することである。

(1) 調査対象者

学会員に限らず、以下のいずれかに該当する者を調査対象とした。

1.・大学院修士課程・博士前期課程在学者
2.・博士後期課程在学者
3.・修士課程・博士前期課程修了後５年以内の者（在学者を除く）
4.・博士後期課程修了後５年以内の者（在学者を除く）

(2) 調査内容

2017 年に実施した「若手･女性会員の支援のあり方に関するアンケート調査」の調査票をもとに、第 1 部のインタビュー調査の分析結果を加え修正した調査票によって、研究活動環境、将来展望、学会における活動状況、学会への要望等を把握する。なお、作成した調査票については、初期キャリア研究者に該当する研究支援委員 7 名によるプリテストを実施し、調査票の精度を高めている。調査依頼状および調査票は資料２と資料３参照。

(3) 調査実施方法

Google フォームによるオンライン調査で実施し、日本社会福祉学会のホームページ、学会メール、第 70 回秋季大会におけるスタートアップ・シンポジウムでのチラシ配布等で調査の周知を図った。また、日本ソーシャルワーク教育学校連盟のご協力のもと、養成校の大学院生への周知を行った。

(4) 調査実施期間

調査は、2022 年 8 月 25 日～ 2022 年 9 月 30 日に実施した。

2. 倫理的配慮

本調査は、文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を踏まえ実施している。収集した調査データは、統計的に処理し個人が特定されることはないこと，本調査の目的以外に使用することはないこと、収集した調査データは適正に管理し分析後に廃棄することを事前に周知し、了解のもと調査に協力いただいた。なお、本調査は本学会理事会の承認のもと実施している。

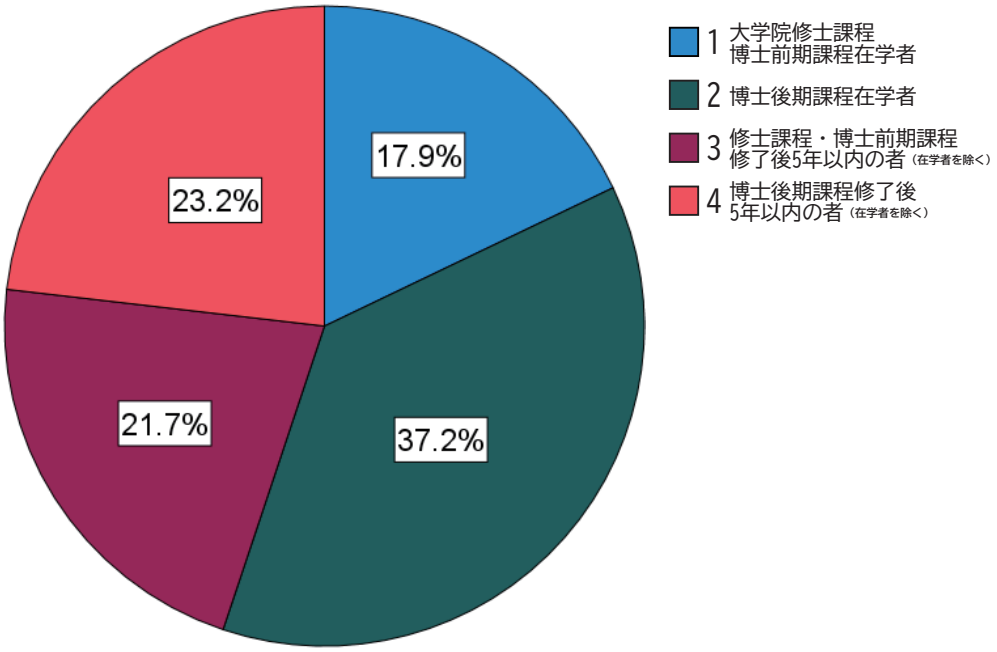
第２章　アンケート調査結果と分析

1. 集計結果と分析

341 件の回答があった。

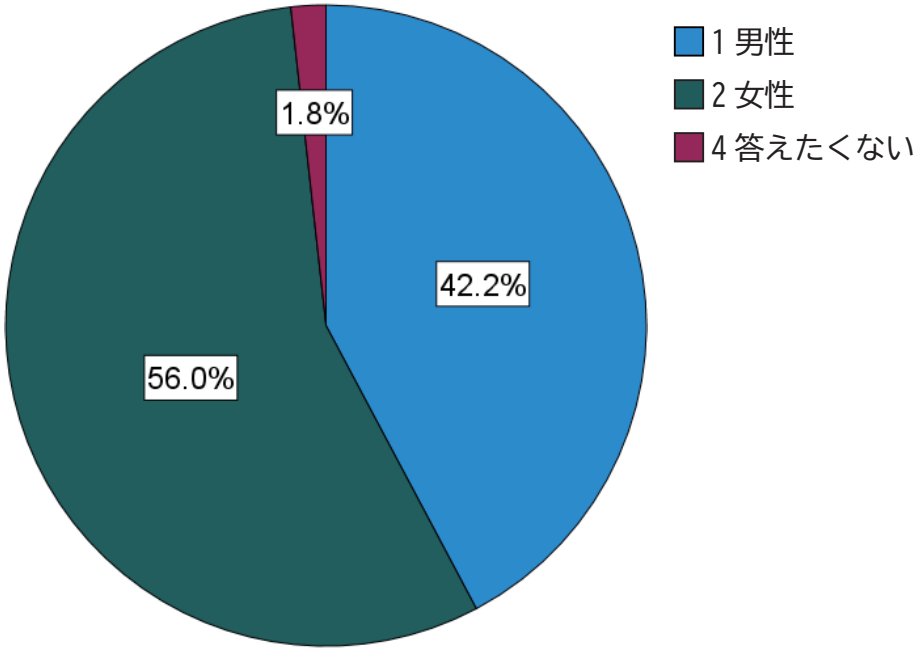
(1) 回答者の属性について

Q1 現在、あなたはどれに該当しますか。「1. 大学院修士課程･博士前期課程在学者」が 61(17.9%)、「2. 博士後期課程在学者」が 127（37.2%)、「3. 修士課程・博士前期課程修了後 5 年以内の者（在学者を除く)」が 74 (21.7%)、「4. 博士後期課程修了後 5 年以内の者（在学者を除く)」が 79 (23.2%) だった。

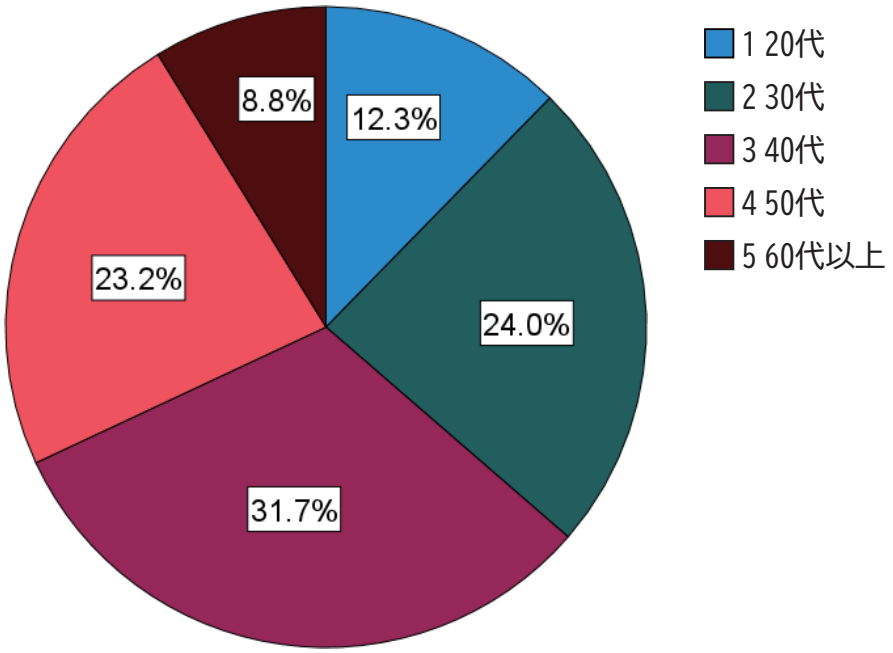


Q2【Q1 で 1 または 2 を選んだ方】あなたは、留学生ですか。
大学院在学者 188 人の内、留学生は 13（3.8%）だった。

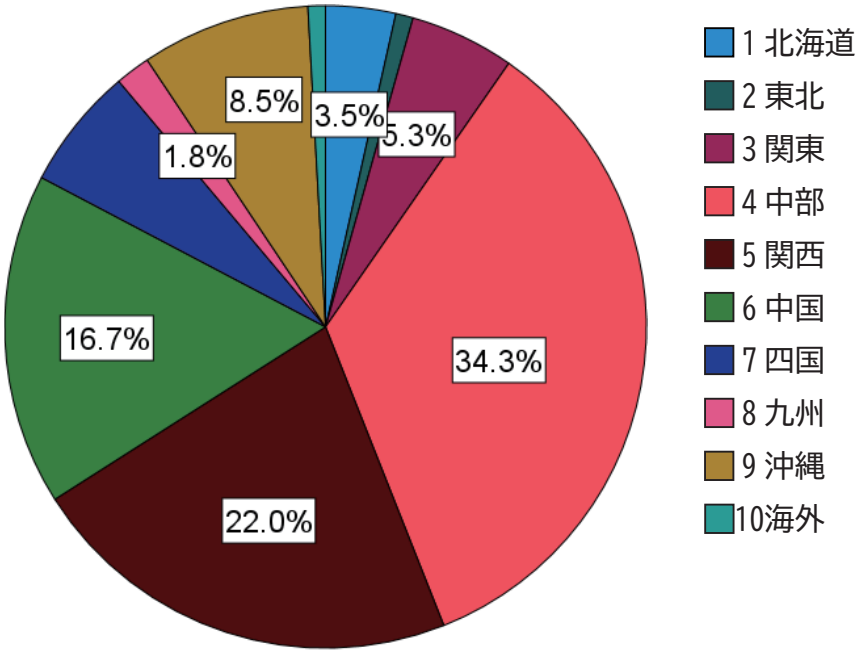
Q3 あなたの性別を教えてください。「1. 男性」は 144（42.2%）、「2. 女性」は 191（56.0%）、「3. どちらでもない」は0、「4. 答えたくない」6（1.8%）だった。



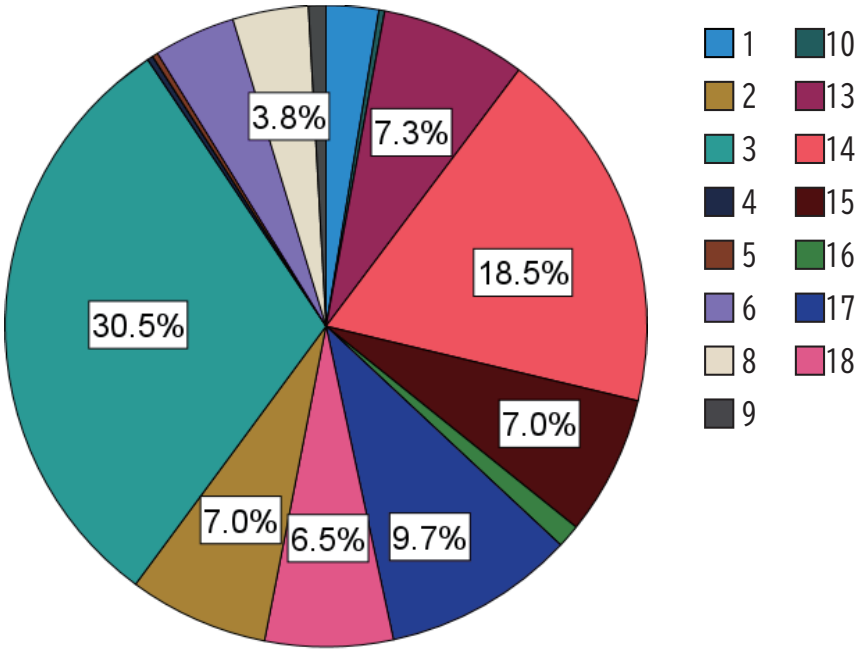
Q4 あなたの年齢（2022 年 8 月 1 日時点）はどれに該当しますか。「1.20 代」は 42（12.3%）、「2.30 代」82（24.0%）、「3.40 代」108（31.7%）、「4.50 代」79（23.2%）、「5.60 代以上」30（8.8%）だった。



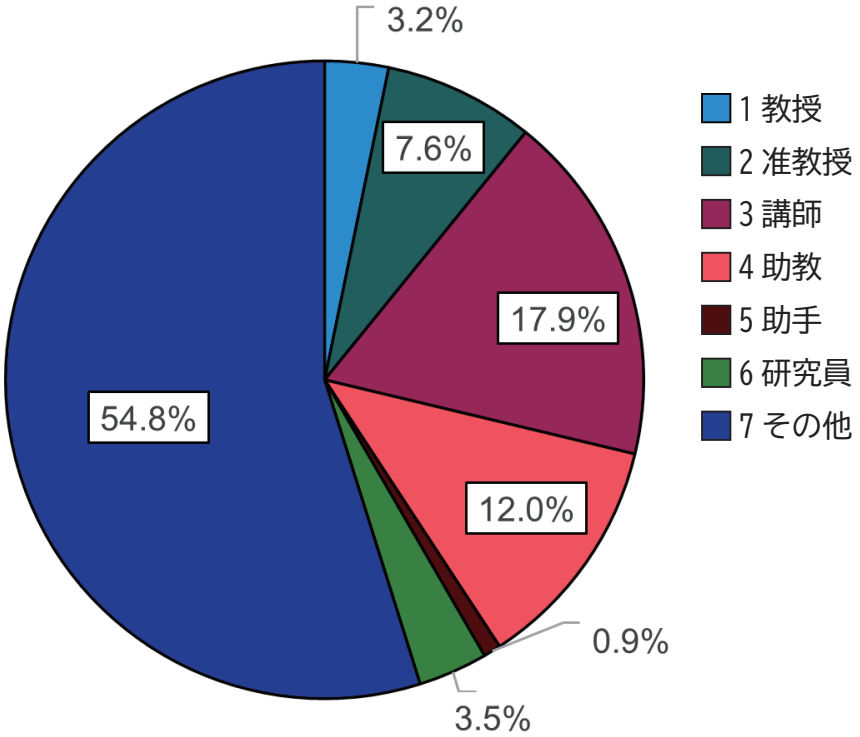
Q5 あなたのお住まいは、次のどの地域ですか。「1. 北海道」12（3.5%）、「2. 東北」18（0.9%）、「3. 関東」117（34.3%）、「4. 中部」75（22.0%）、「5. 関西」57（16.7%）、「6. 中国」21（6.2%）、「7. 四国」6（1.8%）、「8. 九州」29（8.5%）、「9. 沖縄」3（0.9%）、「10. 海外」3（0.9%）だった。



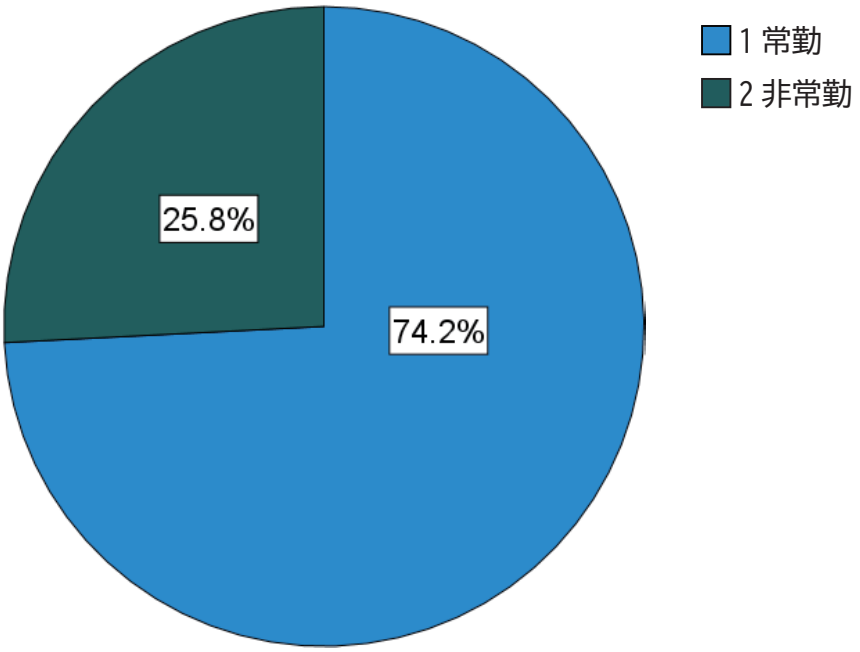
Q6 あなたが現在勤務している組織の種類は、次のうちどれに当てはまりますか。おもなものを1つ選んでください。「1. 国立（国立大学法人）の大学」9（2.6%）、「2. 公立（公立大学法人）の大学」24（7.0%）、「3. 私立の大学」104（30.5%）、「4. 海外の大学」1（0.3%）、「5. 公立の短期大学」1（0.3%）、「6. 私立の短期大学」14（4.1%）、「8. 専門学校」13（3.8%）、「9. 国公立の研究機関」3（0.9%）、「10. 私立の研究機関」1（0.3%）、「13. 行政機関」25（7.3%）、「14. 社会福祉の機関・施設」63（18.5%）、「15. 医療機関・施設」24（7.0%）、「16. 独立・開業」4（1.2%）、「17. 特に決まった勤務先はない（アルバイト等を含む）」33（9.7%）、「18. その他」22（6.5%）だった。



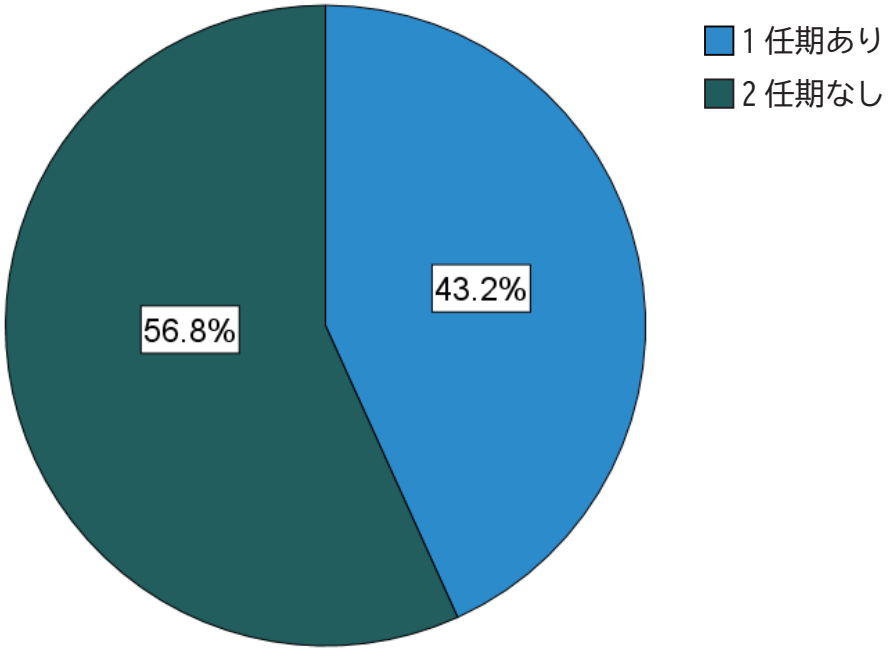
Q7 Q6で選んだ勤務先におけるあなたの現在の立場は、以下のうちどれに当てはまりますか。「1. 教授」11（3.2%）、「2. 准教授」26（7.6%）、「3. 講師」61（17.9%）、「4. 助教」41（12.0%）、「5. 助手」3（0.9%）、「6. 研究員」12（3.5%）、「7. その他」187（54.8%）だった。



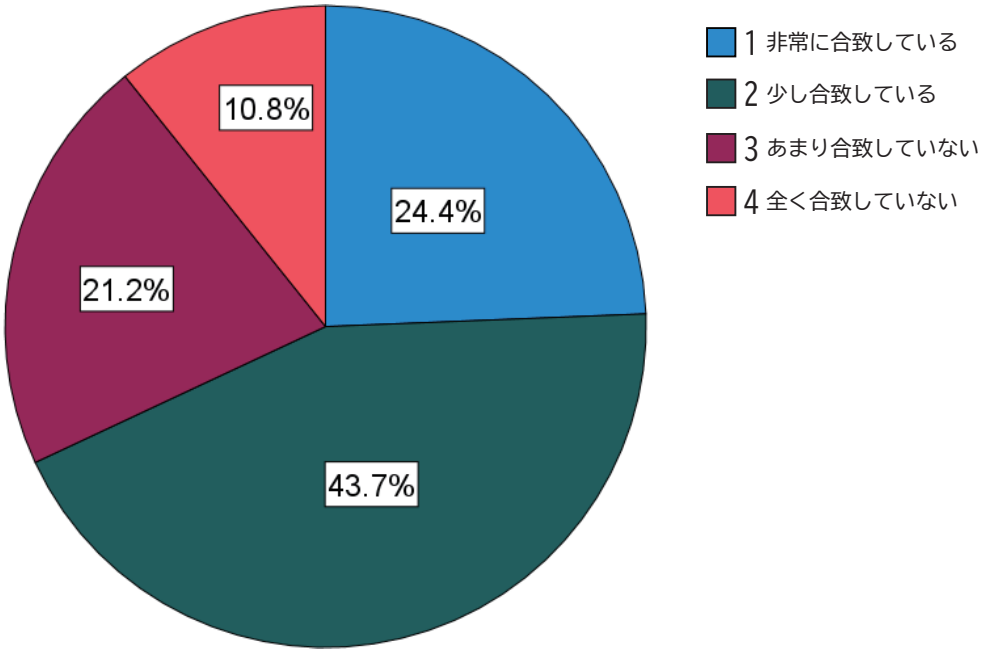
Q7-1 Q7の勤務形態をお答えください。「1. 常勤」230（74.2%）、「2. 非常勤」80（25.8%）だった。



Q7-2 Q7 の任期の有無をお答えください。
「1. 任期あり」134（43.2%）、「2. 任期なし」176（56.8%）だった。



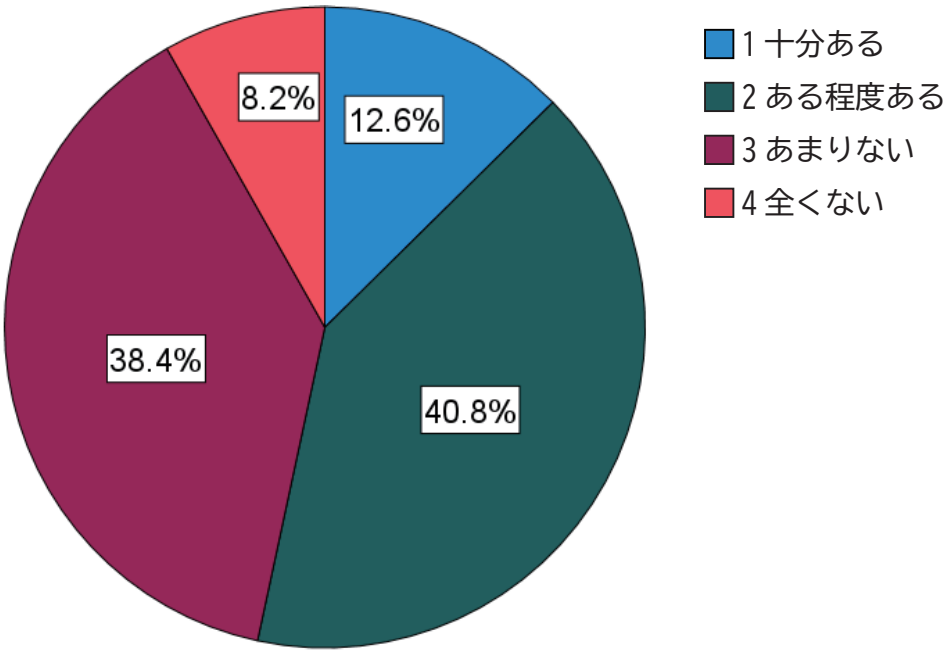
Q7-3 現在の立場や任期の条件はあなたの希望にどの程度合致していますか。当てはまるものを1つ選んでください。 「1. 非常に合致している」77（24.4%）、「2. 少し合致している」138（43.7%）、「3. あまり合致していない」67（21.2%）、「4. 全く合致していない」34（10.8%）だった。



所属組織によって、希望合致度に差はなかった。

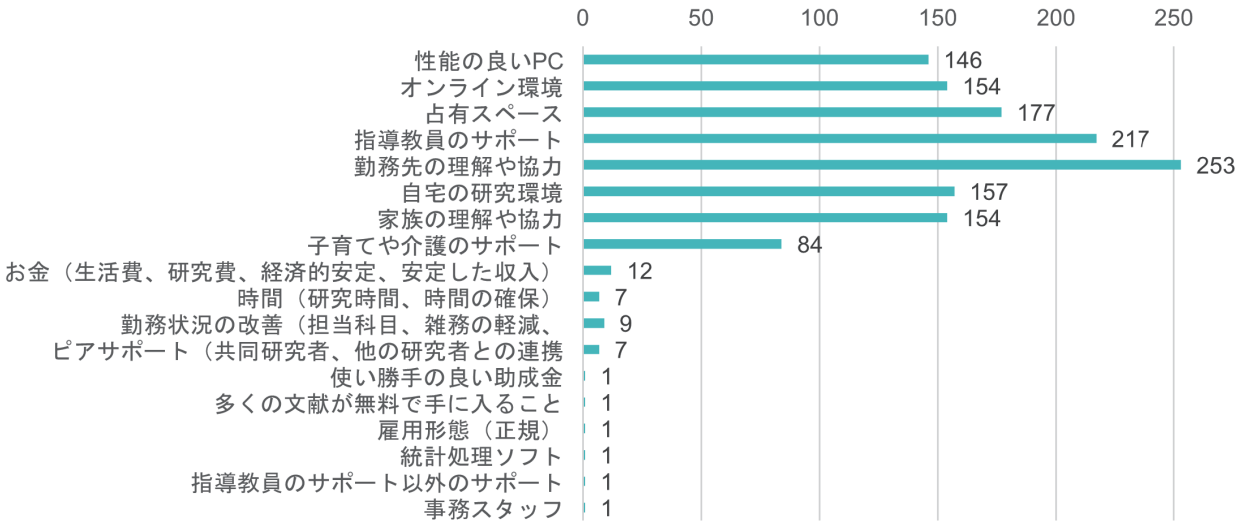
(2) 研究活動環境について

Q8 あなたには、研究に専念できる環境（集中できる空間、周囲の人のサポートなど）がありますか。最も当てはまるものを1つ選んでください。「1. 十分ある」43(12.6%)、「2. ある程度ある」139(40.8%)、「3. あまりない」131（38.4%)、「4. 全くない」28（8.2%）だった。



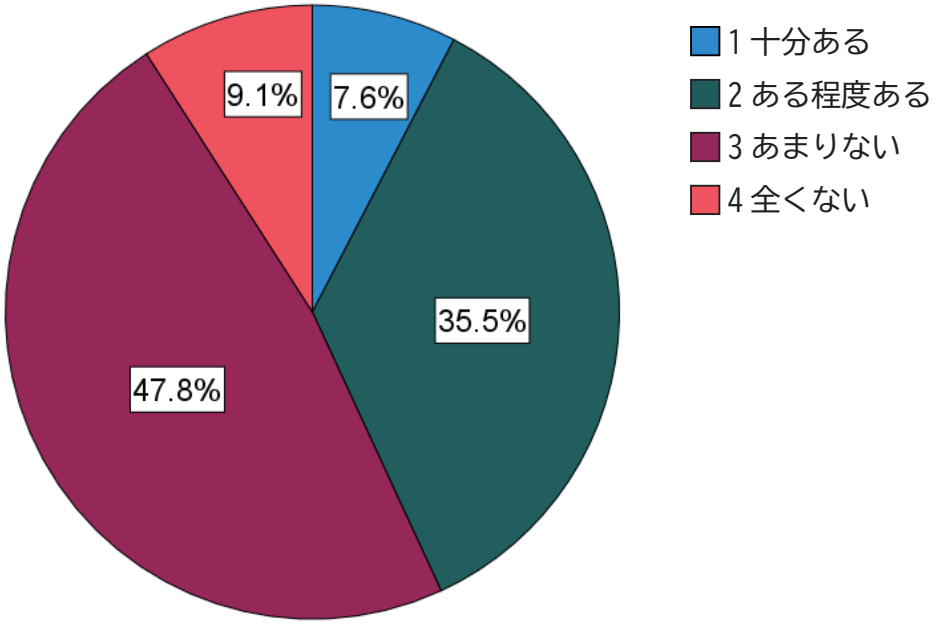
勤務する組織の種類別で有意な差があり、サンプルが0-1を除くと、「特に決まった勤務先はない」が1.97、「国公立の研究機関」が2.0、「国立大学」が2.11と低く、「行政機関」が3.04、「社会福祉の機関・施設」が2.71、「専門学校」が2.62と高かった。実践現場と専門学校所属の会員の研究環境が十分ではないと示された。

Q8-1 研究に専念できるためには、何が必要ですか。当てはまるものをすべて選んでください。「5. 勤務先の理解や協力」が最も多く、次いで「4. 指導教員のサポート」が多かった。「3. 研究のための占有スペース」、「6. 自宅の研究環境」、「2. 快適なオンライン環境」、「7. 家族の理解や協力」、「8. 子育てや介護のサポート」、「1. 性能の良い PC」までが 140 件以上の回答を得た。



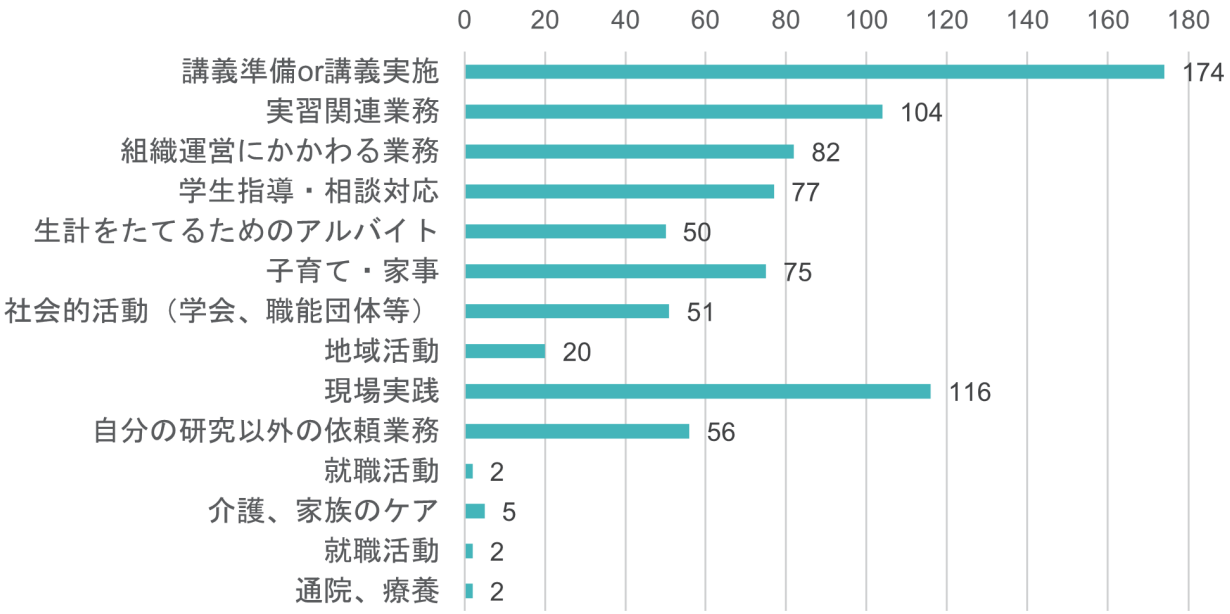
Q9 あなたには研究に専念できる時間がありますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。「1. 十分ある」26（7.6%）、「2. ある程度ある」121（35.5%）、「3. あまりない」163（47.8%）、「4. 全くない」31（9.1%）だった。

20 代がより「ある」と回答した。40 代との間には有意差があった（F（4,336）=3.559, p=.007, η p2=.041）。職場での立場では、「研究員」が最も「ある」と回答し、「講師」「助教」との間には有意差があった（F（5,332）=2.546, p=.028, η p2=.037）。任期ありよりもなしの方が「ない」と回答した（t(308)=-2.045, p=.021,d=.738）。

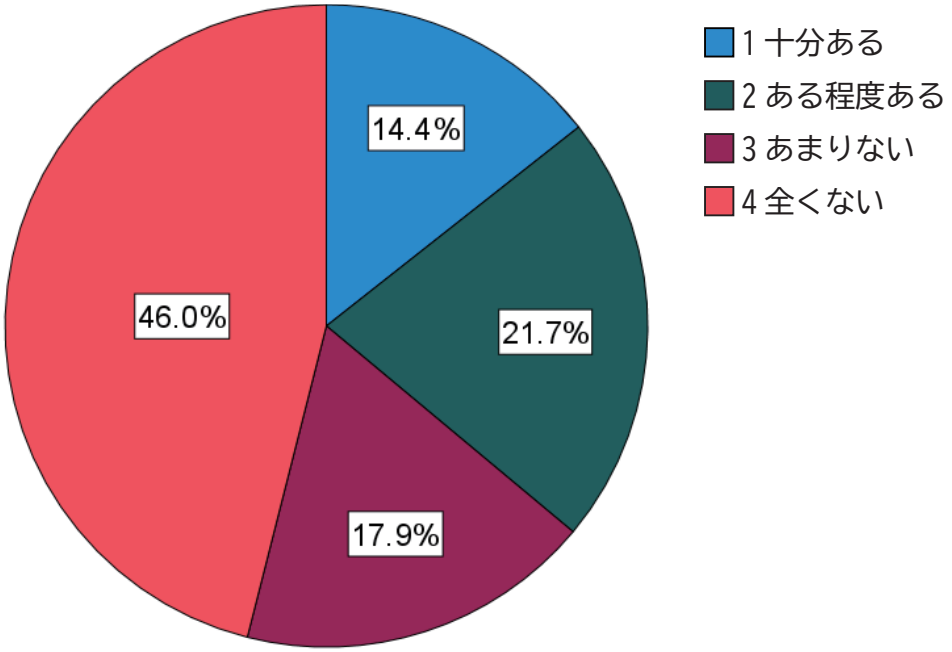


Q9-1 多くの時間を割いている活動内容として、当てはまるものを 3 つまで選んでください。

「1. 講義準備 / 講義実施」137(39.7%)、「9. 現場実践」115(33.3%)、「2. 実習関連業務」104(30.1%)、「3. 組織運営にかかわる業務」81（23.5%）、「4. 学生指導･相談対応」77（22.3%）、「6. 子育て･家事」75（21.7%）だった。

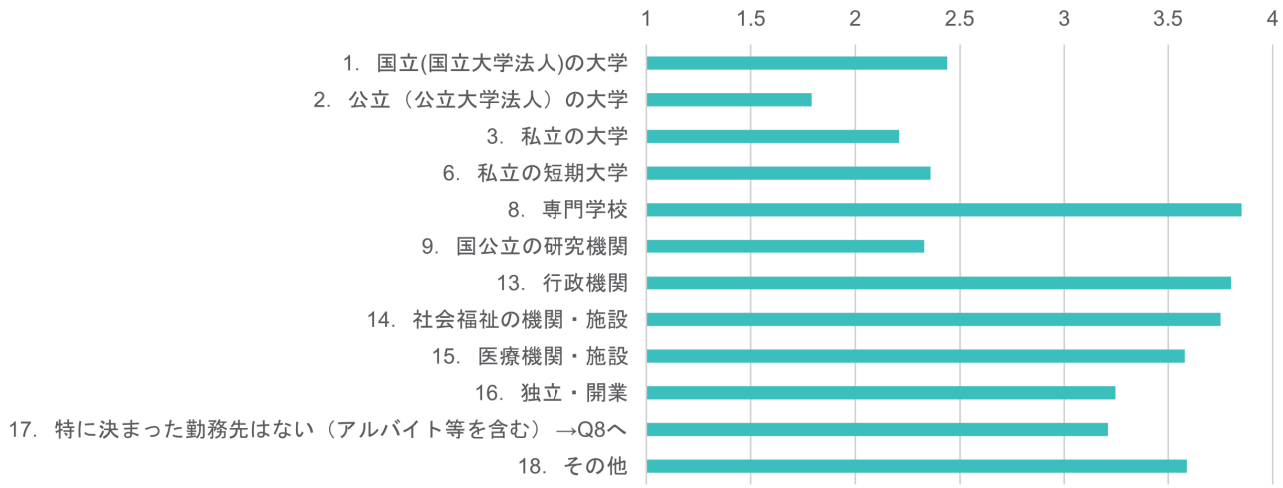


Q10 あなたには、研究費（所属先からの研究費、外部資金等）はありますか。最も当てはまるものを1つ選んでください。「1. 十分ある」49（14.4%）、「2. ある程度ある」74（21.7%）、「3. あまりない」61（17.9%）、「4. 全くない」157（46.0%）だった。

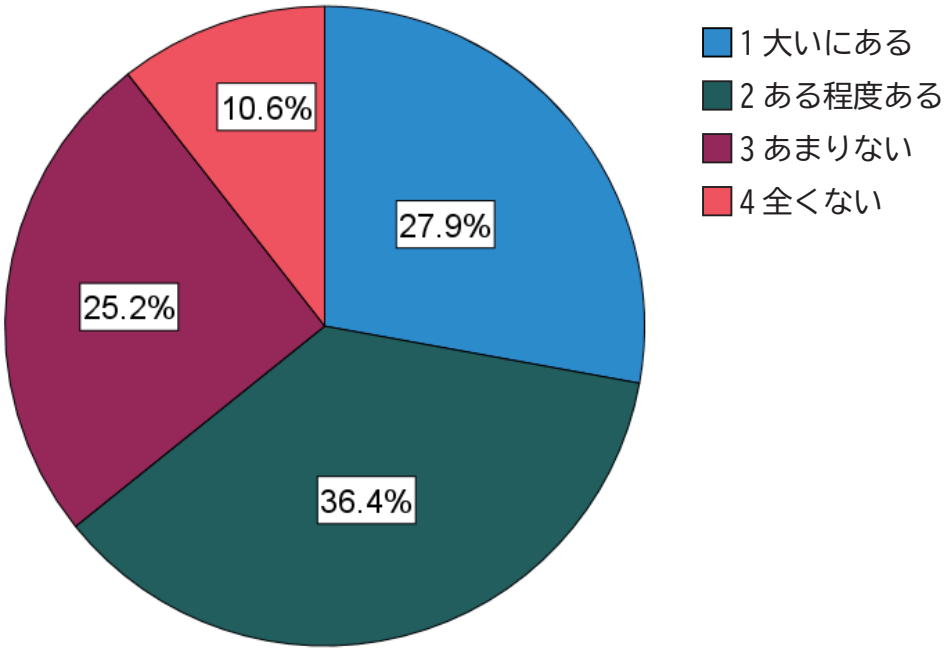


常勤より非常勤の方がないと答えていた（ t （209.093）=-6.992, p< .001）。

勤務する組織の種類別で有意な差があり、サンプルが0-1を除くと、「公立（公立大学法人）の大学」が1.79、「私立の大学」が2.21、「国公立の研究機関」が2.33と低く、「専門学校」が3.85、「社会福祉の機関・施設」が3.75、「その他」が3.59と高かった。教育機関であっても、専門学校所属の会員の研究費が不足する現状が示された。

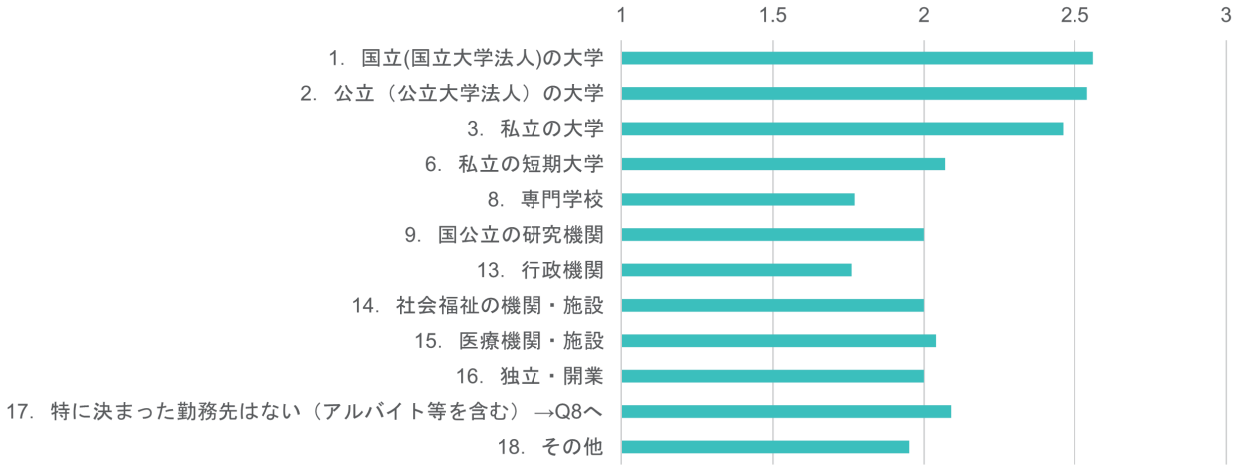


Q11 研究に関する持ち出しの支出に対して、あなたはどのくらいの経済的負担感がありますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。「1. 大いにある」95（27.9%）、「2. ある程度ある」124（36.4%）、「3. あまりない」86（25.2%）、「4. 全くない」36（10.6%）だった。

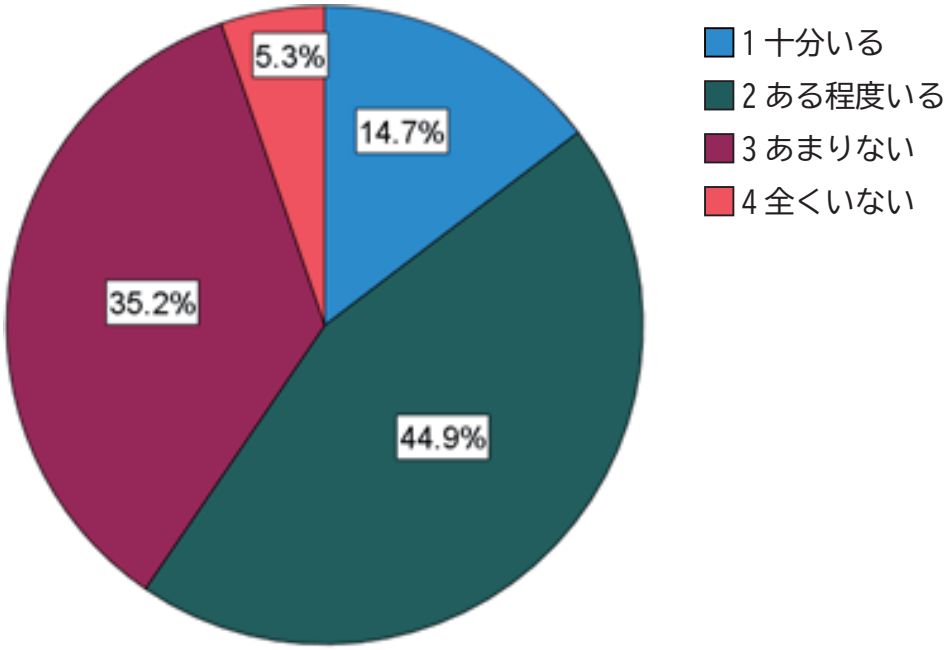


常勤より非常勤の方が、あると答えていた（ t （150.150）=3.226, p= .010）。

勤務する組織の種類別で有意な差があり、サンプルが 0-1 を除くと、「行政機関」が 1.76、「専門学校」が 1.77、「その他」が 1.95 と低く、「国立大学」が 2.56、「公立大学」が 2.54、「私立大学」が 2.46 と高かった。実践現場と専門学校所属の会員の経済的持ち出し負担感が大きかった。

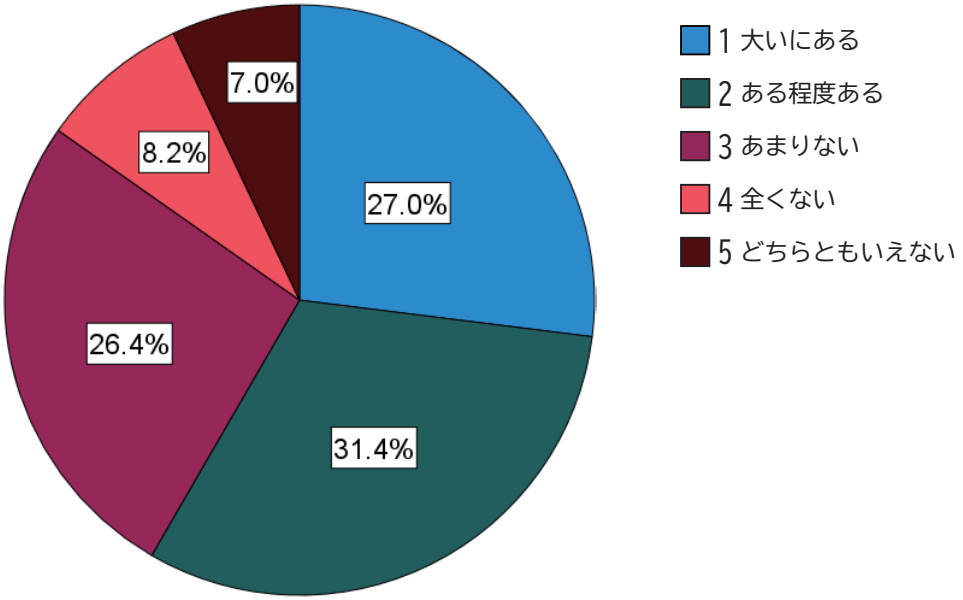


Q12 あなたは、研究に関して困ったときに、身近に相談・助け合える相手がいますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。「1. 十分いる」50（14.7%）、「2. ある程度いる」153（44.9%）、「3. あまりない」120（35.2%）、「4. 全くいない」18（5.3%）だった。

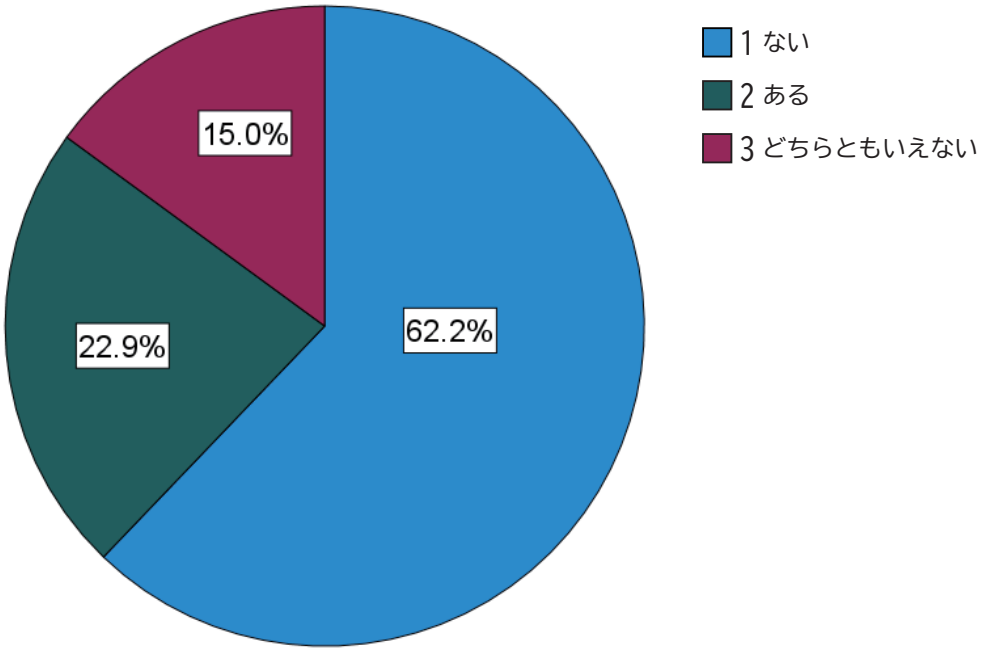


60 代以上が、20 代、30 代より、有意にスコアが低かった（F(4,336)=2.751, p＝.028, η p2=.054）。

Q13 あなたは、新型コロナウイルス感染拡大によって、研究活動やキャリア形成に負の影響があったと感じたことはありますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。「1. 大いにある」92(27.0%)、「2. ある程度ある」107(31.4%)、「3. あまりない」90(26.4%)、「4. ない」28（8.2%）、「5. どちらともいえない」24（7.0%）だった。

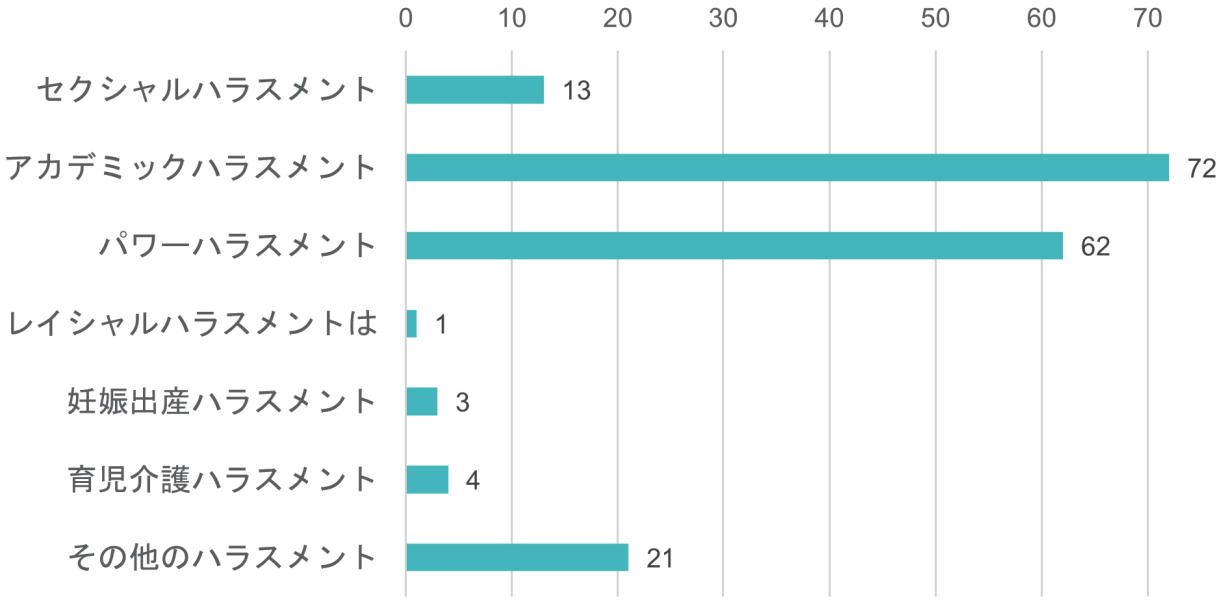


Q14 あなたは、これまで研究を続けてきた中で、何らかのハラスメント（嫌がらせ、いじめ）を受けたことがありますか。最も当てはまるものを1つ選んでください。「1. ない」2112（62.2%）、「2. ある」78（22.9%）、「3. どちらともいえない」51（15.0%）だった。

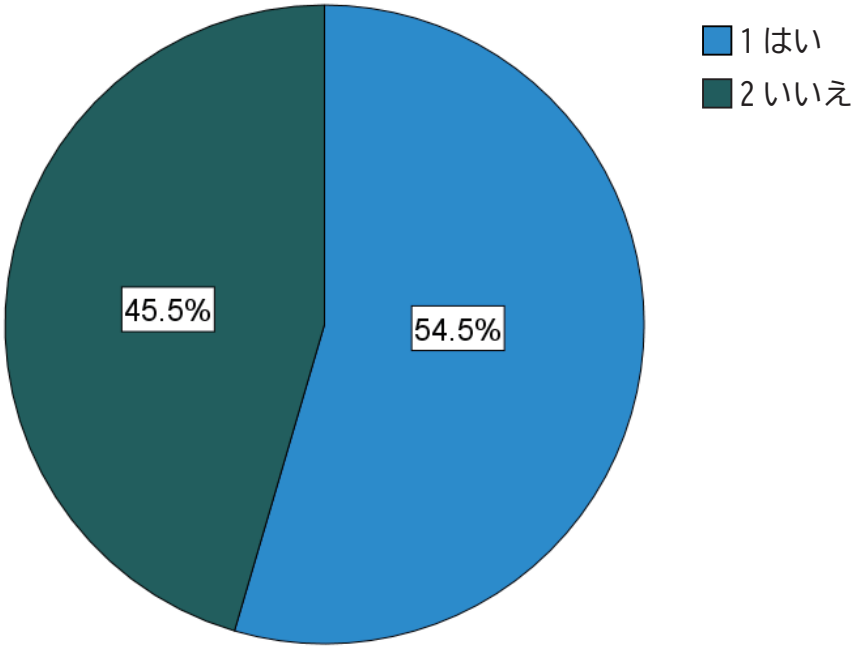


非常勤よりは常勤の方が有意にハラスメントがあると答えた（$\chi 2(2) = 12.023$, $p = .002$, $\phi = 0.002$）。

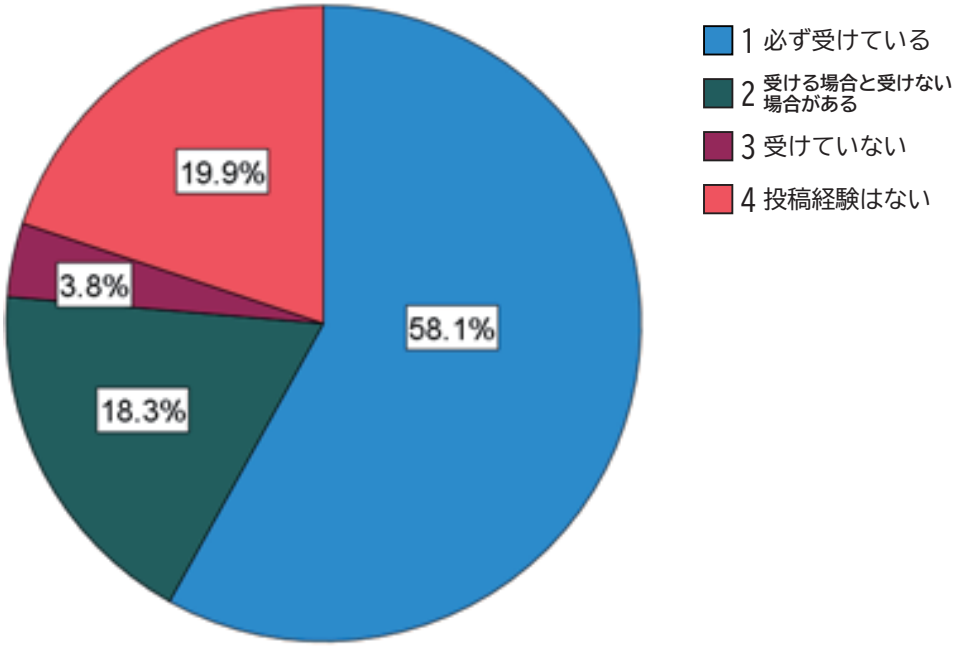
Q14-1 受けたハラスメントについて、当てはまるものをすべて選んでください。
セクシャルハラスメントは、13（3.8%）、アカデミックハラスメントは72（21.1%）、パワーハラスメントは62（18.2%）、レイシャルハラスメントは1（0.3%）、妊娠出産ハラスメントは3（0.9%）、育児介護ハラスメントは4（1.2%）、その他のハラスメントは21（6.2%）だった。



あなたは大学院生ですか。「はい」186（54.5%）、「いいえ」155（45.5%）だった。

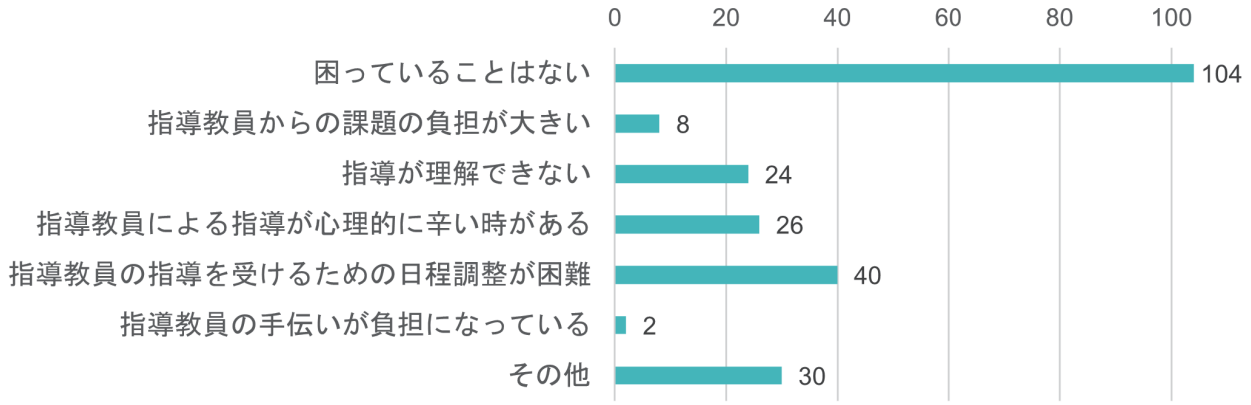


Q15 あなたは、学会誌などに論文を投稿しようとする場合に、事前に指導教員からの助言を受けていますか。当てはまるものを1つ選んでください。「1.　必ず受けている」108（58.1%）、「2.　受ける場合と受けない場合がある」34（18.3%）、「3.　受けていない」7（3.8%）、「4.　投稿経験はない」37（19.9%）だった。



Q16 あなたは、指導教員との関係や指導教員による指導に関して、困っていることはありますか。当てはまるものを 3 つまで選んでください。（大学院生 186 を母数に％を計算）

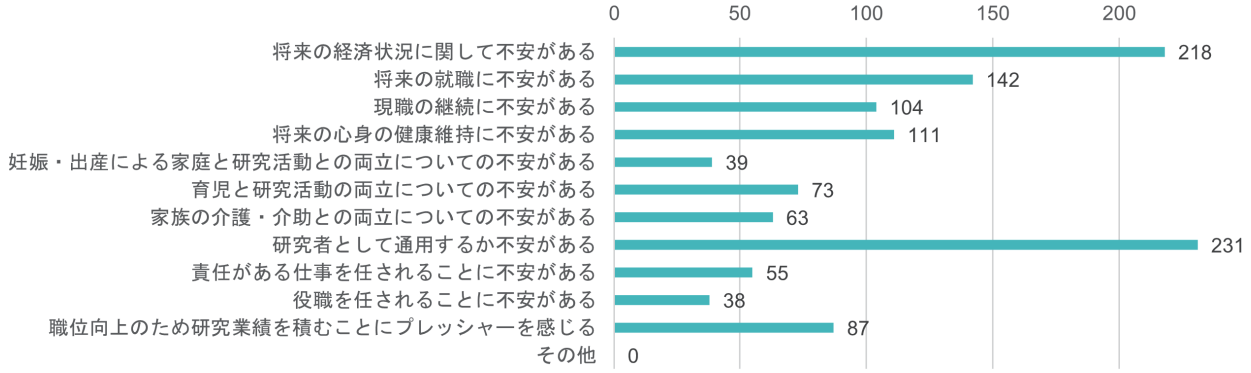
「1. 困っていることはない」104（55.9%）、「2. 指導教員からの課題の負担が大きい」8（4.3%）、「3. 指導が理解できない」24(12.9%)、「4. 指導教員による指導が心理的に辛い時がある」26(14.0%)、「5. 指導教員の指導を受けるための日程調整が困難」40(21.5%)、「6. 指導教員の手伝いが負担になっている」2（1.1%）、「7. その他」30（16.1%）だった。



(3) 将来展望について

Q17 あなたは、ご自身の将来について、どのような不安がありますか。当てはまるものを選んでください。

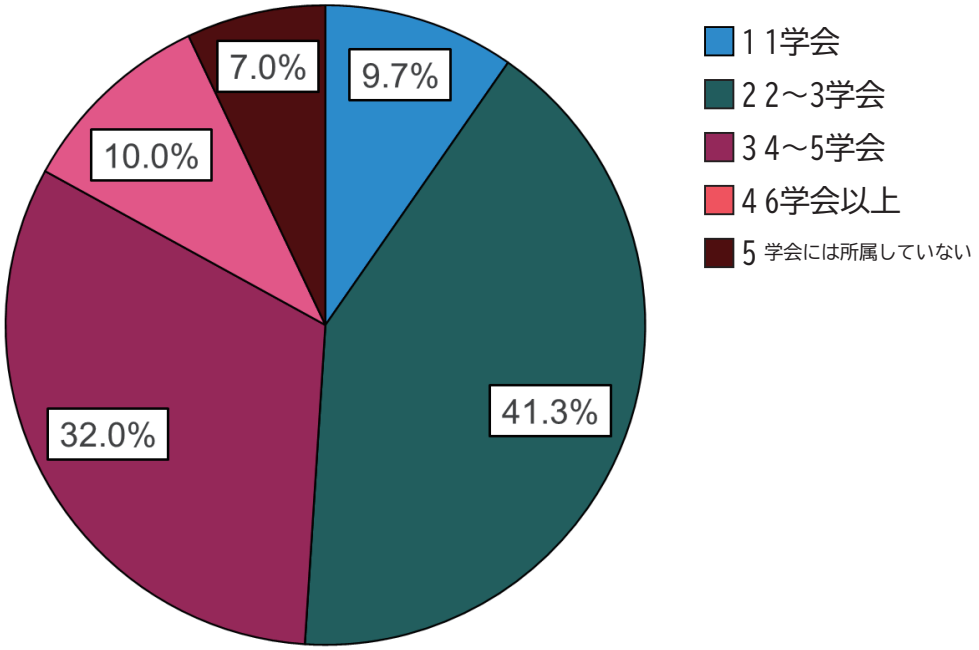
「1. 将来の経済状況に関して不安がある」218(63.9%)、「2. 将来の就職に不安がある」142(41.6%)、「3. 現職の継続に不安がある」104（30.5%）、「4. 将来の心身の健康維持に不安がある」111（32.6%）、「5. 妊娠・出産による家庭と研究活動との両立についての不安がある」39（11.4%）、「6. 育児と研究活動の両立についての不安がある」73(21.4%)、「7. 家族の介護･介助との両立についての不安がある」63（18.5%）、「8. 研究者として通用するか不安がある」231（67.7%）、「9. 責任がある仕事を任されることに不安がある」55（16.1%）、「10. 役職を任されることに不安がある」38（11.1%）、「12. 職位向上のため研究業績を積むことにプレッシャーを感じる」87（25.5%）、その他は 0 だった。



(4) 学会について

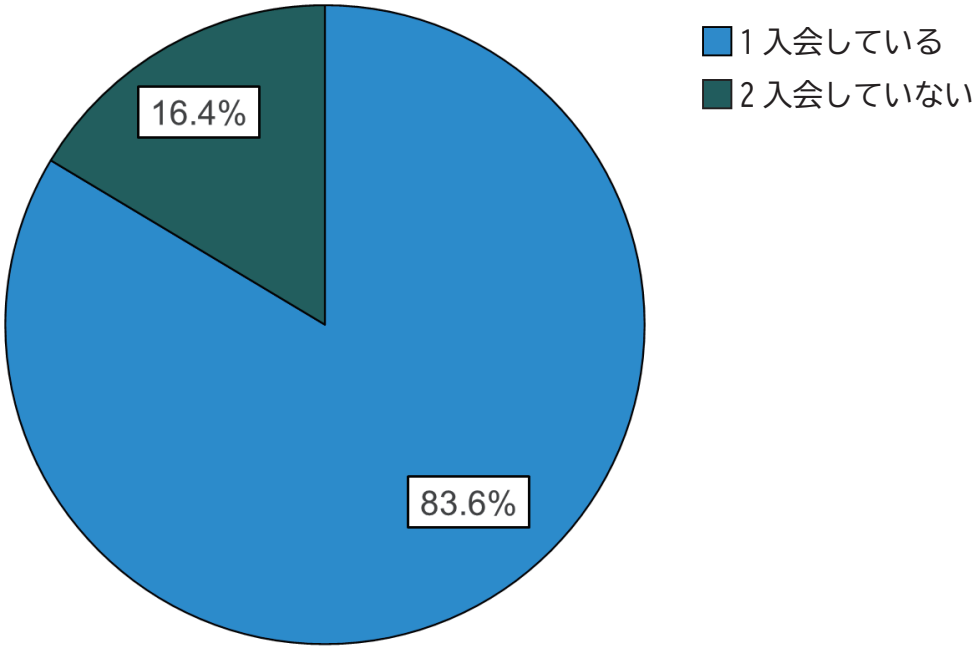
Q19 あなたは、現在、いくつの学会に入会していますか。当てはまるものを１つ選んでください。

「1. １学会」は 33（9.7%)、「2. ２～３学会」は 141（41.3%)、「3. ４～５学会」は 109（32.0%)、「4. ６学会以上」は 34（10.0%)、「5. 学会には所属していない」は 24（7.0%）だった。



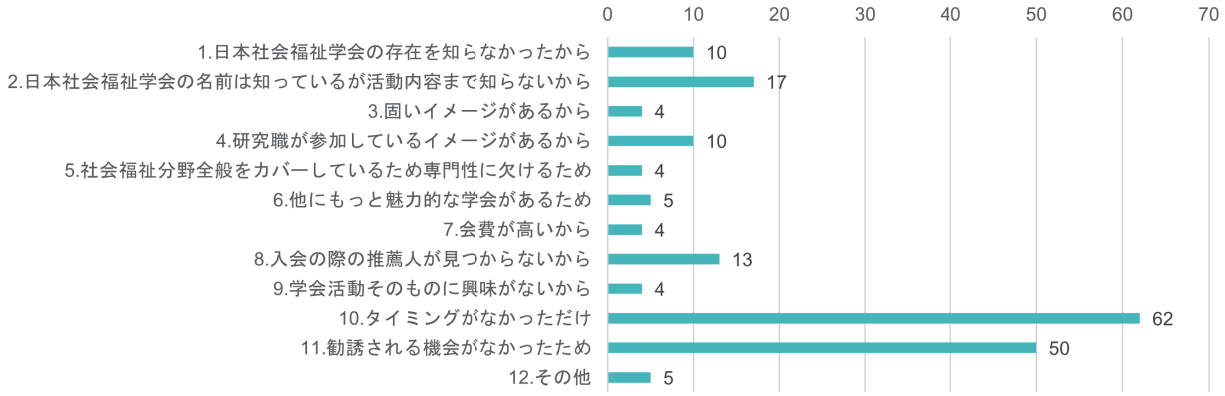
Q20 あなたは、日本社会福祉学会に入会していますか。１つだけマークをしてください。

「入会している」が 265（77.7%)、「入会していない」が 52（15.2%）だった。



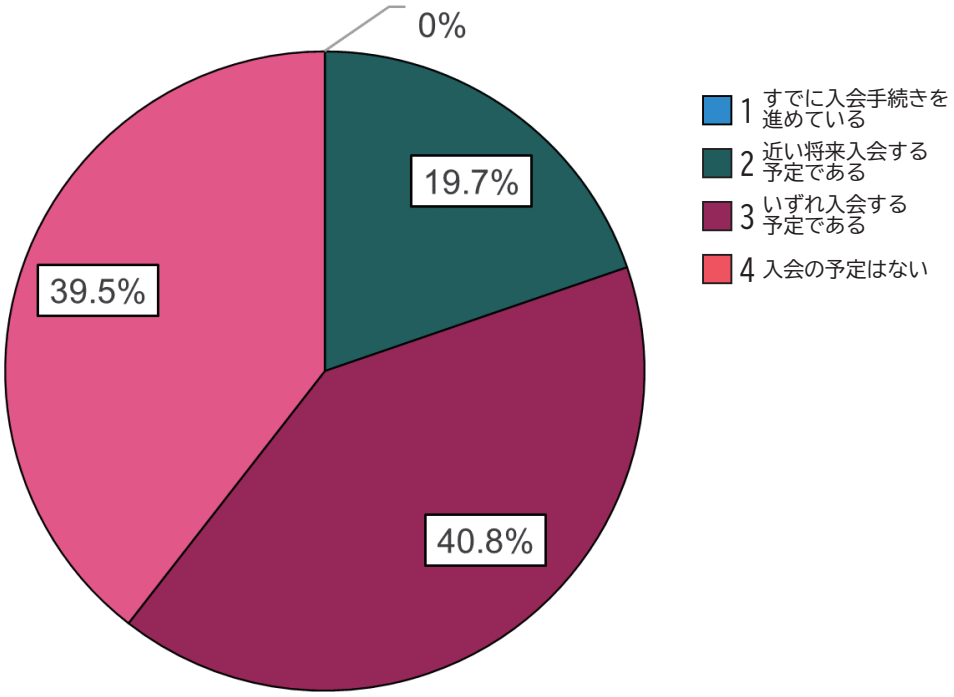
Q20-1 あなたが日本社会福祉学会に入会していない理由は何ですか。その理由として、当てはまるものをすべて選んでください。

「1. 日本社会福祉学会の存在を知らなかったから」10（13.2%）、「2. 日本社会福祉学会の名前は知っているが活動内容まで知らないから」17（22.4%）、「3. 固いイメージがあるから」4（5.3%）、「4. 研究職が参加しているイメージがあるから」10（13.2%）、「5. 社会福祉分野全般をカバーしているため専門性に欠けるため」4（5.3%）、「6. 他にもっと魅力的な学会があるため」5（6.6%）、「7. 会費が高いから」4（5.3%）、「8. 入会の際の推薦人が見つからないから」13（17.1%）、「9. 学会活動そのものに興味がないから」4（5.3%）、「10. タイミングがなかっただけ」62（81.6%）、「11. 勧誘される機会がなかったため」50（65.8%）、「12. その他」5（6.6%）だった。



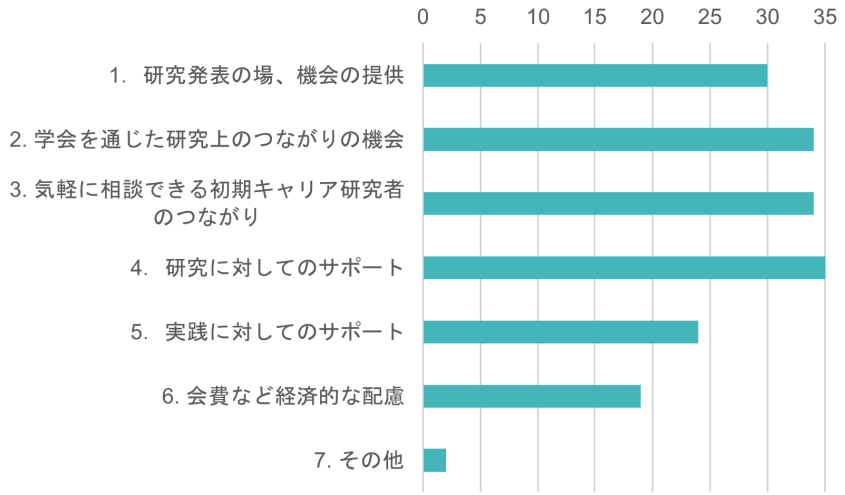
Q20-2【Q20 で「入会していない」と回答した方にお聞きします】あなたは今後、日本社会福祉学会に入会する予定はありますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。

「1. すでに入会手続きを進めている」は 0、「2. 近い将来入会する予定である」は 15（19.7%）、「3. いずれ入会する予定である」31（40.8%）、「4. 入会の予定はない」30（39.5%）だった。



Q20-3【Q20 で「入会していない」と回答した方にお聞きします】
どんなことがあれば日本社会福祉学会への入会を考えられますか。その理由として、当てはまるものをすべて選んでください。

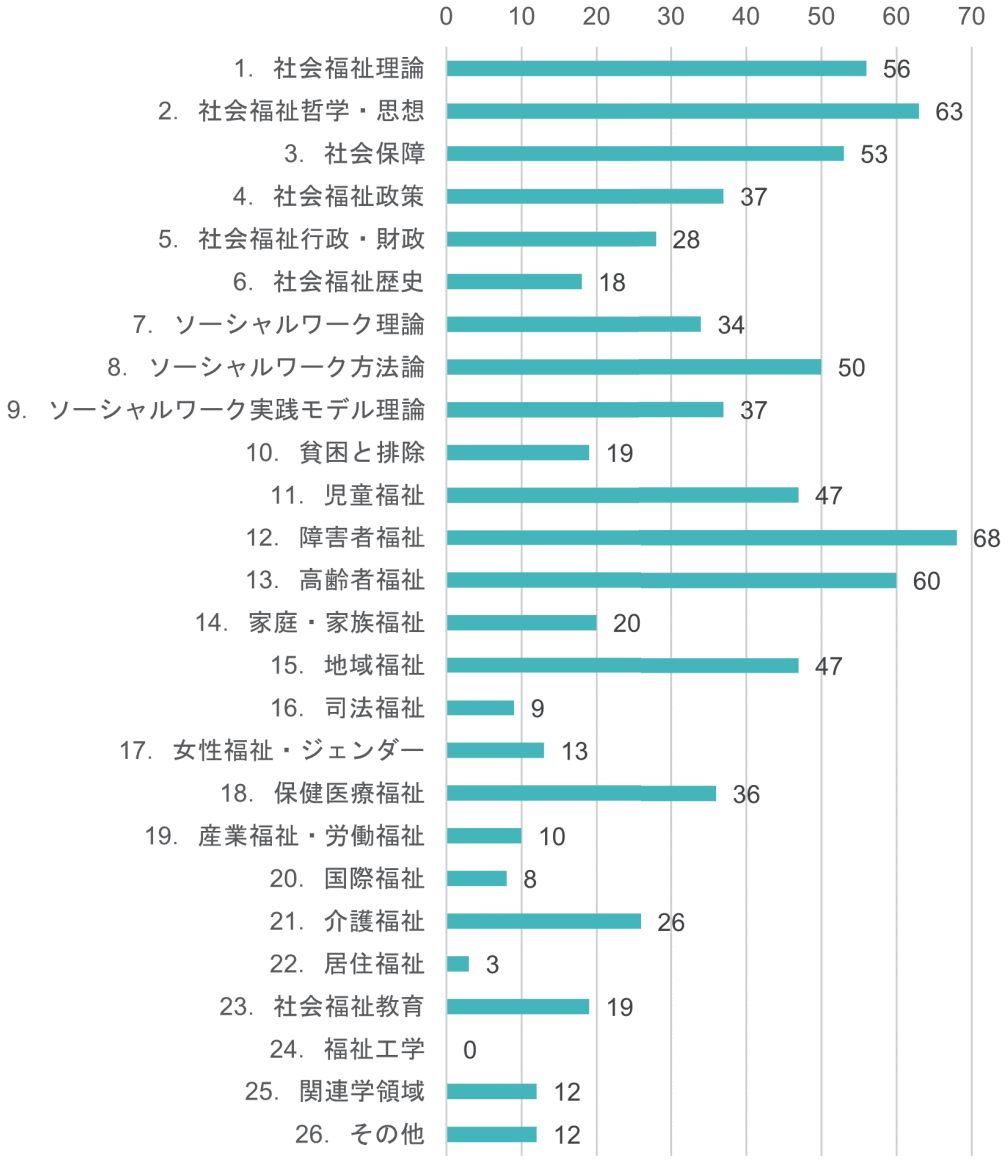
「1. 研究発表の場、機会の提供」は 30（39.5%）、「2. 学会を通じた研究上のつながりの機会」は 34（44.7%）、「3. 気軽に相談できる初期キャリア研究者のつながり」は 34（44.7%）、「4. 研究に対してのサポート」は 35（46.1%）、「5. 実践に対してのサポート」は 24（31.6%）、「6. 会費など経済的な配慮」は 19（25.0%）、「7. その他」は 2（2.6%）だった。



(5) 日本社会福祉学会について

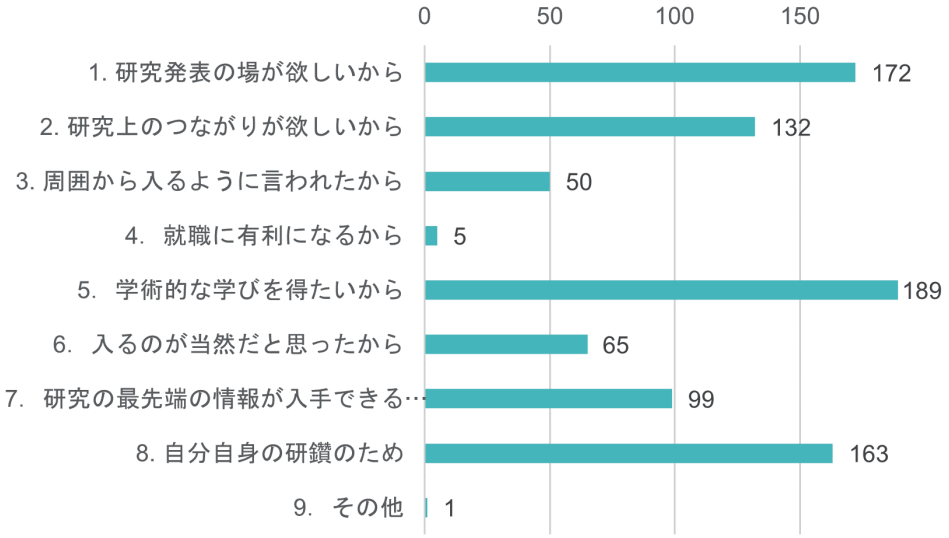
Q21 あなたの研究領域は、以下のうちどれにあたりますか。主要なもの 3 つまでを選んでください。

「1. 社会福祉理論」は 56（21.1%）、「2. 社会福祉哲学・思想」は 63（23.8%）、「3. 社会保障」は 53（20.0%）、「4. 社会福祉政策」は 37（14.0%）、「5. 社会福祉行政･財政」は 28（10.6%）、「6. 社会福祉歴史」18（6.8%）、「7. ソーシャルワーク理論」は 34（12.8%）、「8. ソーシャルワーク方法論」50（18.9%）、「9. ソーシャルワーク実践モデル理論」37（14.0%）、「10. 貧困と排除」は 19（7.2%）、「11. 児童福祉」47（17.7%）、「12. 障害者福祉」68（25.7%）、「13. 高齢者福祉」60（22.6%）、「14. 家庭･家族福祉」20（7.6%）、「15. 地域福祉」47（17.7%）、「16. 司法福祉」9（3.4%）、「17. 女性福祉・ジェンダー」13（4.9%）、「18. 保健医療福祉」36（13.6%）、「19. 産業福祉・労働福祉」10（3.8%）、「20. 国際福祉」8（3.0%）、「21. 介護福祉」26（9.8%）、「22. 居住福祉」3（1.1%）、「23. 社会福祉教育」19（7.1%）、「24. 福祉工学」0、「25. 関連学領域」12（4.5%）、「26. その他」12（4.5%）だった。



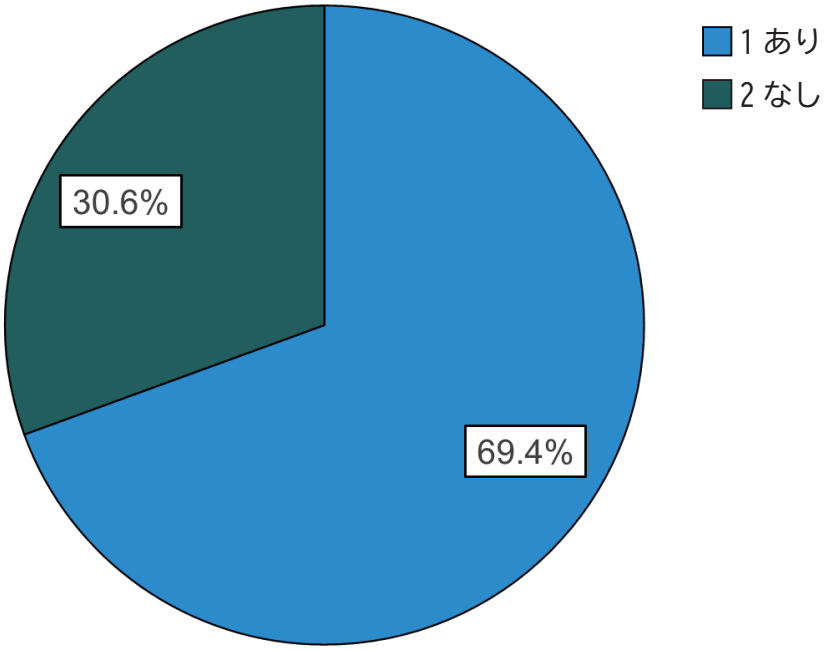
Q22 あなたが、日本社会福祉学会に入会している理由は何ですか。その理由として、当てはまるものをすべて選んでください。

「1. 研究発表の場が欲しいから」172（64.9%）、「2. 研究上のつながりが欲しいから」132（49.8%）、「3. 周囲から入るように言われたから」50（18.9%）、「4. 就職に有利になるから」5（1.9%）、「5. 学術的な学びを得たいから」189（71.3%）、「6. 入るのが当然だと思ったから」65（24.5%）、「7. 研究の最先端の情報が入手できるから」99（37.4%）、「8. 自分自身の研鑽のため」163（61.5%）、「9. その他」1（0.4%）だった。



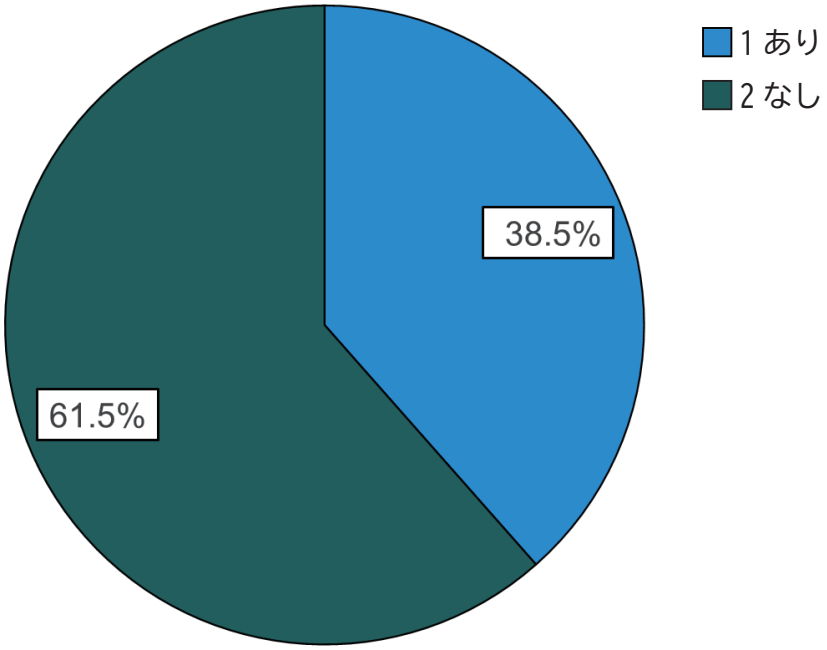
Q23-1 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会の全国大会（春季大会・秋季大会含む）に参加したことがありますか。「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

「1. あり」184（69.4%）、「2. なし」81（30.6%）だった。「1. あり」と回答した方の参加回数は、1 回から 20 回まで、平均 3.6 回だった。



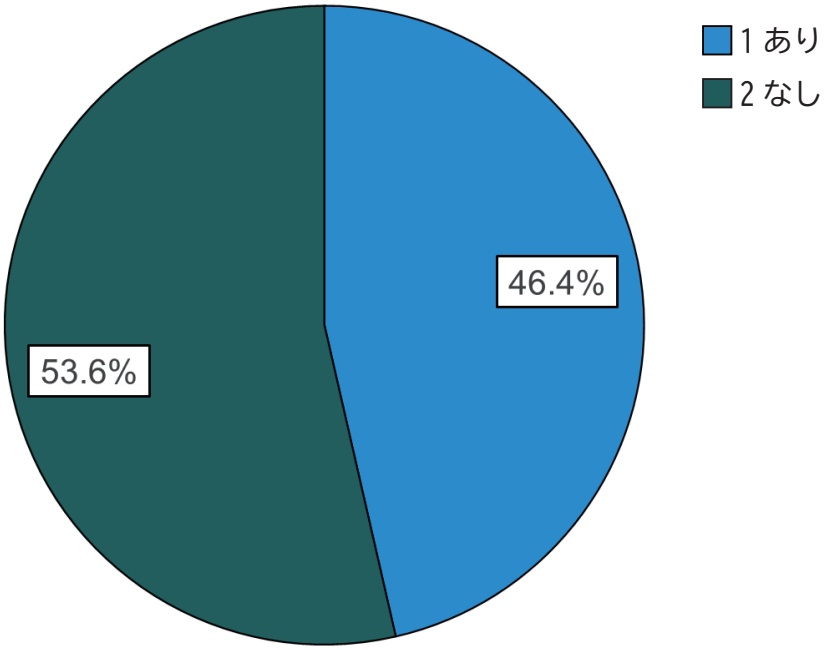
Q23-2 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会の全国大会（春季大会・秋季大会含む）で発表したことがありますか。「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

「1. あり」は 102（38.5%）、「2. なし」は 163（61.5%）だった。「1. あり」と回答した方の発表回数は、1 回から 10 回まで、平均 2.4 回だった。



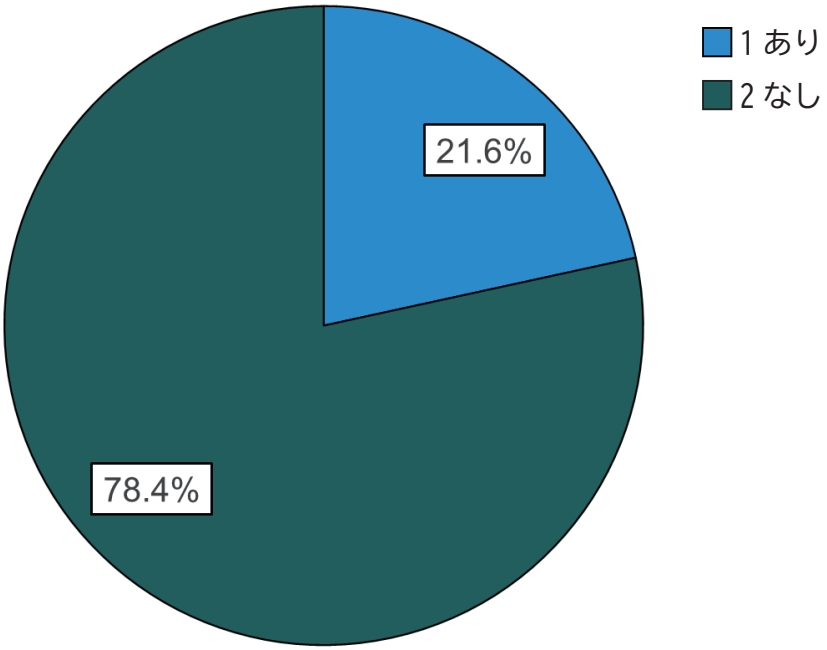
Q24-1 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会のブロック大会に参加したことがありますか。「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

「1. あり」は 123（46.4%）、「2. なし」は 142（53.6%）だった。「1. あり」と回答した方の参加回数は、1 回から 15 回まで、平均 2.4 回だった。



Q24-2 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会のブロック大会で発表したことがありますか。「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

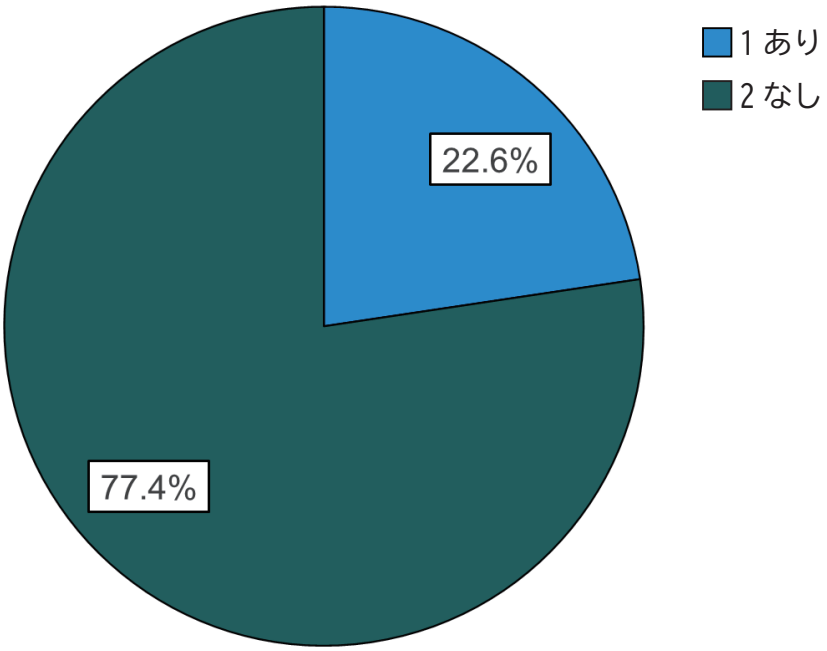
「1. あり」は 57（21.6%）、「2. なし」は 207（78.4%）だった。「1. あり」と回答した方の発表回数は、0 回から 8 回まで、平均 2.0 回だった。



Q25 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会に論文を投稿したことがありますか。

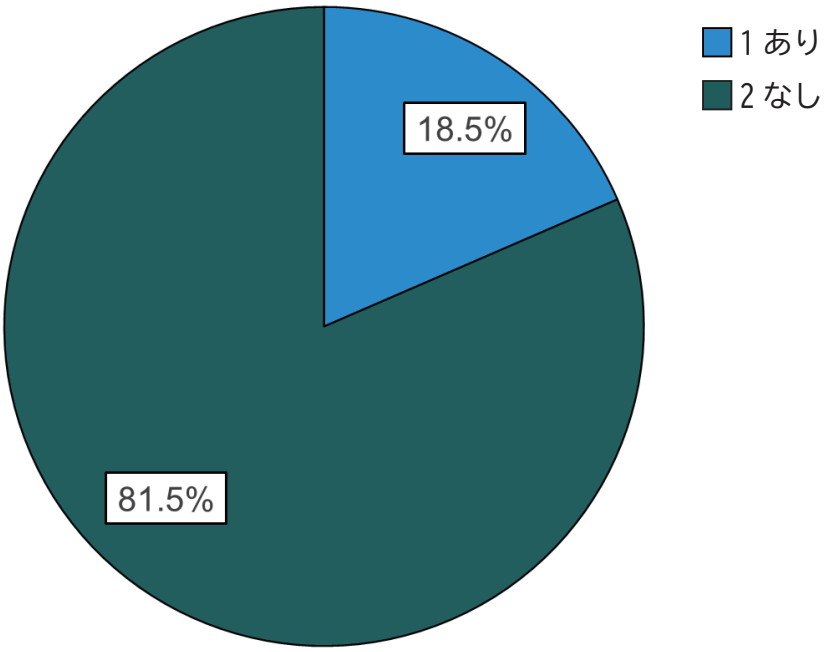
（１）「社会福祉学」への投稿

「1. あり」は 60（22.6%）、「2. なし」は 205（77.4%）だった。



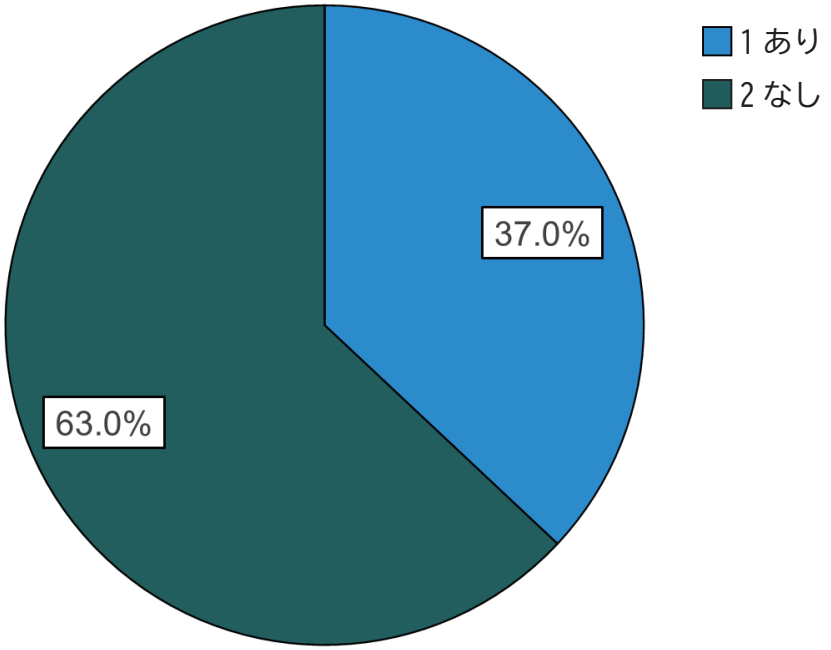
（２）ブロックが発行している学術誌への投稿

「1. あり」は 49（18.5%）、「2. なし」は 216（81.5%）だった。



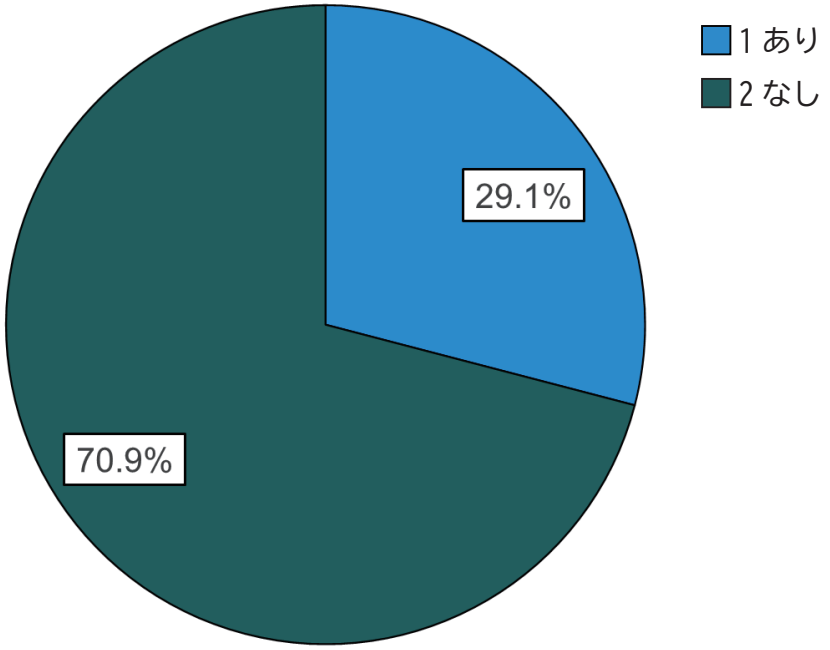
Q26 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会が設ける「大会参加費免除（学生）」の制度を使ったことがありますか。「2. ない」と答えた方、その理由を教えてください。

「1. あり」は 98（37.0%）、「2. なし」は 167（63.0%）だった。使用しない理由について、「1. 知らなかったから」が 97（51.0%）、「2. 使いづらいから」23（14.5%）、「3. その他」13（8.2%）、「対象外」が 25（15.7%）だった。



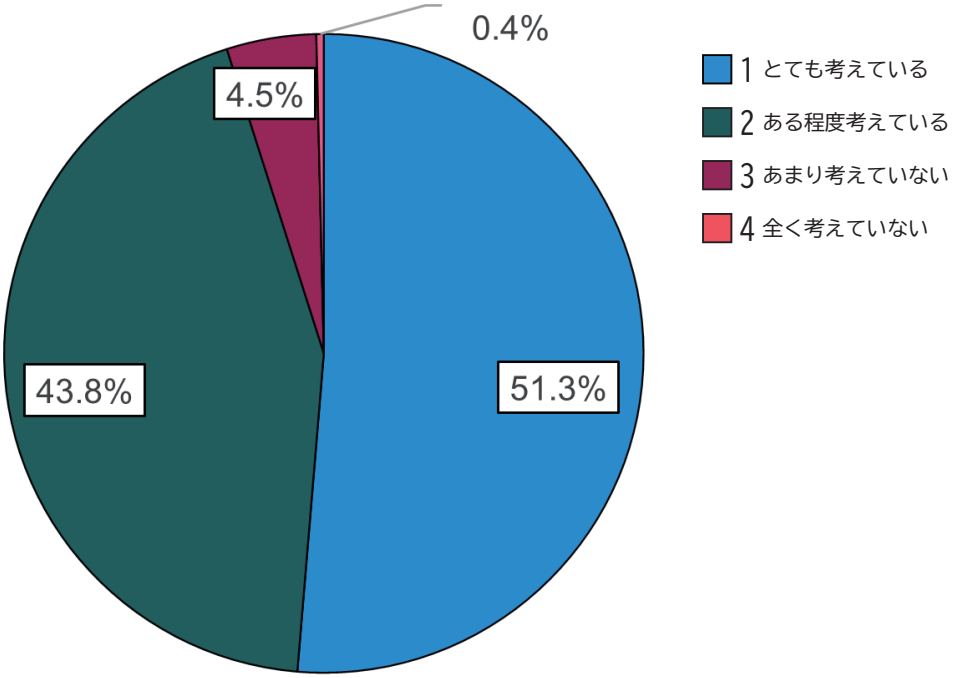
Q27 あなたは、これまでに、日本社会福祉学会全国大会（秋季大会）の「スタートアップ・シンポジウム」（「旧若手研究者のためのワークショップ」）に参加したことがありますか。

「1. あり」は 77（29.1%）、「2. ない」は 188（70.9%）だった



Q28 あなたは、これからも日本社会福祉学会の学会員を継続しようと考えていますか。最も当てはまるものを 1 つ選んでください。

「1. とても考えている」は 136（51.3%）、「2. ある程度考えている」は 116（43.8%）、「3. あまり考えていない」は 12（4.5%）、「4. 全く考えていない」1（0.4%）だった。



Q29 あなたは、日本社会福祉学会に対して、どのような要望がありますか。それぞれの項目について、最も当てはまるものを 1 つ選んでください。

	平均値	標準偏差
[学会年会費の値下げ・減免制度	1.81	0.885
若手会員の企画できる部会	1.86	0.762
指導が受けられる機会	1.99	0.877
託児所・一時保育	2.57	1.119
優秀演題・ポスター賞	2.28	0.925
女性研究者奨励賞	2.26	1.023
若手の研究プロジェクトの助成	1.83	0.899
海外学会での発表助成	2.06	0.981
海外派遣・海外研究者の招聘の助成	2.12	1.014
論文投稿時の英文校閲の助成	1.67	0.79
若手会員が投稿できるコーナー	2.08	0.899
学会運営役員の若手枠・女性枠の創設	2.21	0.953

所属と立場による差

Q7 でその他の人＝研究職についていない人と、1-6 の研究職とを比較した。

Q8「研究に専念できる環境」は、研究職の方があると答えた（t(339)=-2.980, p=.002,d=.805)。

Q10「研究費」は、研究職の方があると答えた（t(339)=-14.072, p<.001,d=.891)。

Q11「経済的負担感」は、研究職の方がないと答えた（t(339)=4.002, p<.001,d=.940)。

Q6 で、「1. 国立（国立大学法人）の大学」「2. 公立（公立大学法人）の大学」「3. 私立の大学」「4. 海外の大学」「5. 公立の短期大学」「6. 私立の短期大学」「7. 海外の短期大学」「8. 専門学校」と回答した人を「教育機関」所属とし、「9. 国公立の研究機関」「10. 私立の研究機関」「11. 海外の研究機関」「12. 日本学術振興会」と回答した人を「研究機関」所属とし、「13. 行政機関」「14. 社会福祉の機関・施設」「15. 医療機関・施設」「16. 独立・開業」を「実践機関」所属とし、「17. 特に決まった勤務先はない（アルバイト等を含む)」を所属なしとした。

有意差があったのは以下の通り。

Q8「研究に専念できる環境」は、「実践機関」が「教育機関」「所属なし」よりもないと答えた（F(3,315)=11.371, p<.001, η p2=.098)。

Q9「研究に専念できる時間」は、「実践機関」が、他のどの所属よりもないと答えた。「所属なし」は、「教育機関」よりないと答えた（F（3,315）=16.247, p<.001, ηp^2=.134)。

Q10「研究費」は、「実践機関」が他のどの所属よりもないと答えた。「所属なし」は、「教育機関」よりないと答えた（F（3,315）=54.109, p<.001, η p2=.340)。

Q11「経済的負担感」は、「教育機関」の方が「実践機関」よりも大きいと答えた（F（3,315）=4.999, p<.002, η p2=.045)。

2. 自由記述の分析

ここからは、調査項目として設定した３つの自由記述項目を整理した結果を示す。回答は内容により分割し、回答者が特定されないよう配慮を行なった。

(1) 新型コロナウイルス感染拡大による影響

第一に、新型コロナウイルス感染拡大による影響についての自由記述を整理する。これは、「Q13　あなたは、新型コロナウイルス感染拡大によって、研究活動やキャリア形成に負の影響があったと感じたことはありますか」という問いに対して、【「1 大いにある」「2 ある程度ある」】と回答した方に対して、具体的な影響を問う自由記述を設定したもので、その結果を整理したものが以下となる。

①調査への影響では、特に「インタビュー調査への影響」や「フィールドワークへの影響」について、多く寄せられた。「インタビュー調査への影響」では、インタビュー調査が難しくなったり、対面での実施が困難になったこと、依頼すること自体に抵抗感があるという意見もあった。「フィールドワークへの影響」では、対人援助の場面へのフィールドワークが制限され、延期になったり、断られたなどの意見があった。同様に、「実践・現場への調査依頼の影響」としても、福祉施設や介護施設への立ち入り制限、高齢者支援を行う現場に対する調査が困難になったことなどがあげられ、なかには「２年間研究活動ができなかった」という意見もあった。「調査実施の困難」としても、データが集まりにくくなったり、リサーチの実施が難しいことなど調査活動の制限が寄せられている。さらには、「調査の中断・キャンセル」が生じたという意見もあった。こうした結果から、調査方法の変更、対象の変更、研究の遅延によるスケジュールの変更など「調査方法・研究計画の変更」を行ったという意見も多くあった。こうした意見から、特に、社会福祉の実践への訪問や対面でのインタビュー調査を計画していた研究者に大きな影響が及んだと考えられる。また、一部ではあったがオンライン化が進んだことにより、調査をオンラインで実施した等の「オンラインの活用」についても意見が寄せられた。

②実践・業務への影響として、「コロナによる業務の負担増」が多く寄せられた。リモート授業やオンライン化への対応、実習の調整、実践現場での感染対策などの業務等により、研究に充てる余裕がなくなっているという回答が多かった。中には、「休む暇もない」「心身ともに限界で休学せざるを得なかった」という意見もあった。特に地域での実践ができなくなったこと等の「実践への影響」、アルバイトのシフトが削られたために十分な収入が得られなくなった等の「経済的な困難」も寄せられている。

③研究環境への影響としては、「大学・研究室の使用制限」による困難が寄せられた。たとえば、研究室の使用制限、大学自体への入構制限、図書館の閉鎖によって大きな影響受けたという回答があった。また、ゼミや指導がオンラインになったことでの「研究指導への影響」も寄せられた。特に対面で会ったことのないまま指導を受けることのハードルの高さ、オンラインやメールでの指導では十分ではないという意見も寄せられている。都道府県外への移動が制限されたことなどの「移動の制限」もあった。

④つながりの希薄化については､「研究者同士のつながりの減少」について重要な意見が寄せられた。具体的には、「これまで研究する中で助け合っていた人間関係が希薄化した」「学会・大会がオンラインで研究者のつながりが作れない」などにより、人とのつながりを作ることが難しい状況になっていることがわかった。その延長線上に「研究の遂行ができず、その間誰にも相談することもできなかった」等の「相談できない」事態に陥っている初期キャリア研究者もいることがわかる。

さらには、⑤海外研究への影響として、海外渡航の制限による「海外出張・調査の制限」、「海外大学院への留学の機会を失った」「私費で留学中なので母国の家族への負担が大きい」などの「留学への影響」が寄せられた。

⑥心身の健康への影響として、コロナ禍による価値観の変化や不安の増大、心身の不調などによる「モチベーションの減少」や、感染したことでの業務や研究活動への支障などの「感染による影響」が寄せられた。

最後に、⑦学会・研修機会への影響として、「研修の減少」と「発表機会への影響」があげられた。こうした機会の減少によって、「研究者と意見交換できる機会が減った」ことも大きな影響と考えられる。

①調査への影響	インタビュー調査への影響（27）
	フィールドワークへの影響（21）
	実践・現場への調査依頼の影響（21）
	調査の中断・キャンセル（12）
	調査方法・研究計画の変更（12）
	調査実施の困難（11）
	オンラインの活用（3）
②実践・業務への影響	コロナによる業務の負担増（22）
	経済的な困難（3）
	実践への影響（3）
	オンライン授業の負担（2）
③研究環境への影響	大学・研究室の使用制限（15）
	研究指導への影響（11）
	移動の制限（7）
④つながりの希薄化	研究者同士のつながりの減少（10）
	相談できない（3）
⑤海外研究への影響	海外出張・調査の制限（8）
	留学への影響（3）
⑥心身の健康への影響	モチベーションの減少（3）
	感染による影響（4）
⑦学会・研修機会への影響	研修の減少（3）
	発表機会への影響（2）

(2) 研究活動環境や将来の展望等に関するニーズ

次に、「Q18　研究活動環境や将来の展望等に関して、具体的にどのようなニーズがありますか」という問いについての自由記述の整理を示す。

①研究のための時間・環境・費用では、「研究のための時間と環境」の確保の難しさや、「研究のための時間」がないという意見の他、図書館の充実や使用権限、実験や統計ソフトの使用等の「研究のための環境」についても意見が寄せられた。さらに、研究費や競争的資金獲得の難しさから安定的に研究を行える経済状況にないという「研究のための費用」についても多くの意見が寄せられた。研究助成や出版助成への希望もあった。特に、「実践･研究の両立と安定」については多くの意見があがった。たとえば、実践からアカデミック・ポストに転職すれば収入が減少するため生活が維持できないこと、生計を立てるための実践の仕事が研究の時間を奪っていることなど、研究と実践のバランスを取ることの希望と難しさがあることがわかる。また、そもそも「研究のできる所属」がないことや、「ハラスメントをなくす」必要があることについても切実な意見があがった。

②ワーク・ライフ・バランスのためにとして、「育児の両立」と「プライベートとの両立」について寄せられた。「育児の両立」については、出産・育児によって、業績が減少すること、時間的な制限が主に女性に課せられることなどの大きな課題が指摘されている。学会に対しても、オンライン参加の継続や託児サービスの充実についての意見があった。また､「プライベートとの両立」については、介護等との両立やプライベートとのバランスの取れる業務量を希望する声があった。また、「将来の不安定さのために結婚できない」という意見もあった。

③アカデミック・ポストでの研究の課題としては、特に「業務と研究のバランス」について多くの意見が寄せられた｡たとえば､授業のコマ数の多さや実習対応､教育や学生指導､校務や地域貢献によって研究に手が回らないほどの業務量を抱えていることがあげられている。また、大学等のアカデミック･ポスト内においても､研究への理解がないことの苦しさも寄せられた。「研究の関する事務の多さ」によって研究がスムーズに進行しないこと、学科閉鎖等の「大学自体の存続」の課題、「成果中心の傾向への不安」もあがった。

④安定した就職への課題では、特に常勤での「大学教員のポストに」就きたいという希望が寄せられたものの、同時に「安定したポストがない」こともあげられた。採用枠が減少していることから公募に対する競争率が高いことに不安が寄せられている。また、ポストに就いたとしても「任期付であることの不安」もあった。契約更新の不安や身分の保証がないことでの研究中断の不安、結婚･出産･育児の諦めなどもあり、任期の撤廃が望まれていた。「採用の不透明さ」に就いては、教育業績が重視される傾向が初期キャリア研究者にとってのハードルとなっているとの意見があった。また、大学の採用基準が不透明であることや応募フォームの不統一による負担感も寄せられた。そのため､「キャリアについての相談」ができる場や、「採用に関する情報」を得られる機会が望まれていた。特に、非常勤講師等の募集情報について入手したいという意見が複数あった。

⑤研究のこれからの展望として、「研究を公表し貢献したい」という意見もあったが、「研究が役立つのか不安」であり、「将来がわからない」という先行きの見通せなさが寄せられた。

こうした課題に対して、⑥ネットワークづくりの要望も多く寄せられた。研究者としての「ロール

モデルとの出会いの場」や「初期キャリア研究者との交流」、「共同研究の場」と「研究に関する仲間づくり」の機会が求められていた。また、論文執筆や研究に対する「助言・指導の機会」や調査法等の「学びの機会」を求めているとの意見もあった。同じ実践領域の研究者との「実践とのつながり」が必要との意見もあった。

最後に、⑦調査・投稿をめぐる課題として、査読スピード等の「査読の課題」、実践者が倫理審査を受けられる場がないこと等の「倫理審査の課題」もあげられた。

①研究のための時間・環境・費用	研究のための時間・環境・費用（3）
	研究のための時間（2）
	研究のための環境（8）
	研究のための費用(13)
	実践・研究の両立と安定（16）
	研究のできる所属（3）
	ハラスメントをなくす（3）
②ワーク・ライフ・バランスのために	育児との両立（8）
	プライベートとの両立（3）
③アカデミック・ポストでの研究の課題	業務と研究のバランス（12）
	研究の関する事務の多さ（2）
	大学自体の存続（2）
	成果中心の傾向への不安（1）
④安定した就職への課題	大学教員のポストに（8）
	安定したポストがない（10）
	任期付であることの不安（6）
	採用の不透明さ（4）
	キャリアについての相談（4）
	採用に関する情報（4）
⑤研究のこれからの展望	研究を公表し貢献したい（4）
	研究が役立つのか不安（2）
	将来がわからない（3）
⑥ネットワークづくり	ロールモデルとの出会いの場（4）
	初期キャリア研究者との交流（3）
	共同研究の場（5）
	研究に関する仲間づくり（4）
	助言・指導の機会（6）
	学びの機会（3）
	実践とのつながり（2）

⑦調査・投稿をめぐる課題	査読の課題（2）
	倫理審査の課題（2）

（3）研究活動環境や将来の展望等に関するニーズ

最後に、「Q30　日本社会福祉学会に対する要望」についての自由記述の整理を示す。

まず、①交流の機会についての要望があった。「初期キャリア研究者の交流」については、年齢を問わない初期キャリア研究者の交流の機会が望まれていた。また、「ベテラン研究者」との「世代を超えた交流」の機会やアカデミック・ポストに属していない「実践家研究者の交流」の機会も希望があがった。特に、「気軽に参加できる企画・サロン」への要望もあり、現在実施されている CS-NET の取り組みの活用が期待される。

②研究支援としては、「研究費の助成」、「ブロック助成」、「出版助成制度」などの経済的な研究支援があげられた。また、英語での発表機会等の「海外研究への支援」、「年齢によらない初期キャリア研究者支援」、他の研究者の手伝い等の「研究補助の機会」、特にコロナ禍に起因する「研究へのモチベーション」へのサポートも要望があった。また、「研究法を学べる機会」、「指導を受けられる場」があればとの声も寄せられた。

③査読への要望としては、「査読のハードル」が高いこと、再査読のスケジュールを知りたい、掲載数を増やして欲しい、初学者向けの投稿機会が欲しいなどの「査読システムへの意見」も寄せられた。

④実践家研究者への支援について、「実践家研究者への倫理審査」が受けられず、研究が進まないことが提起され、「実践研究者の発表の場」が欲しいことも要望としてあげられた。

⑤「研究」への展望としては、所属大学が研究や論文掲載の価値を評価しない環境であることの苦境から「研究の価値を高める」こと、研究の裾野を広げるような「学際研究の承認」が要望として寄せられた。また福祉実践が「食べていける仕事へ」なるよう働きかけてほしい、本調査の結果を広く公開し、国や大学に対して初期キャリア研究者を取り巻く「政策への働きかけ」を行なって欲しいとのソーシャル・アクションについても要望があった。

⑥学会・大会への意見として、入会手順がわかりにくいことなど「入会に関する手続き」に対する意見があった。また、社会福祉士会との区別がつかない、領域学会には入っているが日本社会福祉学会を知らないといった「学会の知名度」の問題もあげられた。そのため、学会以外でも身近に感じられるような「学会員以外への情報提供」が求められる。初期キャリア研究者にとって会費の負担が大きいことから「会費の減免」についても要望があった。また、出張手続きのために学会プログラムの公表を早めてほしい、オンライン参加したい、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを使った発表を行いたい、バリアフリーな大会にしてほしい、発表のレベルを上げて欲しい等の「大会のあり方」についての意見も寄せられた。

最後に、⑦委員会･調査への意見として、「いつも同じメンバーが中心となっている」との指摘、「女性研究者」「初期キャリア研究者」と区分することによる分断、大学等の研究機関に所属している研究者向けの調査にように感じる、といった「調査の設計への意見」があった。同時に、「調査への感謝」

も寄せられた。改めて、貴重な時間を調査への回答に充ててくださったことに感謝申し上げる。

①交流の機会	初期キャリア研究者の交流（4）
	世代を超えた交流（2）
	実践家研究者の交流（3）
	気軽に参加できる企画・サロン（2）
②研究支援	研究費の助成（4）
	海外研究への支援（2）
	年齢によらない初期キャリア研究者支援（3）
	研究補助の機会（1）
	ブロック助成（1）
	出版助成制度（1）
	研究へのモチベーション（2）
	研究法を学べる機会（2）
	指導を受けられる場（1）
③査読への要望	査読のハードル（2）
	査読システムへの意見（4）
④実践家研究者への支援	実践家研究者への倫理審査（1）
	実践研究者の発表の場（1）
⑤「研究」の展望	研究の価値を高める（1）
	学際研究の承認（2）
	食べていける仕事へ（1）
	政策への働きかけ（2）
⑥学会・大会への意見	入会に関する手続き（3）
	学会の知名度（2）
	学会員以外への情報提供（2）
	大会のあり方（5）
	会費の減免（3）
⑦委員会・調査への意見	調査の設計への意見（4）
	調査への感謝（4）

第Ⅳ部　提言

初期キャリア研究者を対象としたインタビュー調査とアンケート調査から明らかになった、初期キャリア研究者の研究活動環境および本学会へのニーズをもとに、本学会と社会および教育機関に対して提言したい。

1. 日本社会福祉学会への提言

(1) 初期キャリア研究者の実態を踏まえた学会の周知

アンケート調査回答者の 15.2% が本学会の会員ではなかった。入会していない理由としては、タイミングがなかった(62%)、勧誘される機会がなかった(50%)が大半を占めている。自由記述においても、入会手順がわかりにくい等の意見があがっていた。また、インタビュー調査結果では、研究レベルが高く敷居が高いといったイメージから入会を躊躇している様子が伺える。一方で、60.5% の人が入会する予定であった。このようなことから、初期キャリア研究者が本学会に関する十分な情報を持っておらず、興味はあるものの、入会に至っていない様子が確認された。

社会福祉研究における代表的な学会であるというイメージは保持しつつ、初期キャリア研究者が学会の活動内容を理解できるような取り組みが必要だと言える。具体的には、Twitter 等の SNS を含めた様々な媒体を活用した学会活動の発信をより活性化するとともに、すでに実施をしている地域ブロックでの活動を学会員以外の研究者へも発信することで、より身近な地域ブロックの活動に参加して本学会の活動を知ってもらい、会員から勧誘をする等の積極的な働きかけも必要だと考えられる。

そもそも学会は会員の研究成果の発表や知識の交換等によって機能するものである。そのため、個々の会員による研究活動等によって、社会福祉学の進歩と普及といった日本社会福祉学会の目標を達成することができるという意識を各会員が持ち、同じ志を持つ初期キャリア研究者に本学会の情報を提供することが必要だと言える。

大会は学会活動を社会に発信するひとつの重要な機会だと言えるが、学生を対象とした大会参加費免除制度の使用は 37% にとどまり、その理由として「知らなかった」とした人が 51% を占めていた。大会の参加申し込みサイトまで辿り着けば、「学生会員」登録者の参加費が免除になることは明白であるが、その前に諦めてしまっている様子が伺える。大会サイトよりも前の段階での周知が求められる。

一方、本学会に所属する初期キャリア研究者の交流や情報交換等を目的とした CS-NET（Creative Support Network）に関しては、本学会のホームページに特設サイトを設けるなど、初期キャリア研究者がアクセスしやすい環境を整えてきた。また、メーリングリストも開始する。このような機会を活用して、前述のような初期キャリア研究者のためのサポートを発信していく必要があるだろう。また、今年度から開始した本委員会主催の CS-NET のサロンについても、継続的に実施することで、学会員以外の初期キャリア研究者に本学会を知ってもらう機会としたい。

(2) 社会福祉実践者へのサポート

今回のアンケート調査では、調査対象者の 34% が、行政機関、社会福祉機関・施設、医療機関・施

設、独立・開業といったソーシャルワーク実践機関に所属していることが明らかになった。このような初期キャリア研究者は、研究に専念できる環境、時間、研究経費が、教育機関や研究機関に所属する研究職と比べて、明らかに不足していることが把握された。自由記述やインタビュー調査においても、研究と仕事を両立する大変さが語られていた。

このようなことから、働きながら研究を続けている初期キャリア研究者に対するサポートが必要だと言える。具体的には、応募が可能と考えられる研究費助成に関する情報を提供する、あるいは本学会として研究費を助成すること等が考えられる。また､教育機関における非常勤講師の求人情報など、日頃実践現場で得ることが難しい研究に関連する情報の発信が求められる。これらは前述の本委員会によるメーリングリスト等が活用できるだろう。

また、研究を行うためには、倫理審査が必要になるが、大学院に所属していない社会福祉実践機関に所属している初期キャリア研究者は、倫理審査を受ける機会がないと考えられる。学会がそれを担うことは困難だと考えられるが、なんらかの仕組みを検討する必要がある。

インタビュー調査によると、研究に関する助言が欲しい、研究仲間が欲しい、同じような初期キャリア研究者で情報交換をしたい等の希望が把握されている。実践的研究の必要性が認識されている状況において、また研究職を目指す大学院生が減少している現状において、社会福祉実践者である初期キャリア研究者は社会福祉学の進歩において貴重な人材だと考えられる｡これまでどちらかと言えば、大学院生やポスドクを想定して CS-NET の活動を検討してきたが、現場での社会福祉実践者である初期キャリア研究者の状況を踏まえた活動も検討していく必要があると言えよう。

(3) 専門学校教員へのサポート

勤務先が専門学校の初期キャリア研究者は 3.8% と少数ではあるものの、大学や短期大学に比べると、明らかに研究に専念できる環境や研究費が少なく、経済的負担感が相対的に大きいことが明らかになった。

専門学校教員については詳細なニーズ把握ができていない状況ではあるが、前述の社会福祉実践を続けながら研究を行なっている初期キャリア研究者同様に、研究費の助成や情報交換等のための CS-NET の活用が必要だと言える。

(4) 初期キャリア研究者の活動機会の充実

本学会に入会していない初期キャリア研究者が入会を検討している理由として、研究に対してのサポート、研究上のつながり、初期キャリア研究者のつながり等を希望していることが把握された。また、本学会に入会している理由として、学びを得たい、研究発表の場が欲しい、自己研鑽、研究上のつながり等が明らかになっている。

研究に関するつながりや情報交換等は CS-NET のサロンなどで対応できると考えられるが、ベテラン研究者との世代を超えた交流の機会も求められており、初期キャリア研究者が主体となりニーズに応じた多様な活動を検討する必要があるだろう。また､地域ブロックにおける発表の場を増やすなど、学会大会以外の複数の発表機会の確保とその発信が求められる。

本学会への要望としては、学会運営役員の若手枠の創設、ポスター賞、女性研究者奨励賞などが挙がっていた。こられを参考にしながら、初期キャリア研究者の研究の意欲を高め、かつ学会の活動にも主体的に参加できる機会をより設ける必要がある。また、一部の地域ブロックにおいて初期キャリア研究者へのサポートが活発に実施されているが、それらを他のブロックにも拡大するとともに、全国としての活動と役割分担しながら、研究に対するサポートを検討することが今後の課題だと言える。

2. 社会・教育機関への提言

(1) 研究時間の確保

教育機関や研究機関に所属する研究職は研究に専念する時間があまりなく、講義準備・実施、実習関連業務、組織運営に関わる業務、学生指導･相談対応に多くの時間を割いている様子が明らかになった。教育機関の研究職にとっては、学生の教育は重要な役割であるが、それに加えて組織運営に関わる業務によって、十分に研究ができない状況が伺える。自由記述においても、初期キャリア研究者が業務と研究のバランスで悩んでいる様子が見られている。

新カリキュラムにおいて、社会福祉士養成におけるソーシャルワーク実習時間が増加するなど、ますます教育に関する業務は増えている現状がある。非常勤講師の数を増やし、ともに教育を実施するなど、より多くの初期キャリア研究者が研究や教育の経験をつめる機会を確保しながら、研究職が研究に打ち込める環境を整備することが求められる。社会福祉が不可欠となっている現代日本においては、社会福祉学の更なる進歩は喫緊の課題だと言える。このような状況においては、それぞれの教育機関や研究機関のみならず、社会全体として研究を推進する機運を高める必要があるだろう。

(2) ハラスメント教育の徹底

初期キャリア研究者の22.9%がハラスメントを受けた経験があると回答した。2017年に実施した「若手・女性会員の支援のあり方に関するアンケート調査」では、約半数の調査対象者がハラスメントの経験があったことを考えると、状況は改善していると言える。しかしながら、いまだアカデミックハラスメントやパワーハラスメント等を受けている初期キャリア研究者がいることは事実であり、ハラスメント教育の徹底とともに、相談しやすいハラスメントの相談体制の構築が求められる。

これら以外にも、従来から課題として認識されている任期付きポストによる将来の不安や研究環境の未整備、また育児との両立といったワーク・ライフ・バランスに関する課題等、初期キャリア研究者が直面している課題は多様であり､このような状況をふまえて､初期キャリア研究者に対するサポート等を多面的に検討および実施する必要がある。

謝辞　本調査にご協力いただきました初期キャリア研究者のみなさまに心から感謝の意を表します。

資料１

調査協力者のみなさまへ（お願い）

このたびは、お忙しい中、ご協力いただき、ありがとうございます。
本調査は、日本社会福祉学会研究支援委員会により行われるものです。
皆様からお話いただいた内容は、初期研究者に対する研究支援を考えるためのご意見とすると共に、　　それを実現する学会活動のための貴重な資料としてのみ使用いたします。
インタビューにご協力いただくにあたり、いくつか確認させていただきたく存じます。

・インタビューの所要時間は約１時間程度になります。
・調査目的は皆様の声を実践に活かし、よりよい研究支援を築くことです。
・インタビューへのご参加はあくまでも任意であり、参加しなくても不利益はありません。回答を拒否する自由がありますし、途中でやめていただくこともでき、理由も問いません。
・お話しいただいた内容は、逐語録という形で文字化いたしますが、録音テープおよび文字化された資料は、厳密に保管されます。
・また、ご希望があれば、いつでもそれをご覧いただくことができます。
・お話しいただいた内容は、研究報告書に使用させていただきます。その際みなさまのお名前 や所属等の個人情報は一切公表せず、個人や機関が特定されるなど、みなさまの不利益になることのないように十分注意することをお約束します。

本研究については、日本社会福祉学会の調査・研究活動としての位置づけを踏まえ、研究代表者が所属する立正大学倫理委員会の承認を得ています。以上のことをご了承のうえ、インタビューへのご協力およびインタビュー時の録音をご承諾いただけます場合は、下記にご署名をお願いいたします
趣旨をご理解いただき、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

研究代表者　立正大学　鈴木浩之
調査者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

承諾書

インタビューに応じ、インタビュー内容を録音し、逐語録化・文字化したデータを十分な配慮のもと、上記の目的で使用することを許可します。

2021 年　　月　　日
お名前

資料２

会員各位

日本社会福祉学会

初期キャリア研究者のニーズに係るアンケート調査へのご協力のお願い

拝啓　時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は学会活動にご協力くださり、厚くお礼申し上げます。

さて、本学会では、初期キャリア研究者のニーズ調査を実施することとなりました。初期キャリア研究者に対して、学会としてどのようなサポートや活動を行うことができるかを検討することを目的としております。皆さんのご意見に基づき、有効な支援策を検討したいと考えています。

本調査は、文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を踏まえ実施いたします。収集した調査データは、統計的に処理されますので、個人が特定されることはありません。また，本調査の目的以外に使用することはありません。収集した調査データは適正に管理し、分析後に廃棄します。なお、本調査は理事会の承認のもと実施しています。

調査結果につきましては、報告書にとりまとめ、日本社会福祉学会のホームページに掲載し、ご回答いただいみなさまが閲覧できるように致します。所用時間は、およそ 15 分です。

ご多忙の折、甚だ恐縮ではございますが、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

記　　敬具

1.　調査対象者

学会員に限らず、以下のいずれかに該当する方

・大学院修士課程・博士前期課程在学者
・博士後期課程在学者
・修士課程・博士前期課程修了後５年以内の者（在学者を除く）
・博士後期課程修了後５年以内の者（在学者を除く）

2.　調査実施期間

2022 年 8 月 25 日～ 2022 年 9 月 30 日

3.　調査方法

オンライン調査。

2022 年 8 月 22 日より、日本社会福祉学会ホームページ上（https://www.jssw.jp/）に、URL と QR コードを掲示します。

4.　調査に関する問い合わせ先

fukushikenkyu@gmail.com

日本社会福祉学会研究支援委員会委員長　　髙良　麻子（法政大学）

資料３

2022 年8 月25 日

初期キャリア研究者のニーズに係るアンケート調査

日本社会福祉学会では、初期キャリア研究者のニーズを把握することで、学会としてどのようなサポートや活動を行うことができるかを検討するため、アンケートを実施することとしました。

本調査は、文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を踏まえ実施いたします。収集した調査データは、統計的に処理されますので、個人が特定されることはありません。また，本調査の目的以外に使用することはありません。収集した調査データは適正に管理し、分析後に廃棄します。なお、本調査は日本社会福祉学会理事会の承認のもと実施しております。

調査結果につきましては、報告書にとりまとめ、日本社会福祉学会のホームページ等に掲載し、ご回答いただいたみなさまが閲覧できるように致します。

所用時間は、おおよそ 15 分です。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

【本アンケートにご回答いただきたい方】
学会員に限らず、以下のいずれかに該当する方
・大学院修士課程・博士前期課程在学者
・博士後期課程在学者
・修士課程・博士前期課程修了後５年以内の者（在学者を除く）
・博士後期課程修了後５年以内の者（在宅者を除く）

【アンケートの実施期間】
2022 年8 月25 日～2022 年9 月30 日

【アンケートの回答方法】
オンライン調査

【アンケートに関する問い合わせ先】
fukushikenkyu@gmail.com
日本社会福祉学会研究支援委員会委員長　髙良 麻子(法政大学)

I. 基本属性について

Q1 現在、あなたはどれに該当しますか。

1. 大学院修士課程・博士前期課程在学者
2. 博士後期課程在学者
3. 修士課程・博士前期課程修了後 5 年以内の者（在学者を除く）
4. 博士後期課程修了後 5 年以内の者（在学者を除く）
5. それ以外→ アンケートの対象外となります

Q2【Q1 で 1 または 2 を選んだ方】
あなたは、留学生ですか。

1. はい
2. いいえ

Q3 あなたの性別を教えてください。

1. 男性
2. 女性
3. 上記以外
4. 答えたくない

Q4 あなたの年齢（2022 年 8 月 1 日時点）はどれに該当しますか。

1. 20 代
2. 30 代
3. 40 代
4. 50 代
5. 60 代以上

Q5 あなたのお住まいは、次のどの地域ですか。

1. 北海道
2. 東北
3. 関東
4. 中部
5. 関西
6. 中国
7. 四国
8. 九州
9. 沖縄
10. 海外

Q6 あなたが現在勤務している組織の種類は、次のうちどれに当てはまりますか。おもなものを１つ選んでください。

1. 国立(国立大学法人)の大学
2. 公立（公立大学法人）の大学
3. 私立の大学
4. 海外の大学
5. 公立の短期大学
6. 私立の短期大学
7. 海外の短期大学
8. 専門学校
9. 国公立の研究機関
10. 私立の研究機関
11. 海外の研究機関
12. 日本学術振興会
13. 行政機関
14. 社会福祉の機関・施設
15. 医療機関・施設
16. 独立・開業
17. 特に決まった勤務先はない（アルバイト等を含む）　→Q8 へ
18. その他(　　)

Q7　Q6 で選んだ勤務先におけるあなたの現在の立場は、以下のうちどれに当てはまりますか。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 助手
6. 研究員
7. その他(　　)

Q7-1　Q7 の勤務形態をお答えください。

1. 常勤
2. 非常勤

Q7-2　Q7 の任期の有無をお答えください。

1. 任期あり
2. 任期なし

Q7-3 現在の立場や任期の条件はあなたの希望にどの程度合致していますか。当てはまるものを１つ選んでください。

1. 非常に合致している
2. 少し合致している
3. あまり合致していない
4. 全く合致していない

II. 研究活動環境について

Q8 あなたには、研究に専念できる環境（集中できる空間、周囲の人のサポートなど）がありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 十分ある
2. ある程度ある
3. あまりない
4. 全くない

Q8-1　研究に専念できるためには、何が必要ですか。当てはまるものをすべて選んでください。

1. 性能のよいパソコン
2. 快適なオンライン環境
3. 研究のための専有スペース
4. 指導教員のサポート
5. 勤務先の理解や協力
6. 自宅の研究環境
7. 家族の理解や協力
8. 子育てや介護のサポート
9. その他（　　）

Q9　あなたには研究に専念できる時間がありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 十分ある
2. ある程度ある
3. あまりない
4. 全くない

Q9-1　　多くの時間を割いている活動内容として、当てはまるものを３つまで選んでください。

1. 講義
2. 実習関連業務
3. 組織運営に関わる業務（委員会、書類作成、入試業務等）
4. 学生指導・相談対応
5. 生計をたてるためのアルバイト
6. 子育て・家事
7. 社会的活動（学会、職能団体等）
8. 地域活動
9. 現場実践
10. 自分の研究以外の依頼業務（執筆、講演、会議等）
11. その他（　　）

Q10 あなたには、研究費（所属先からの研究費、外部資金等）はありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 十分ある
2. ある程度ある
3. あまりない
4. 全くない

Q11 研究に関する持ち出しの支出に対して、あなたはどのくらいの経済的負担感がありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 大いにある
2. ある程度ある
3. あまりない
4. 全くない

Q12 あなたは、研究に関して困ったときに、身近に相談・助け合える相手がいますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 十分いる
2. ある程度いる
3. あまりいない
4. 全くいない

Q13 あなたは、新型コロナウイルス感染拡大によって、研究活動やキャリア形成に負の影響があったと感じたことはありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. 多いにある→Q13-1 へ
2. ある程度ある→Q13-1 へ
3. あまりない
4. ない
5. どちらともいえない

Q13-1【 Q13 で「1 多いにある」「2 ある程度」あると回答した方におうかがいします】
それは、どのような影響でしたか。具体的に教えてください。
（　　）

Q14 あなたは、これまで研究を続けてきた中で、何らかのハラスメント（嫌がらせ、いじめ）を受けたことがありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. ない
2. ある
3. どちらともいえない

Q14-1　どのようなハラスメントを受けたことがありますか。

1. セクシュアル・ハラスメント
2. アカデミック・ハラスメント
3. パワー・ハラスメント
4. レイシャル・ハラスメント
5. 妊娠・出産に関するハラスメント
6. 育児休職・介護休暇に関するハラスメント
7. その他のハラスメント

Ⅲ　大学院生関係：

あなたは大学院生ですか。

はい
いいえ

【大学院生のみ】
Q15 あなたは、学会誌などに論文を投稿しようとする場合に、事前に指導教員からの助言を受けていますか。当てはまるものを１つ選んでください。

1. 必ず受けている
2. 受ける場合と受けない場合がある
3. 受けていない
4. 投稿経験はない

Q16 あなたは、指導教員との関係や指導教員による指導に関して、困っていることはありますか。当てはまるものを３つまで選んでください。

1. 困っていることはない
2. 指導教員からの課題の負担が大きい
3. 指導が理解できない
4. 指導教員による指導が心理的に辛い時がある
5. 指導教員の指導を受けるための日程調整が困難
6. 指導教員の手伝いが負担になっている
7. その他　（　　）

Ⅳ. 将来展望について

Q17.　あなたは、ご自身の将来の状況についてどのような不安がありますか。当てはまるものを選んでください。

1. 将来の経済状況に関して不安がある
2. 将来の就職に不安がある
3. 現職の継続に不安がある
4. 将来の心身の健康維持に不安がある
5. 妊娠・出産による家庭と研究活動との両立についての不安がある
6. 育児と研究活動の両立についての不安がある
7. 家族の介護・介助との両立についての不安がある
8. 研究者として通用するか不安がある
9. 責任がある仕事を任されることに不安がある
10. 役職を任されることに不安がある
11. 職位向上のため研究業績を積むことにプレッシャーを感じる
12. その他（　　）

Q18　研究活動環境や将来の展望等に関して、具体的にどのようなニーズがありますか。
ご自由にお書きください。

V. 学会について

Q19　あなたは、現在、いくつの学会に入会していますか。

1. 1 学会
2. 2～3 学会
3. 4～5 学会
4. 6 学会以上
5. 学会には所属していない→Q20－1 へ

Q20 あなたは、日本社会福祉学会に入会していますか。１つだけマークをしてください。
1. 入会している→Q21 へ
2. 入会していない→Q20-1 へ

Q20-1 【Q20 で「入会していない」と回答した方にお聞きします】
あなたが日本社会福祉学会に入会していない理由は何ですか。その理由として、当てはまるものをすべて選んでください。

1. 日本社会福祉学会の存在を知らなかったから
2. 日本社会福祉学会の名前は知っているが活動内容まで知らないから
3. 固いイメージがあるから
4. 研究職が参加しているイメージがあるから
5. 社会福祉分野全般をカバーしているため専門性に欠けるため
6. 他にもっと魅力的な学会があるため
7. 会費が高いから
8. 入会の際の推薦人が見つからないから
9. 学会活動そのものに興味がないから
10. タイミングがなかっただけ
11. 勧誘される機会がなかったため
12. その他（　　）

Q20-2 【Q20 で「入会していない」と回答した方にお聞きします】
あなたは今後、日本社会福祉学会に入会する予定はありますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. すでに入会手続きを進めている
2. 近い将来入会する予定である
3. いずれ入会する予定である
4. 入会の予定はない

Q20-3 【Q20 で「入会していない」と回答した方にお聞きします】
どんなことがあれば日本社会福祉学会への入会を考えられますか。当てはまるものをすべて選んでください。

1. 研究発表の場、機会の提供
2. 学会を通じた研究上のつながりの機会
3. 気軽に相談できる初期キャリア研究者のつながり
4. 研究に対してのサポート
5. 実践に対してのサポート
6. 会費など経済的な配慮
7. その他（　　）

※日本社会福祉学会に入会していないと回答した方は、アンケートはここで終了です。
ご協力、有難うございました。

※Q21　以降は、日本社会福祉学会に入会している方にお聞きします

VI. 日本社会福祉学会について

Q21　あなたの研究領域は、以下のうちどれにあたりますか。主要なもの 3 つまでを選んでください。

1. 社会福祉理論
2. 社会福祉哲学・思想
3. 社会保障
4. 社会福祉政策
5. 社会福祉行政・財政
6. 社会福祉歴史
7. ソーシャルワーク理論
8. ソーシャルワーク方法論
9. ソーシャルワーク実践モデル理論
10. 貧困と排除
11. 児童福祉
12. 障害者福祉
13. 高齢者福祉
14. 家庭・家族福祉
15. 地域福祉
16. 司法福祉
17. 女性福祉・ジェンダー
18. 保健医療福祉
19. 産業福祉・労働福祉
20. 国際福祉
21. 介護福祉
22. 居住福祉
23. 社会福祉教育
24. 福祉工学
25. 関連学領域
26. その他(　　)

Q22. あなたが、日本社会福祉学会に入会している理由は何ですか。その理由として、当てはまるものをすべて選んでください。

1. 研究発表の場が欲しいから
2. 研究上のつながりが欲しいから
3. 周囲から入るように言われたから
4. 就職に有利になるから
5. 学術的な学びを得たいから
6. 入るのが当然だと思ったから
7. 研究の最先端の情報が入手できるから
8. 自分自身の研鑽のため
9. その他（　　）

Q23-1. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会の全国大会（春季大会・秋季大会含む）に参加したことがありますか。

1. あり
2. なし

「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

Q23-2. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会の全国大会（春季大会・秋季大会含む）で発表したことがありますか。

1. あり
2. なし

「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

Q24-1. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会のブロック大会に参加したことがありますか。

1. あり
2. なし

「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

Q24-2. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会のブロック大会で発表したことがありますか。

1. あり
2. なし

「1. あり」と答えた方、参加回数をご記入ください。

Q25. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会に論文を投稿したことがありますか。

（１）「社会福祉学」への投稿	1. あり	2. なし
（２）ブロックが発行している学術誌への投稿	1. あり	2. なし

Q26. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会が設ける「大会参加費免除（学生)」の制度を使ったことがありますか。

1. ある
2. ない

「2. ない」と答えた方、その理由を教えてください。

1. 知らなかったから
2. 使いづらいから
3. その他

Q27. あなたは、これまでに、日本社会福祉学会全国大会（秋季大会）の「スタートアップ・シンポジウム」（「旧若手研究者のためのワークショップ」）に参加したことがありますか。

1. ある
2. ない

Q28. あなたは、これからも日本社会福祉学会の学会員を継続しようと考えていますか。最も当てはまるものを１つ選んでください。

1. とても考えている
2. ある程度考えている
3. あまり考えていない
4. 全く考えていない

Q29. あなたは、日本社会福祉学会に対して、どのような要望がありますか。それぞれの項目について、最も当てはまるものを１つ選んでください。

	とても希望する	やや希望する	あまり希望しない	まったく希望しない
学会年会費（10,000 円）の値下げ・減免制度	1	2	3	4
大会での若手会員・院生が自由に企画・交流できる部会	1	2	3	4
大会での大学院生用のセッション（指導が受けられる機会）	1	2	3	4
大会時の託児所・一時保育	1	2	3	4
大会時の優秀演題・ポスター賞	1	2	3	4
女性研究者奨励賞	1	2	3	4
若手の研究プロジェクトの助成	1	2	3	4
海外学会での発表助成	1	2	3	4
海外派遣・海外研究者の招聘の助成	1	2	3	4
論文投稿時の英文校閲の助成	1	2	3	4
学会誌に若手会員が投稿できる論文以外のコーナー	1	2	3	4
学会運営役員の若手枠・女性枠の創設	1	2	3	4

Q30 日本社会福祉学会に対する要望があれば、以下の空欄に記入してください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

一般社団法人 日本社会福祉学会 研究支援委員会

委員長　　髙良麻子（法政大学）
（執筆担当：第Ⅰ部、第Ⅲ部第１章、第Ⅳ部）

委　員　　大谷京子（日本福祉大学）
（執筆担当：第Ⅲ部第２章第１節）

元委員　　鈴木浩之（立正大学）
（執筆担当：第Ⅱ部）

委　員　　永野咲（武蔵野大学）
（執筆担当：第Ⅲ部第２章第２節）

インタビュー調査実施者

委員長　　髙良麻子（法政大学）
元委員　　鈴木浩之（立正大学）
元委員　　中里哲也（帝京科学大学）
委　員　　永野咲（武蔵野大学）

初期キャリア研究者の研究活動環境とニーズ

―初期キャリア研究者に対する調査報告書―

発行日　２０２３年３月

発行　一般社団法人 日本社会福祉学会　研究支援委員会